〔新出〕石井鶴三宛北沢楽天書簡等資料九十五点――翻印と紹介

荒井真理亜
髙野奈保
多田蔵人
出口智之
杲由美
松本和也

一、はじめに

平成二十二年四月、「石井鶴三関連資料」が信州大学に寄贈されたことを契機として、当時信州大学人文学部に所属していた松本は、信州大学附属図書館からの依頼により、書簡の整理に関わってきた。[1] 荒井真理亜、髙野奈保、多田蔵人、出口智之、杲由美の五氏に協力を仰ぎ、これまで石井鶴三宛書簡の調査・翻印を進めてきた。整理・翻印した書簡はこれまで部分的に公開してきたが、[2] まとまった鶴三宛書簡があった中里介山書簡については、すでに整理チームで成果を公開した。[3] 今回はそれにつづき、北沢楽天関連の資料をまとめて公開する運びとなった。

北沢楽天（明治九年～昭和三十年、本名保次）については、本号に併録した宮田論文を参照して頂きたいのだが、ここでも最小限の確認だけはしておくことにしよう。

北沢保定の四男として神田に生まれた楽天は、東京神田錦花小学校に入学、幼い頃から絵を描くことが好きだったという。明治二十八年、横浜の週刊英字新聞ボックス・オブ・キュリオス社に入社し、F・A・ナンキベル（Frank Arthur Nankivell）から西洋漫画を学ぶ。ここでの活躍が福沢諭吉の目にとまり、明治三十二年、時事新報社に移って絵画部員として諷刺漫画を執筆、これが世に認められた。

明治三十八年、鈴木いのとの結婚と踵を接するようにして、自ら日本初のカラー漫画週刊紙『東京パック』を創刊した。以後も、『楽天パック』や『家庭パック』を発行し、日本漫画会の会長を務めるなど漫画の普及に努めた、わが国近代漫画の育ての親ともいえる存在である。

右の『東京パック』時代に、北沢楽天と石井鶴三の関係の発端がある。その概要を、石井鶴三の「年譜」から引くならば、

次のようになる。

明治三九年　一九〇六　二〇歳

五月、山本鼎の紹介で北沢楽天主筆の「東京パック」記者となり漫画を描く。学費稼ぎだけでなく一家の家計も助けた。「東京パック」は明治三八年四月創刊されたわが国初めての漫画雑誌で、当時の記者には、山本鼎、坂本繁二郎、近藤浩一路、川端龍子、森田恒友、前川千帆尾崎彦麿などがいた。大正二年「東京パック」の後身「楽天パック」の廃刊まで八年間、漫画記者生活がつづく。午前中は美術学校、午後は夜半まで有楽町のパック社で働き、アルバイトが本職、余暇が学生の生活であった。やむをえず少ない時間に全身を打ち込んで猛勉強するようになった。パック社の仕事は漫画であるが、画としての基本を固めるための勉強に身を入れて努力した。雑記帳を常に懐中し、往復の途上、学校の教室、編集局等どこにいても真剣によく観察し、描写することにつとめた。健康状態も決して良い方ではなく、苦学生として生涯のうちでもっとも極端な貧乏時代であったが、よき試練ともなった。(4)

こうした『東京パック』時代に、楽天が鶴三をどのようにみていたかについては、尾崎秀樹が次のように紹介している。

北沢楽天は『東京パック』で活躍した若い書き手にふれ、石井鶴三については「同氏は彫刻部に在学の傍ら漫画を描かれたが重厚な性格の人で非常に考え深く、いつも含蓄のあと漫画を描いた」と回想している。(5)

楽天没後のことになるが、鶴三自身が楽天との『東京パック』時代を振り返った文章もある。「私は東京パック社につとめ、日夕北沢さんの下で仕事をするようになり、北沢さんのお人柄についても、しだいにわかるようになり親愛の情を深めていった」という鶴三は、自身の働きぶりとあわせて、次のように楽天とのことを思い返している。

主筆であるからその下ではたらく者にとってはこわい人として見られがちのところだが、私は北沢さんをこわいと思ったことはなかった。また叱られたこともあるだろう、とひとからいわれて思いかえして見たが、ついぞ叱られたおぼえはなかった。まじめで正直でよく勉強する者にとっては、主筆もこわい人ではなく、また叱られることが無かったのも当然であったろうと思う。(6)

主筆と記者という関係はそれとして、「年譜」に書かれた通り、勉強熱心だった鶴三と、その姿勢を評価する楽天との、漫画を通じての信頼関係が浮かぶようである。

ただし、鶴三が『東京パック』に直接関わったのは、後続誌である『楽天パック』が廃刊となる大正二年までである。ならば、その後、二人の関係はどうなったのか。鶴三の言を引く。

東京パックが廃刊となると同時に私の漫画記者生活も終りを告げた。数えて見ると八年になる。そこでまた私は初

志をついで彫刻の勉強にはげむようになったが、北沢さんとの交遊はずっとつづいた。北沢さんはいつか兄弟のような気もちがするといわれた。弟のように私を愛して下さったものと思われる。だが私としては兄さんといって甘えるようなことはなかった。パック時代の主筆と記者の間隔はかわらなかったように思う。[7]

こうして、鶴三の漫画記者生活が終わった後にも、二人の交友はつづき、本誌の表紙にも掲げた鶴三作「北沢楽天胸像」（昭和四十六年）が、後に制作されることともなった。ただし、楽天・鶴三双方の公刊された資料等をみても、その具体的な様相までは明らかにされていない。

こうした現状に鑑みる時、本稿において初公開となる、鶴三宛楽天書簡を中心とした、楽天関連資料は、たいへん資料的価値の高いものだといえる。『東京パック』時代はもとより、その後にもつづく交流――国内外からの旅信、美術展招待状等の授受、年賀状等々、多岐にわたる内容ばかりでなく、時代的にも明治末期から昭和三十五年までの、実に五十年余に及ぶ二人の交流がうかがえるのだから（もとより、楽天没後の五年間は、妻いのからの鶴三宛書簡である）。以下に紹介する資料群からは、お互いに信頼と尊敬をよせあった、二人の芸術家の関係が彷彿とするはずである。

次節では、これまでに信州大学附属図書館所蔵「石井鶴三関連資料」から確認された、九十五点の資料について、翻印を掲げ、簡単な註をつけ、さらに画像[8]を添えて紹介する。なお、配列は原則として年次順とし、不明のものは末尾に掲げることとした。

なお、書簡の翻印に際しては、以下の原則に従った。

一、原則として原簡に忠実に翻字し、仮名遣い、漢字の誤りもそのまま残す。仮名の清濁も原簡のままとする。

一、仮名については、変体仮名は通行の字体にあらためる。片仮名を平仮名とすることは原則として行わないが、助詞の「ハ」「ニ」についてのみ、変体仮名の一種とみなして平仮名にあらためる。「トモ」「コト」「より」「廿」「卅」等の合字は開く。

一、漢字については、常用漢字・人名用漢字の字体を用いる。異体字・同字・俗字等は、すべて現行の字体とするが、別字であるものは原則として改めず、数字の大字（壱・拾・阡など）も、そのまま表記する。

一、文字が塗りつぶしてあって判読不能な場合は●で、判読可能な見せ消ちは、その文字に取消線をかけて示す。なお、どちらの場合においても、筆者による訂正がある場合には、書き加えられた文字を〔　〕内に示す。

一、欠・蝕・濡れ等によって判読不能な文字は□で示す。なお、字が強く推定できるものについては、□の右傍の〔　〕内に「カ」を附して示す。

一、判読できなかった字は‖で示す。

一、翻字者による註は《　》の中に示す。

一、尚々書は、書簡中のどこに記入されていても、本文最終行の後ろに記す。

また、各資料には、すでに信州大学附属図書館によって整理

用の仮番号が付されているが、本稿ではそれをパーレン内に残し、改めて（便宜的に書簡以外の資料も含めて）制作年順に書簡1～95と資料番号をふり、配列することとした。

〔註〕

（1）寄贈の経緯および「石井鶴三関連資料」については、『信州大学附属図書館研究』第一号掲載の各論を参照のこと。

（2）その成果は『信州大学附属図書館研究』に発表され、ネット上で閲覧可能である（http://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/about/publication.html）。

（3）荒井真理亜・髙野奈保・多田蔵人・出口智之・松本和也「〔新出〕石井鶴三宛中里介山書簡四十通翻印と註釈――『大菩薩峠』関連書簡を中心に」（『信州大学附属図書館研究』平成二十九年三月）。

（4）石井蹊子・長原ルリヤ編「年譜・書誌」（石井蹊子編『山精　石井鶴三資料集』形象社、昭和五十八年七月）、百五十五頁。

（5）尾崎秀樹「東京パック時代」（『石井鶴三全集　第一巻』形象社、昭和六十三年十二月）、百二十九頁。

（6）石井鶴三「東京パック時代の楽天先生」（『北沢楽天画集　近代漫画の創始者』番町書房、昭和四十六年六月）、頁表記なし。同文は書物の巻頭に「序文」として置かれた一文である。ここにも、楽天にとっての鶴三の重要性がうかがえる。

（7）注（6）に同じ、頁表記なし。

（8）データサイズの事情で、画像は圧縮したものを掲げてある。解像度の高いデータ閲覧を希望する場合は、その旨を書面にて、信州大学附属図書館宛照会されたい。

（松本和也）

書簡1（書7―1118）

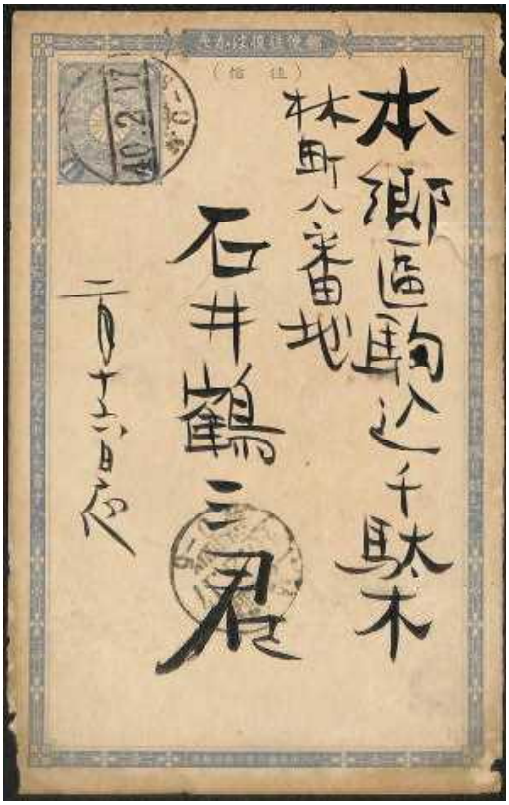
葉書　毛筆

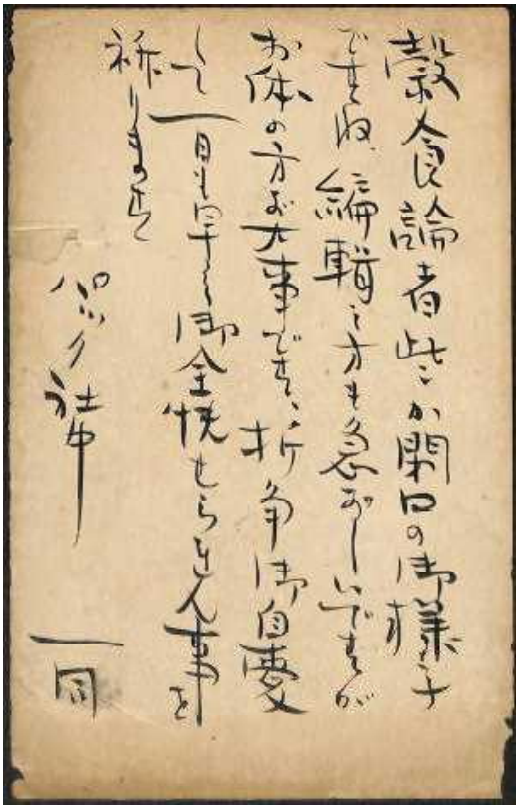
穀食論者些か閉口の御様子
ですね、編輯之方も急がしいですが
お体の方が大事です、折角御自愛
して一日も早く御全快せられん事を
祈ります

パック社中[1]　一同

［受信者］本郷区駒込千駄木／林町八番地[2]／石井鶴三君
［発信者］《記載なし》
［日付け］二月十六日夜
［消印］□□／40・2・17／前0―5

〔註〕
（1）『東京パック』は、明治三十八年四月に創刊した漫画雑誌である。昭和十六年三月まで断続的に発行された。第一次は有楽社が出資して北沢楽天が創刊し、明治四十五年五月まで続いた。主筆は北沢楽天。創刊時の発行兼編集者は桑田正作、明治四十一年一月からは田中源三郎。発行所は東京パック社、発売所は有楽社。四六四倍版、多色刷。創刊時は月刊、明治三十九年一月から月二回、四十年四月からは月三回発行。
（2）明治四十年二月、鶴三は一家で千駄木林町八番地に転居した（『石井鶴三日記　第一巻』形文社、平成十七年三月）。





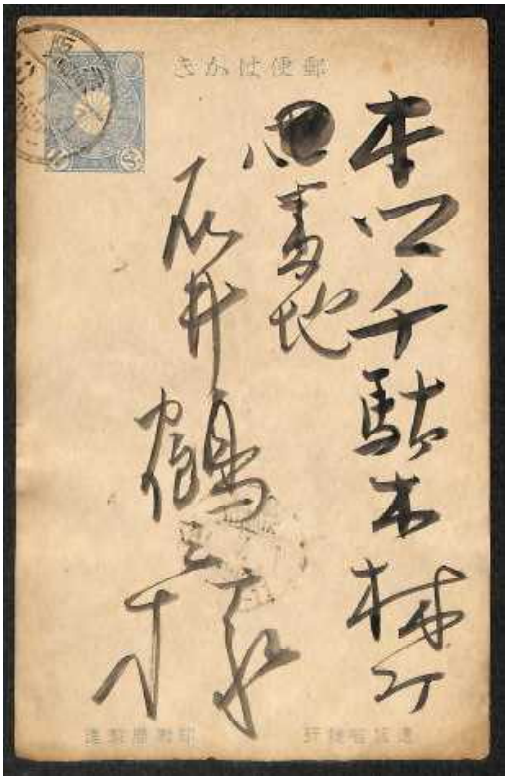
書簡2（高1―238）

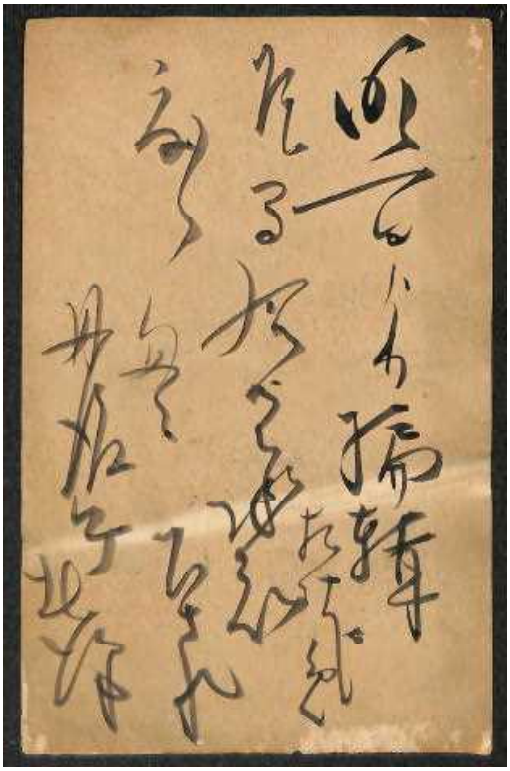
葉書　毛筆

明一日より編輯相はじめ
候間右御承知下され
度候　匆々

丹後町北沢

［受信者］本郷千駄木林町／北〔八〕番地／石井鶴三様
［発信者］《記載なし》
［日付け］《記載なし》
［消印］《発信》赤阪／40・7・1／□□―□
《受信》駒込／40・□・1／□□―11





書簡3（高1―239）

御病気如何に御座候哉
時節柄何卒御大切
に養生遊され度候
本号はどうやらこうやら
間に合せ可申候間
若し御悪るければ押して
御無理をなさらぬ様お
やすみ遊され度候
　先はお見舞まで

［受信者］市内本郷区駒込千駄木／林町八番地／石井鶴三様
［発信者］丸之内有楽社内／北沢楽天
［日付け］十二日
［消印］《発信》丸ノ内／□・7・13／前□―□
《受信》駒込／40・7・13／前9―10

葉書　ペン

書簡４（高１―１６７）

御病気如何
御摂養専一に祈上候
先日当舎[1]参上の
幸便に托して寸志
申上候得共その後
当舎に逢ひ不申
定めし御受納被下候事
と存候別札金弐拾円
也俸給御送附
申上候間御受取り
被下度候昨年来の
お約束ゆゑ富士へは
是非御同伴申し
たかりしも御病気にて
貴君だけ列に漏れ
候事残念に存候
出発は来月六七日
頃に御座候到底
望まれまじともその
頃までに恢復して
御同行あらん事
祈上候
先は御見舞まで

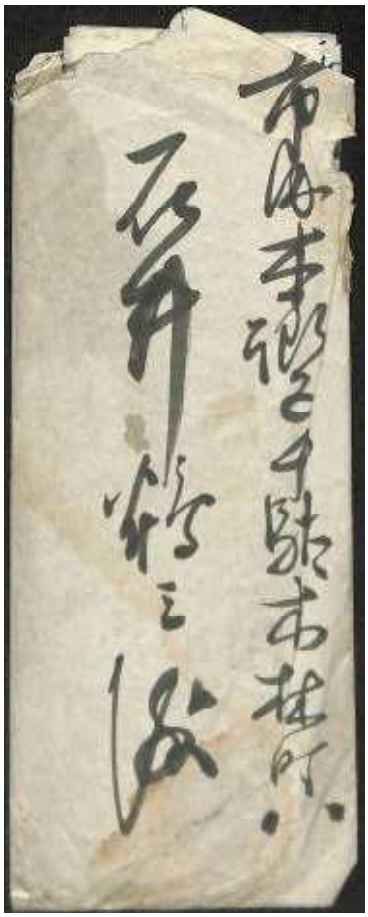
草々頓首
七月二十日
楽天

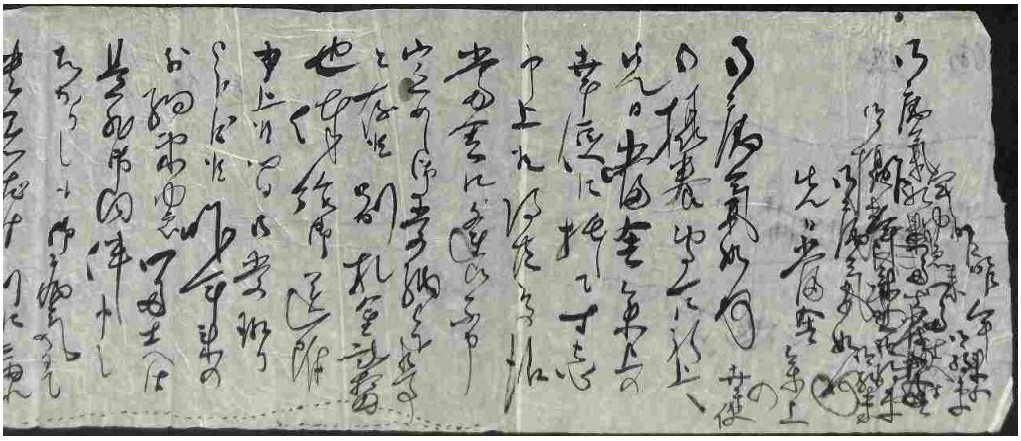
巻紙　毛筆

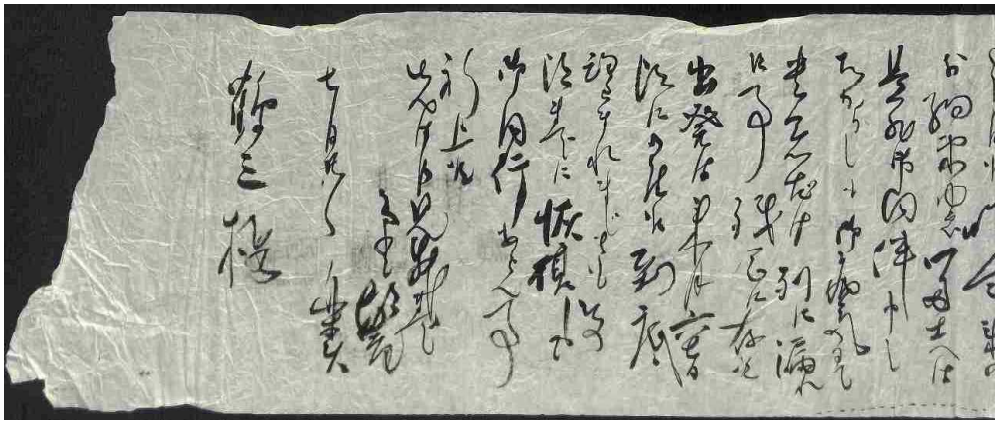
鶴三様

［受信者］市内本郷区千駄木林町／石井鶴三殿
［発信者］赤阪区／丹後町四九／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］《記載なし》

［註］
（1）当舎勝治（勝次）。漫画家。第一巻から『東京パック』の漫画を担当。







書簡５（高１―１６５）

巻紙　毛筆

拝啓
時下残暑未退候処
御病気如何に御座候哉
一寸御見舞に参上いたし
度候処非常に多忙之為め
遂々今日まで御無沙汰
に打過き申候
承り候得ば貴君には例の
殻食主義を厳守いたされ
薬餌を取らざる由それにては
全快之期遠く自他之為め
甚だ不得策と存候是非
医師之診断を受け服
薬いたされ一日も速く全
快之程希望に堪へず
候貴君欠勤之為め森田[1]
当舎の両氏は今夏遂に
暑中休暇を為す能はず
盛暑欠勤なしに勉強いたし
居候両氏も只管貴君が
薬餌療法に宗旨変へ
をなされ候事を希望
いたし居候従来私ともにて
都合四人にてパックを作り
居たるに敏腕の君を失ひ
たるゆゑたとへは百人の
会社に遽に二十五人以上
三十人程の欠勤者が出来
たると同じ割合にて別けて
盛暑中の困難一方ならず
私も両氏へ対しても気の
毒に堪へず候間これも
友人に対する義務と思召
一刻も早く薬餌療
法に依りて全快せられん
事を祈上候
さて同封にて貴君之御
所得を御送り申上候間
御査収被下度候
尚々両氏へあまり気之毒
ゆゑ御全快之見込みおよひ
何日頃か御見込み御通知
被下度あまり永びき候様
なれば臨時に誰か頼みて
両氏の骨折りを休め
やりたく御容躰その他
御近況御代筆にても不苦
候間委細御通知被下度
此如待入り候乱筆御判読ヲ乞

八月三十日朝　　楽天生

ツル三君
　　褥下

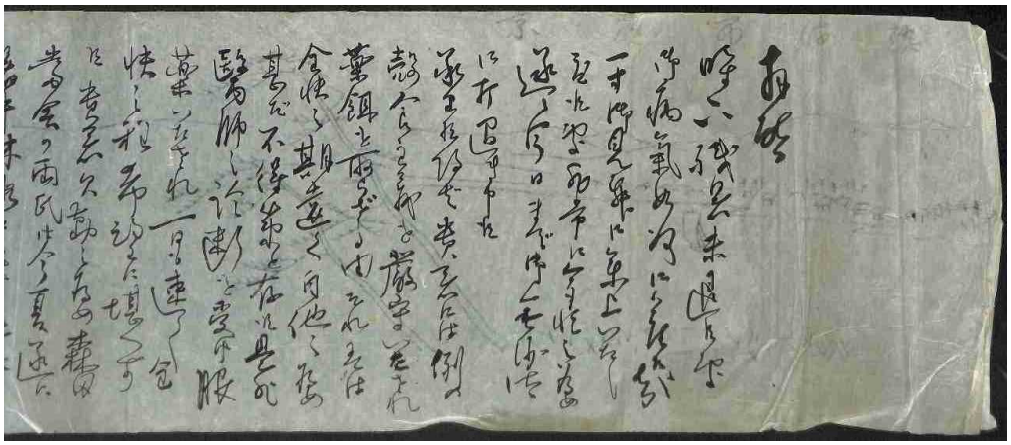
《封筒なし・巻紙のみ》

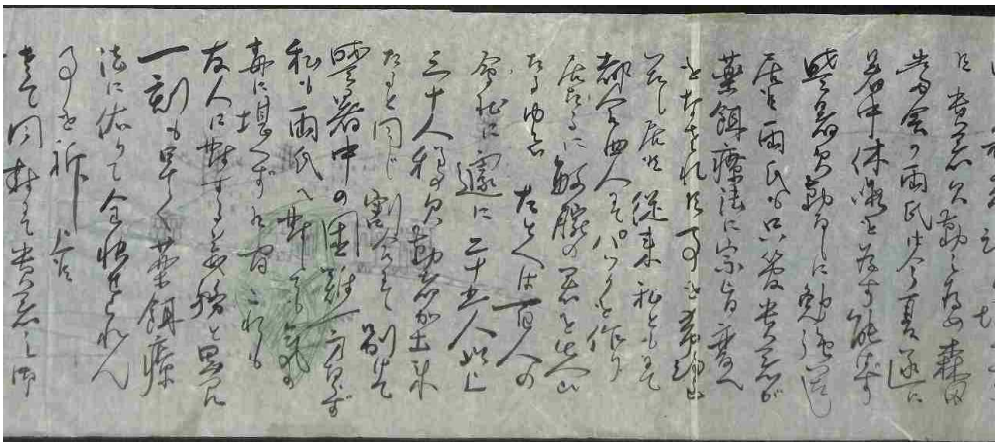
〔註〕

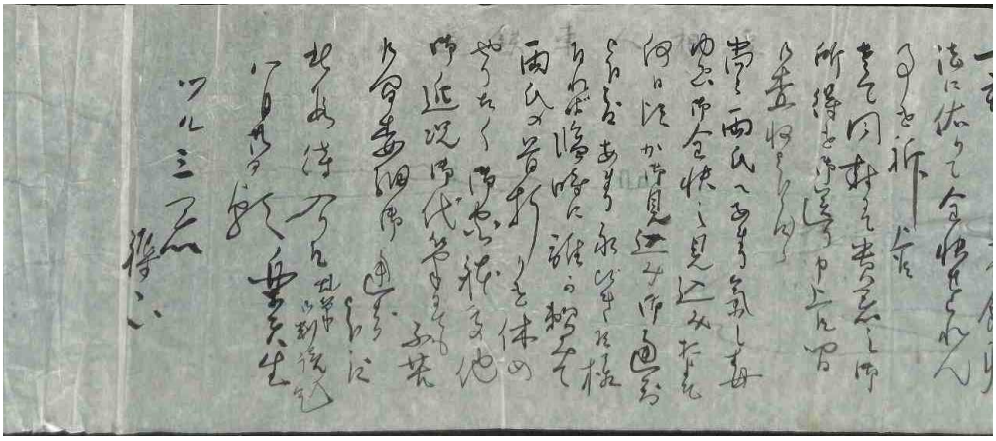
（1）この時期、『東京パック』に関わっていた森田恒友か、森田太三郎だと思われる。

森田恒友は、画家。明治十四年～昭和八年。埼玉県に生まれる。明治三十九年に東京美術学校を卒業し、四十年五月、山本鼎や石井柏亭らと美術雑誌『方寸』を創刊した。大正三年、渡欧、セザンヌの影響を受ける。大正十一年、岸田劉生・梅原龍三郎らと春陽会を設立した。

また、森田太三郎は、「文壇漫画」という文士の似顔絵を『文章世界』に連載し、明治四十五年に『名流漫画』を出版した。楽天が有楽社を退いた後、小川治平と第二次『東京パック』を支え、その後『大阪パック』の発行に携わった（清水勲編『漫画博物館　明治時代編　東京パックⅠ（明治期）』国書刊行会、昭和六十一年六月）。







書簡6（高1―166）

巻紙　毛筆

拝啓
貴意之ある処は委細家内[1]
から聞き取りました先日お送り
申た金二十円は貴君が東京
パックに勤務中は当然取る
べき権利のあるお金です月
給なるものゝ性質として病気にて
出勤する事の出来ぬ時とても一家
或は一身を保持するだけの事が
出来ないとしては業務に忠実なる
を得ぬ訳ですから病気欠勤
中とて月給を受け取ッて決して
差支へありませんその代りそれに対
する義務として東京パックの為め
には力を尽すと云ふ事を心掛けて
いたゝかなければならない次第なのです
従来勤務時間か長すぎると
云ふ事はお互ひに改善を望でる
処なのですがお互につい話に身が
入ッたりすると随分長時間を空
費する事も往々あり左もなくても
外国の雑誌を仕事時間の過半
閲覧に費やす時もありますこれら
は実際よんどころない事でまた
是非やらねばならない事なので
すがそれが為め自然在社時間が
永くなる事は実に止むを得ない
のです殊に東京パックはこれを仕
上るには一定の日限がありますので
〆切り間際になりますと勢ひ無
理にも間に合せると云ふ習慣に
なり従而日限切迫するまでは兎
角グヅ〳〵して居る癖もついて
居るのです貴君はその内でも最も
着実にやッて居るのですから迷惑
はお察し申ますが君だけがおそく
来て早く帰ると云ふ事は他の
人に気之毒な点もありますそれで
なくても私はいつでも御存じの通り
君に早く帰るようにお勧めして
居ります
つまり一日の仕事時間はお説の通り
六時間位にしたいのですが夜ばかり
では印刷所との関係上甚だ不
便なのですからおそくも午後
一時頃から始めたいのですそして
七時頃に退社する事か出来れば
至極結構で理想通りなのてすが
君の学校[2]の都合上にもよる事

ですから中々そうは参りません
殊に一回の編輯毎に三日位づゝ
休む事に習慣がついて居るの
ですからその休暇も欲しいのでその上
時間も短縮しては到底パック
が期日中には出来ません
追々改善して人も殖し理想通り
にやッて行きたいと思ひますから
それまでは皆●〔と〕行動を共にして
やッて居て下さい
しかし夜は九時か九時半頃まで
に切り上る事は今日から実
行いたしませう

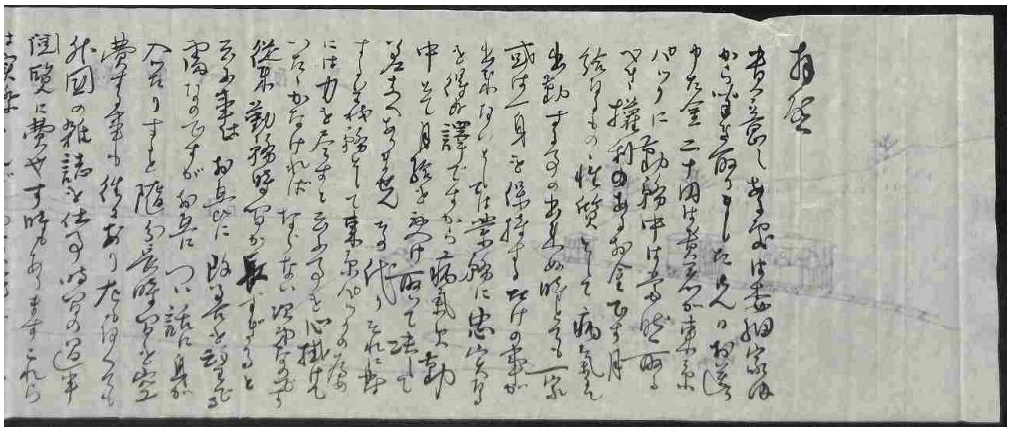
九月九日　　楽天

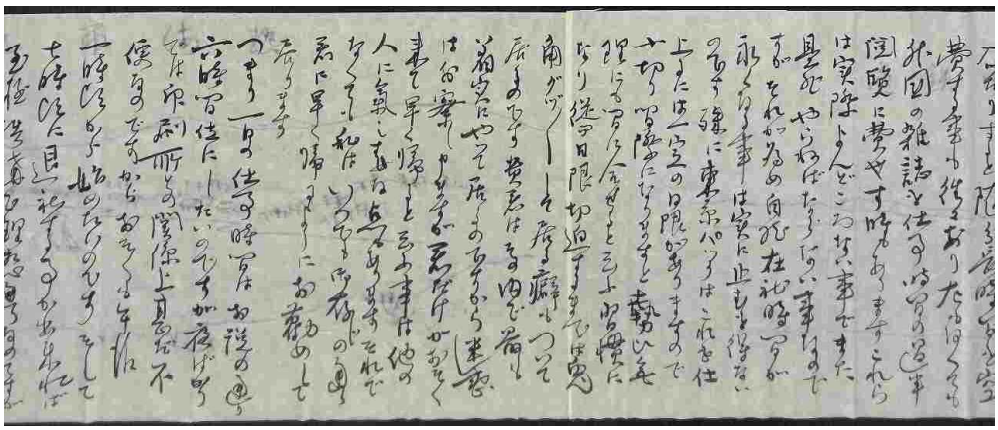
鶴さん

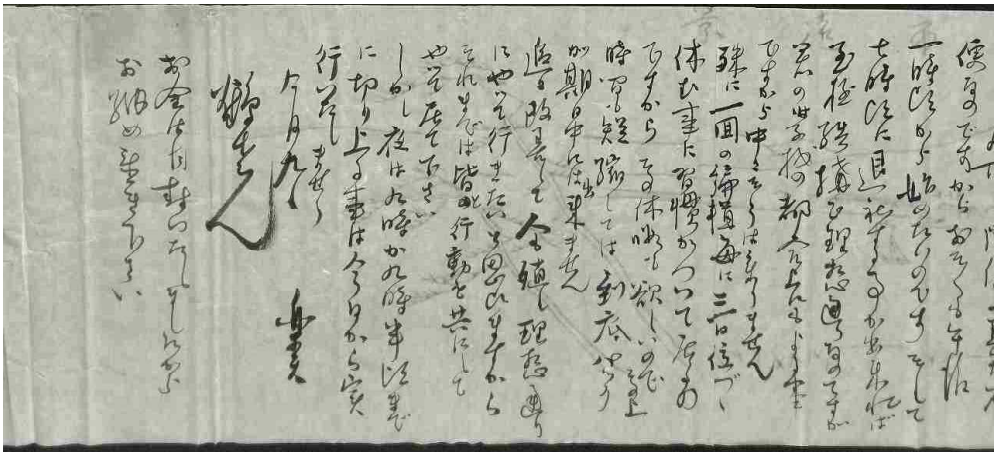
お金は同封いたしましたから
お納め置き下さい

《封筒なし・巻紙のみ》

〔註〕
（1）楽天の妻・いの。明治三十八年一月に楽天と結婚した（入籍は明治四十四年九月六日）。
（2）鶴三が通っていた東京美術学校。明治二十年に設立した官立の美術学校（現・東京芸術大学）で、鶴三は明治三十八年九月に彫刻選科に入学した。







書簡７（馬場５３―５６）

洋紙　ペン

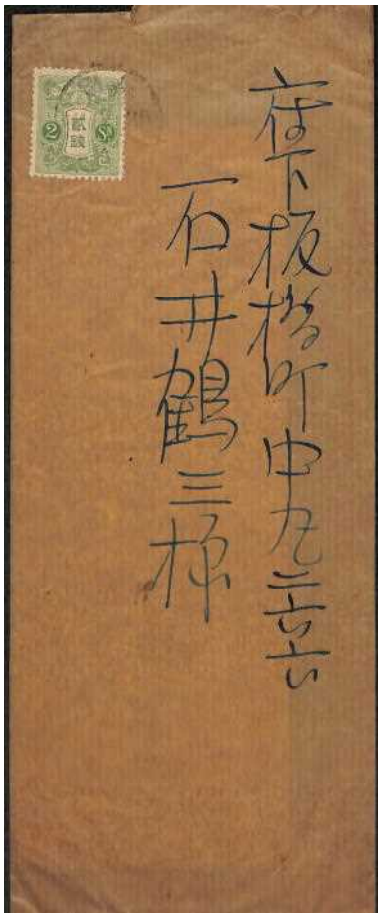
石井鶴三先生
東京パック九月号原稿
御願申上候
〆切、八月五日

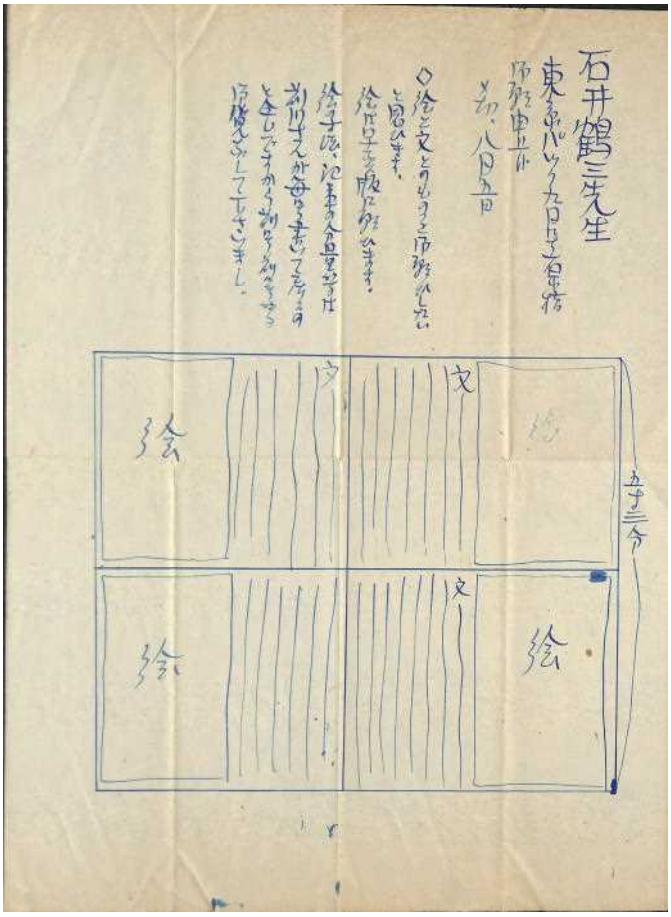
◇絵と文とのものを御願ひしたい
と思ひます。
絵は写真版に願ひます。
絵の寸法、記事の分量等は
前川さん[1]が毎号書いて居る[2]の
と同じですから前号前々号等
御覧なして下さいまし。

［受信者］府下板橋町中丸二六六／石井鶴三様
［発信者］《印刷》東京府下巣鴨町字宮下一六六三番地／東京パック社／振替東京五一五九四番
［日付け］《記載なし》
［消印］□□／□・□・30／□□―□
《封筒に計算のメモあり。別筆か。》

〔註〕
（1）前川千帆。版画家・漫画家。明治二十一年～昭和三十五年。本名は石田（のち前川）重三郎。京都に生まれ、関西美術院で学ぶ。『東京パック』や『楽天パック』、『読売新聞』などに漫画を描いた。
（2）書簡本文の指示、レイアウト見本、前後する時期の『東京パック』誌面、〆切りを総合して考えると、明治四十二年七月三十日の書簡だと推測される。

東京パック社


東京板橋中丸三五
石井鶴三様


石井鶴三先生
東京パック九月三日
絵
文
絵
文
絵
絵

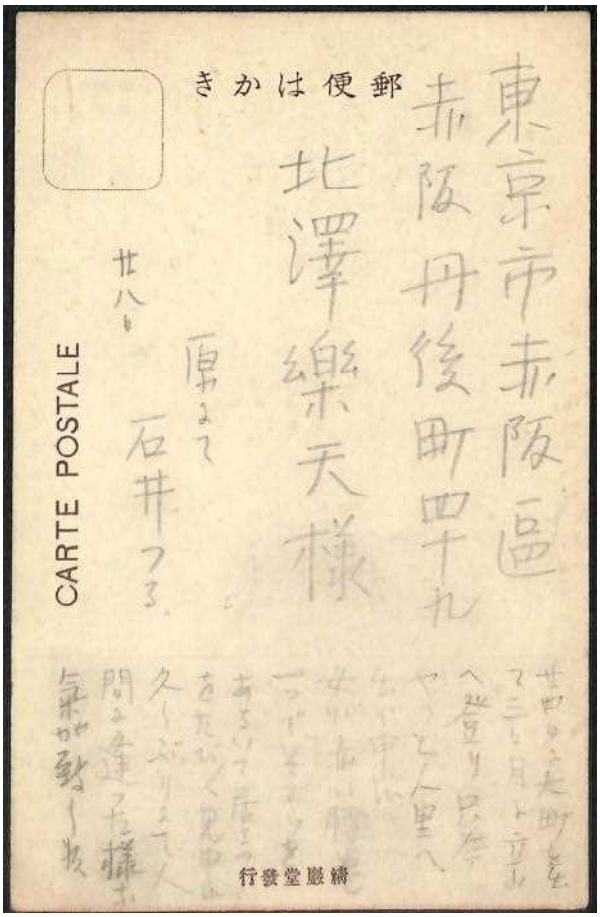
書簡８（書１３―１０）

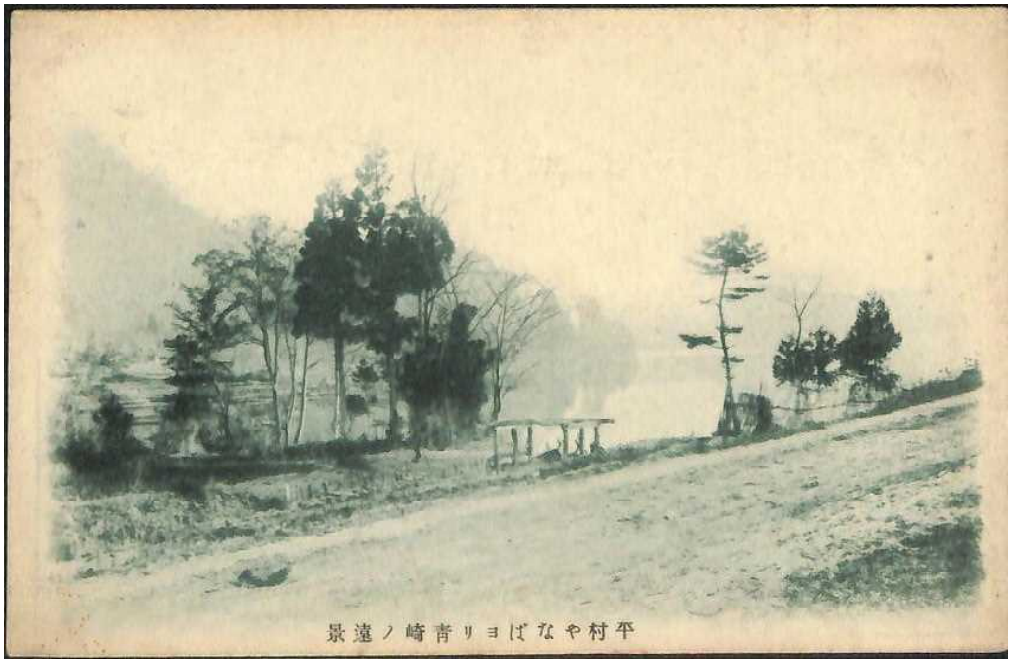
葉書　鉛筆

二十四日に大町[1]を出
て三日目に立山[2]
へ登り只今
やつと人里へ
出で申候
女が赤い腰巻
一つでそこらを
あるいて居るの
をたび〳〵見申候
久しぶりにて人
間に逢った様な
気が致し候[3]

［受信者］東京市赤阪区／赤阪丹後町四十九／北沢楽天様
［発信者］原にて／石井つる
［日付け］二十八日
［　消印　］《消印なし・未投函》

〔註〕
（１）長野県北西部、北アルプス山麓にある山岳都市。
（２）富山県南東部、北アルプス北部の山。
（３）鶴三の随筆「旅の追懐」（初出『みづゑ』大正七年七・八月号／引用は『石井鶴三文集Ⅰ』形文社、昭和五十三年九月）に、「十年前」、「信州から立山へ登って越中へ下った時」のことが、次のように回想されている。
「今日ようやく人里へ出ました。女達が裸で赤い腰巻一つでそこらを歩いています。久しぶりで人間に出会った心持がします」
と、その時はがきに書いて都の友に送った。（十五頁）


郵便はがき
東京市赤阪區
赤阪丹後町四十九
北澤樂天様
原より
石井つる
廿八
CARTE POSTALE
續屋發堂行

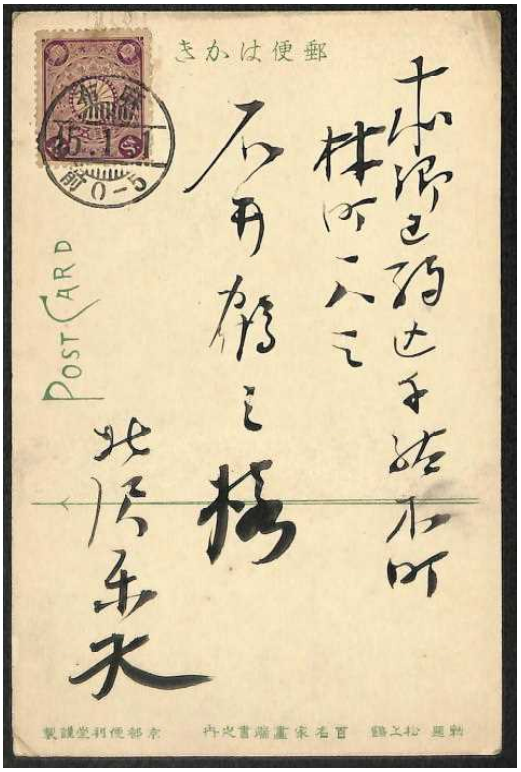

平村やなばヨリ青崎ノ遠景

書簡９（高５―１３８）

葉書　毛筆

賀正

［受信者］本郷区駒込千駄木町／林町一八三／石井鶴三様
［発信者］北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］麻布／45・1・1／前0―5



書簡10（高1―178）

巻紙　毛筆

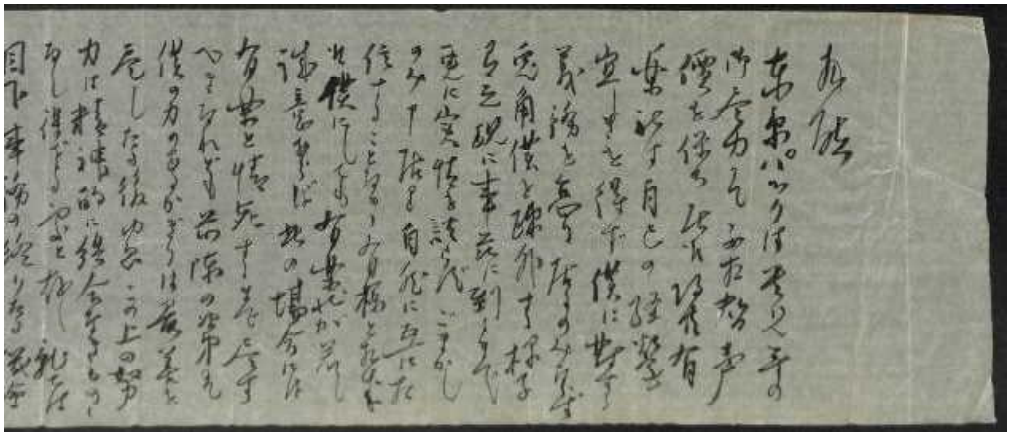
拝啓
東京パックは貴兄等の
御尽力にて不相替[ママ]声
価を保ち居候得共有
楽社[1]は自己の経営
宜しきを得ず僕に対する
義務を怠り居るのみならず
兎角僕を疎外する様子
有之現に事茲に到るまで
更に実情を語らずごまかし
のみ申居り自然に互に相
信することなき有様と相成
候僕にしても有楽社が若し
誠意あらば此の場合には
有楽と情死するまで尽す
べきなれども前陳の次第にて
僕の力のあるかぎりは最善を
尽したる後ゆゑこの上の努
力は精神的に結合なきものに
なし得ざる処と存候就ては
目下事務の終りたる機会
を以て当分停業いたし
有楽社の誠意を量り度
其上にて如何にせんか善後
策を講じ度何卒何れ
に相成候とも僕の為めに
不相替[ママ]御懇情を得度
候此書状或は貴兄の旅
行[2]後に到着可致と存候
間十七日頃には多分御
帰京と存候間御帰
京之上にて尚ほ善く御
相談申上べく候尚ほ御報
酬は僕責任を以て御
支払可申上これ亦御
了承下され度候
匆々頓首
四月十日　北沢楽天
石井鶴三様

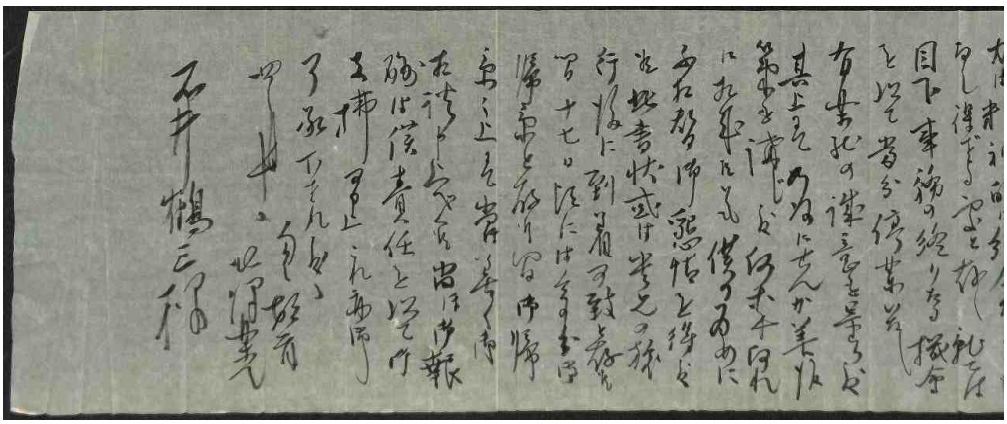
［受信者］本郷区千駄木林町一八三／石井鶴三様／親展
［発信者］赤阪区榎阪町四、／北沢楽天
［日付け］四月十日
［消印］《発信》赤□／45・4・10／后5―6
《受信》□□／45・4・10／后8―9

〔註〕

（1）中村弥二郎が興した出版社。東京市麹町区有楽町三丁目一番地にあった。中村弥二郎（明治六年～昭和十九年）は、もともと京都で便利堂という貸本屋を営んでいたが、兄に譲って上京し、明治三十七年に有楽社を設立した。

（2）鶴三は四月末に塩原を旅行している（『石井鶴三日記　第一巻』形文社、平成十七年三月）。





書簡11（高1―170）

巻紙　毛筆

拝啓
御病気如何に御座候哉
信念固き貴兄之こと
故全快に間もなき事
とは存候得共決而無理なる
ことをなさらぬ様御養生
切に希望仕候さて
有楽社は沢山の借金
出来[1]遂に現状を維持し
難きに至り社内大改革
いたし中村弥二郎氏は一先づ
隠退することに決定いたし候
就てはパック、グラヒック[2]、フレンド[3]
は休刊することは如何にも
惜しきもの故是非小生に
全責任を負ふて継続して
くれ[4]と申され大体に就ては
承諾いたし候得共収支計
算及び営業の方法等に
就き如何にすべき哉を
家兄松本悌蔵[5]に相談いたし
家兄が其方面に妥協[ママ]を
遂ぐる筈に相成小生は
兎も角も一日号十日号の
編輯に着手いたす事に
相成候尚ほ詳細御話
申度候得共御病中ゆゑ
いづれ御帰京之上とこれ
のみ申上候　匆々頓首
四月二十二日　北沢楽天

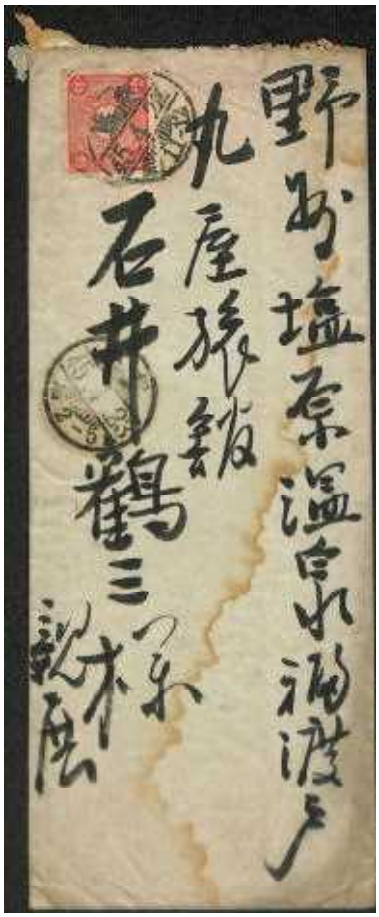
石井鶴三兄
硯北

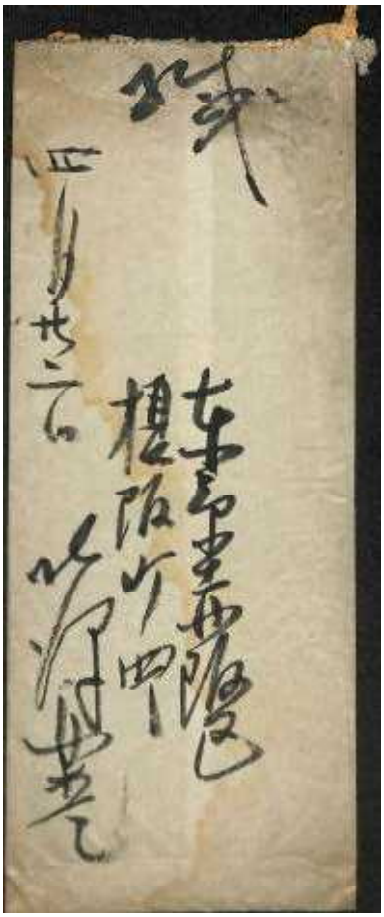
［受信者］野州塩原温泉福渡戸／丸屋旅館／石井鶴三様／親展
［発信者］東京赤阪区／榎阪町四、／北沢楽天
［日付け］四月二十二日
［消印］《発信》赤阪／45・4・22／后11―12
《受信》塩原／45・4・23／后2―5

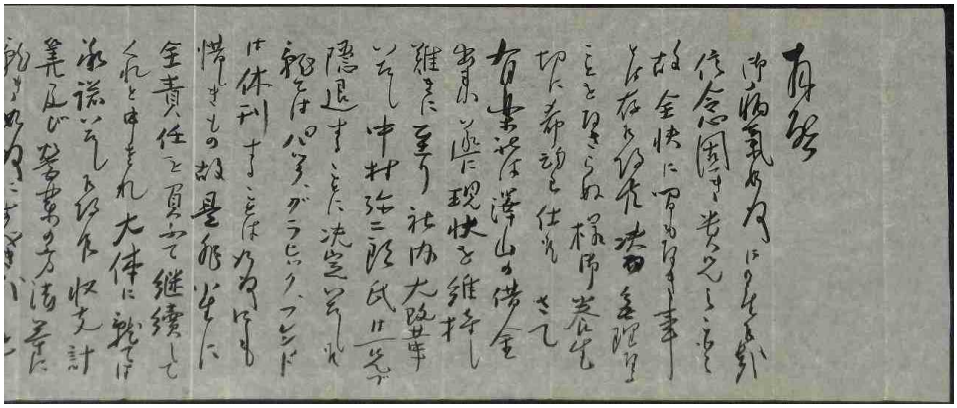
〔註〕
（1）『東京パック』の成功により、発行主の中村弥二郎が他の事業に手を出して失敗し、二十五万円の負債を抱えてしまう。その抵当として楽天と『東京パック』が債権者の手に渡る。楽天はそれを拒否し、明治四十五年五月に有楽社を退社する。
（2）明治四十二年一月に創刊したグラフ雑誌。明治四十五年三月頃まで発行された。編集兼発行者は田中源三郎。発行所は有楽社。四六四倍版。月二回発行。
（3）明治四十一年一月に創刊した児童雑誌。主筆は北沢楽天。創刊時は月刊、明治四十三年一月より月二回発行。

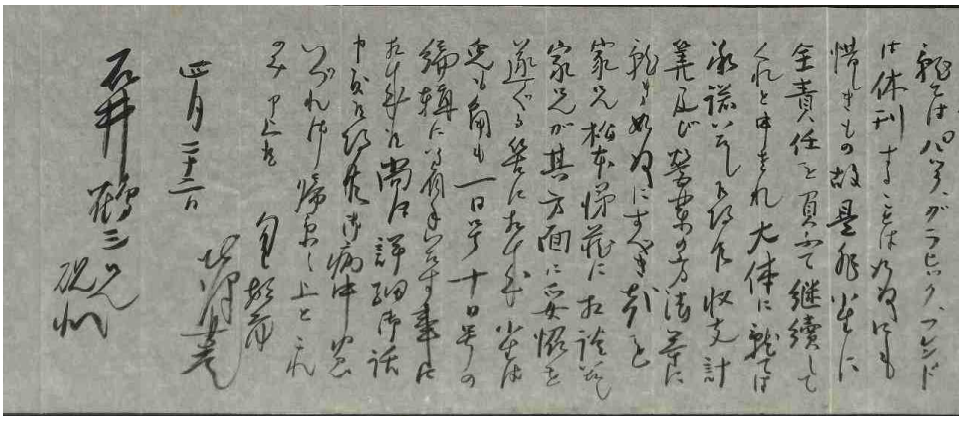
（4）「是非小生に全責任を負ふて継続してくれ」とあるが、その後、楽天が有楽社を退社したため、『東京パック』は明治四十五年六月発行の第八巻十四号より小川治平と森田太三郎を中心とした新体制で発行された。なお、同号に掲載された「社告」では「多年東京パック主筆として本紙編輯に従事せる北沢楽天氏は、今般別に漫画趣味の雑誌を経営することとなり先月限り退社せられたり」と説明されている。

（5）北沢保定の次男で、楽天の兄。楽天社を助けて、明治四十五年七月に創刊した『家庭パック』の編集兼発行人を務めた。









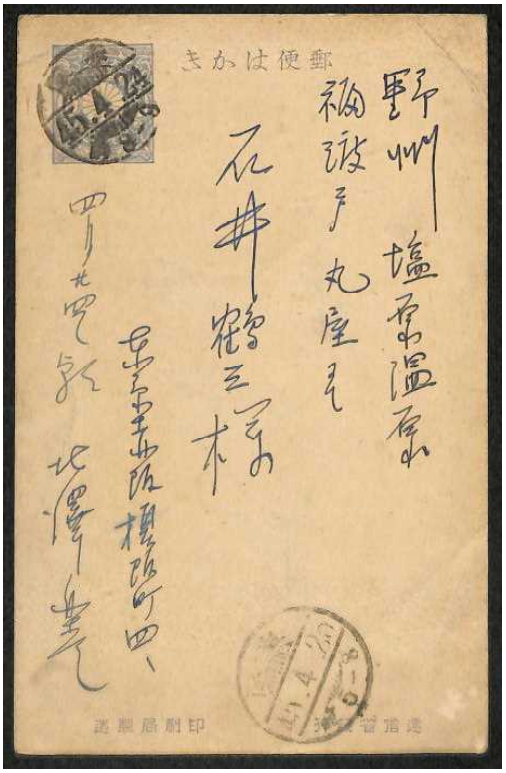
書簡12（高1―250）

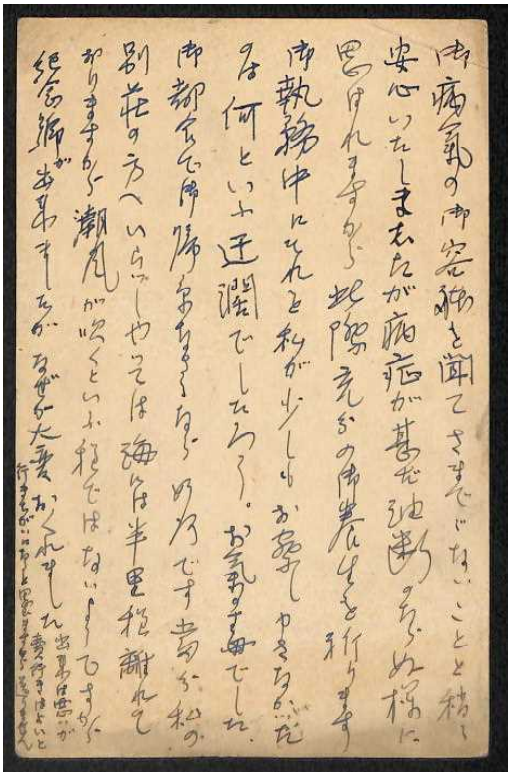
葉書　ペン

御病気の御容躰(ママ)を聞てさまでゞないことと稍々
安心いたしましたが病症が甚だ油断のならぬ様に
思はれますから此際充分の御養生を祈ります
御執務中にそれを私が少しもお察し申さなかッた
のは何といふ迂濶でしたろう。お気の毒でした、
御都合で御帰京なさるなら如何です当分私の
別荘(1)の方へいらッしやッては海には半里程離れて
おりますから潮風が吹くといふ程ではないようですから
紀念号(ママ)(2)が出来ましたがなぜか大変おくれました
出来は悪いが売行きはよいと
行きちがいになると思ひますから送りません

［受信者］野州塩原温泉／福渡戸丸屋にて／石井鶴三様
［発信者］東京赤阪榎阪町四、／北沢楽天
［日付け］四月二十四日朝
［消印］《発信》赤阪／45・4・24／前8―9
《受信》塩原／45・4・25／前5―8

［註］
（1）楽天の別荘が現・千葉県一宮市宮原地区にあった。
（2）『東京パック』明治四十五年四月発行の「第七週年記念号」（第八巻十一・十二合併号）のこと。





書簡13（高1―174）

巻紙　毛筆

拝啓
本年の寒気は特に
きびしいですが御健康
は如何しばらく見
えませんから気にかゝッて
おります
楽天社[1]は遂に他人に
譲り渡してしまいました
そして私は有楽社の時と同
様の関係で引続き
編輯に従事することに
なりました、そして今月
十五日発行の分からは発
行者が違ふのです
譲受人は京橋区采女町
十七番地の鉄道時報局[2]
木下立安[3]といふ人です
鉄道に関係があるから其
方面には発展の便利が
ありますから駅売は盛に
なるでせう
やッと窮地を脱して一歩
向上した心地がいたします
どうぞ相変らず御好
意を以て御援助を願
ひます
目下は権利の移転、債
務の整理、事務の引
継ぎパックの編輯とで
寸暇もありません
この大低気圧が経過
したら初めて晴天白日
を見る感があるだろうと
楽みにしております
薄謝金拾円為替にて
御送り申上ますから
御受取り下さい
　　ではさよなら
三月六日
楽天
石井鶴三様

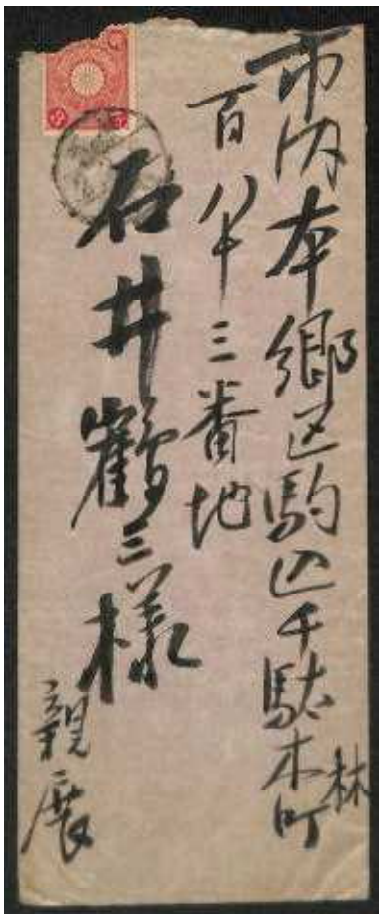
［受信者］市内本郷区駒込千駄木林町／百八十三番地／石井鶴三様／親展
［発信者］東京赤阪区／榎阪町四、／北沢楽天
［日付け］三月六日
［消印］《発信》麻布／2・3・6／□10―11
《受信》駒込／2・3・6／后5―6

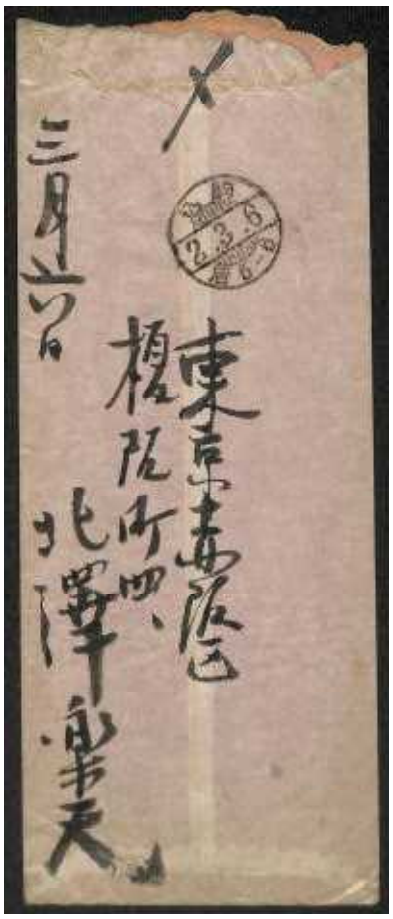
〔註〕

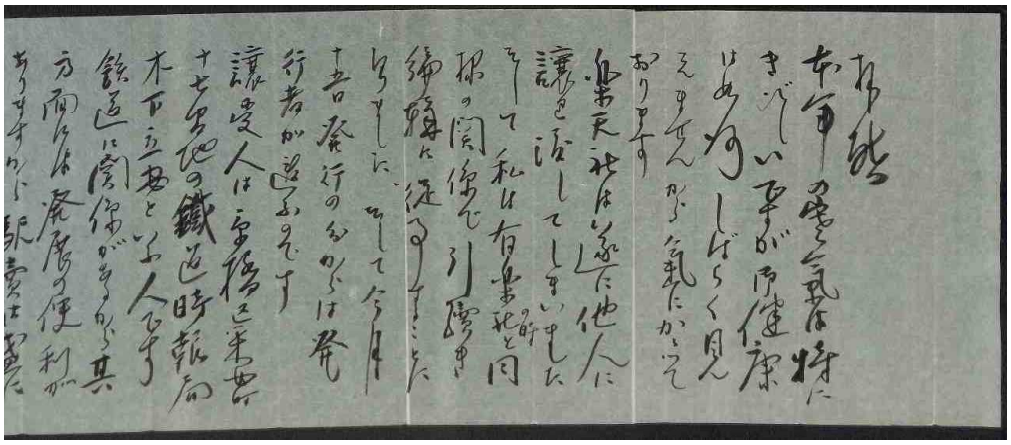
（1）明治四十五年に楽天が興した出版社。東京市赤坂区榎坂町四番地にあった。

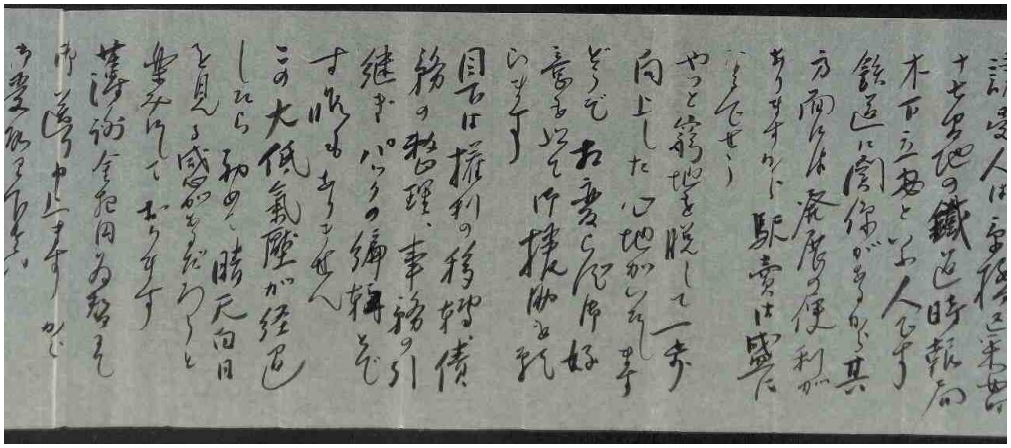
（2）明治三十二年から昭和十六年まで『鉄道時報』を発行した。

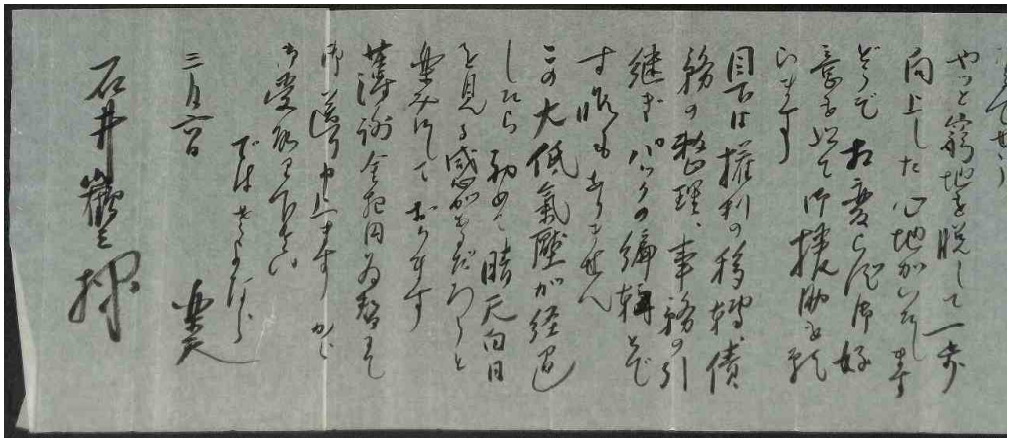
（3）実業家。慶応二年～昭和二十八年。明治二十一年に慶応義塾大学を卒業し、北海道炭礦鉄道の手宮出張所長になった。時事新報の経済部主任、紀和鉄道の支配人を経て、鉄道時報社長を五十年にわたり務めた（青木槐三「故木下立安氏を偲ぶ」、『汎交通』昭和二十八年八月）。











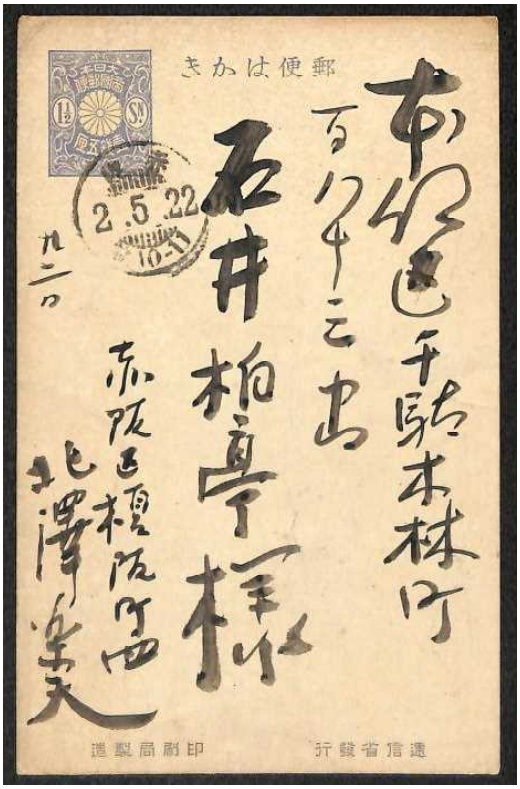
書簡14（高1―182）

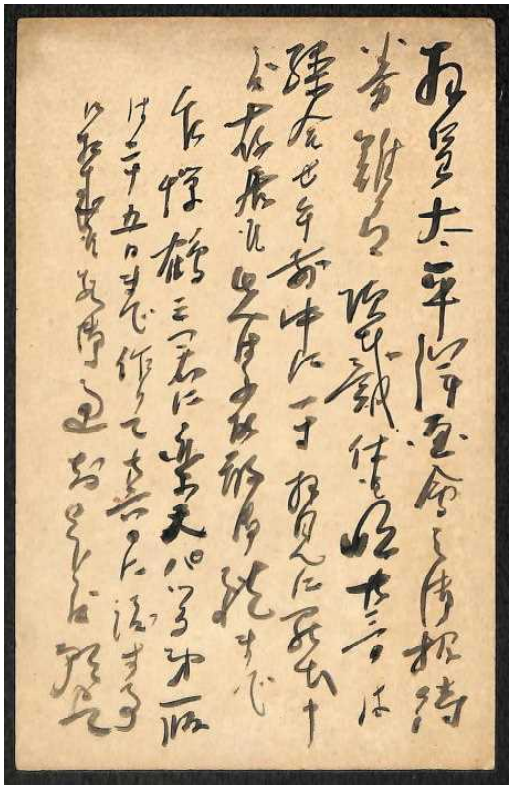
葉書　毛筆

拝呈　太平洋画会[1]之御招待
券難有頂戴仕候明二十三日は
繰合せ午前中に一寸拝見に罷出申
度存居候先は不取敢御礼まで
　乍憚鶴三君に楽天パック[2]第一版
　は二十五日まで作りて二十六日に渡す事
　に相成候段御通知被下度願上候

［受信者］本郷区千駄木林町／百八十三番／石井柏亭様
［発信者］赤阪区榎阪町四／北沢楽天
［日付け］二十二日
［消印］赤阪／2・5・22／前10―11

〔註〕
（1）明治三十五年一月に設立、同年三月に第一回展を開催。明治二十二年に創立された洋風美術家団体明治美術会の後身。大正二年五月二十四日から六月十八日まで第十一回展覧会を上野公園の竹之台陳列館にて開催。青木茂監修『近代日本アート・カタログ・コレクション011　太平洋画会第三巻』（ゆまに書房、平成十三年五月）によると、第十一回展覧会への鶴三の出品はなかったが、石井柏亭が「音無の森」「橙樹」「犬吠峠」「犬若奇岩」「黒き家」「土蔵」「松原」「伊東海浜」の油絵を出品していた。
（2）明治四十五年六月に創刊した漫画雑誌。大正三年十一月まで発行された。主筆・北沢楽天。発行兼編集者は北沢信三郎。発行所は楽天社。月二回発行。





書簡15（高1―173）

巻紙　毛筆

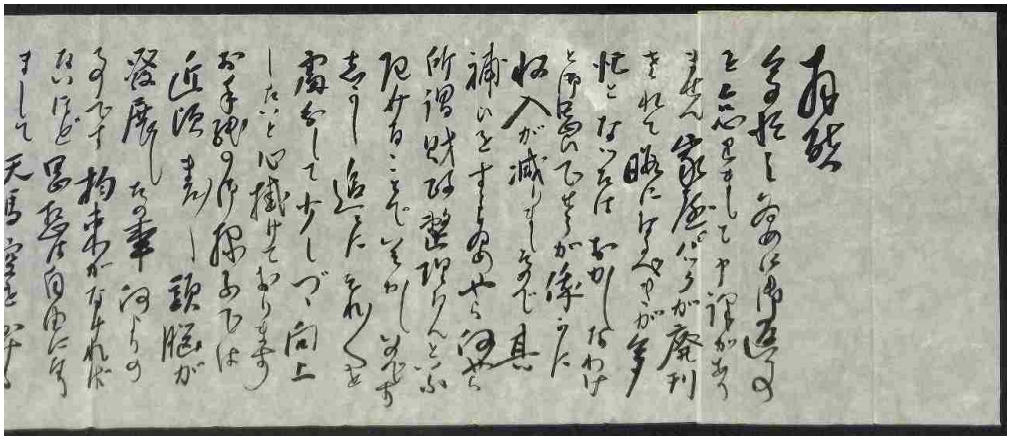
拝啓
多忙之為めに御返事
を怠りまして申訳があり
ません家庭パック[1]が廃刊
されて暇になるべきが多
忙となッたはおかしなわけ
と御思ひでせうが俄かに
収入が減りましたので其
補ひをする為めやら何やら
所謂財政整理なんといふ
厄介なことでいそかしいのです
しかし追々にそれ〳〵を
処分して少しづゝ向上
したいと心掛けております
お手紙の御様子では
近頃また〳〵頭脳が
発展したの事何よりの（ママ）
事です拘束がなければ
ないほど思想は自由になり
まして天馬空をかける
様に広い〳〵想像がほ
しいまゝにされて結構
です画が成らないでも
思召があッたら遊びに来
ては如何来月二日の晩
には野菜の御馳走を
つくらせて赤阪の宅で晩餐
を共にしたいと思ひますから
六時以後にお遊びにいらッ
しやい如何
例のお金を同封で御届け
申ましたから御査収願ます
余は拝顔に譲る　草々頓首
五月三十一日
楽天
鶴さん

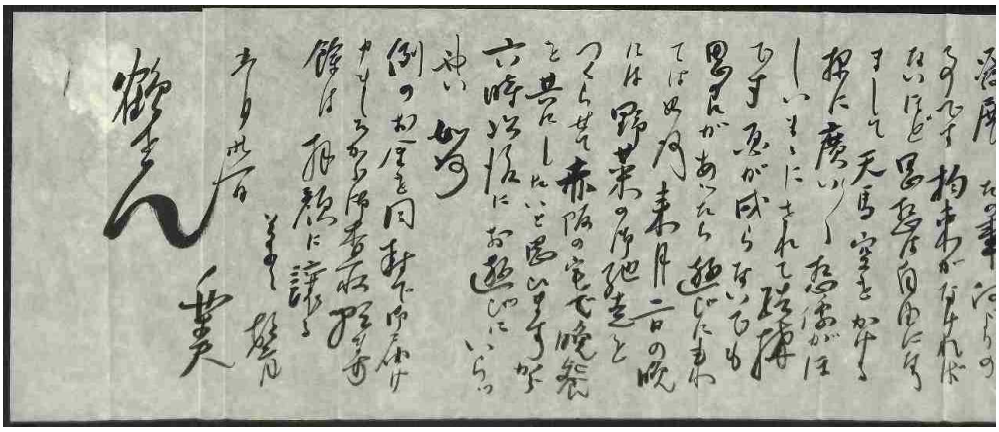
［受信者］本郷区駒込林町一八三／石井鶴三様／親展
［発信者］赤阪区榎阪四、／北沢楽天
［日付け］五月三十一日
［消印］《発信》□谷／2・5・□／后2―□
《受信》駒込／2・5・31／后7―8

〔註〕
（1）明治四十五年七月に創刊した家庭雑誌。大正二年五月まで発行された。
編集兼発行人は松本悌蔵。発行所は楽天社。月二回発行。

縅
赤阪邑樹陰四
北澤楽天

本郷区駒込林町一八三
石井鶴三様
親展



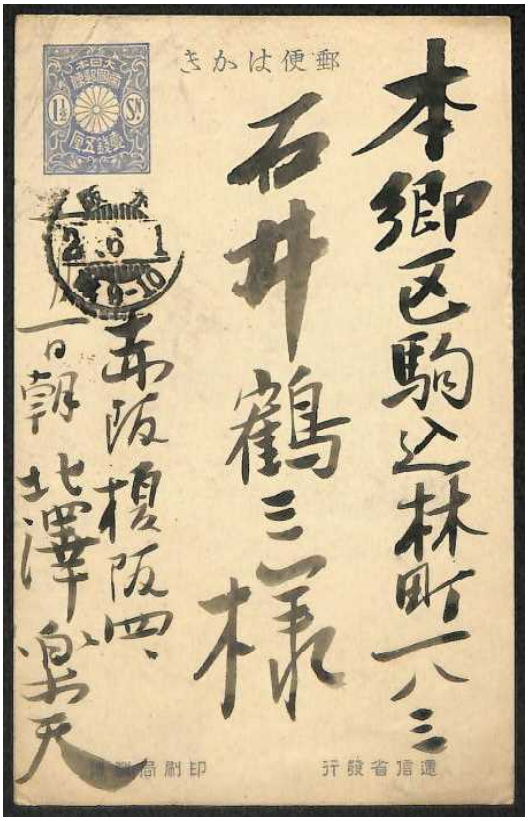


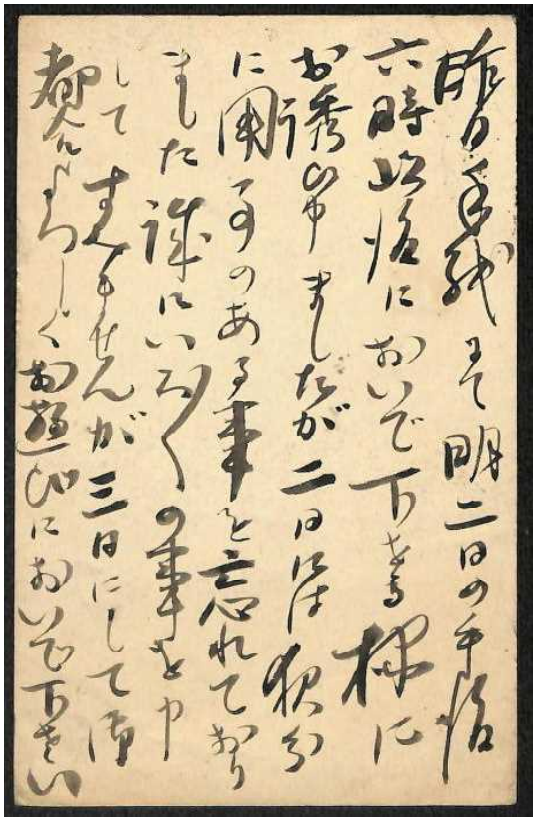
書簡16（高1―243）

昨日手紙にて明二日の午後
六時以後においで下さる様に
お誘ひ申ましたが二日には夜分
に用事のある事を忘れており
ました誠にいろ〳〵の事を申
してすみませんが三日にして御
都合よろしくお遊びにおいで下さい

［受信者］本郷区駒込林町一八三／石井鶴三様
［発信者］赤阪榎阪四、／北沢楽天
［日付け］六月一日朝
［消印］赤阪／2・6・1／前9―10

葉書　毛筆





書簡17（高1―175）

巻紙　毛筆

拝復
本年は実にお暑いです
が御丈夫になッて頭の工合も
余程よろしいそうで何より
結構なことでございます
御手紙を頂いて深山にて
人に逢ひたる心地がいたしました
逢へばうるさい世間話し
ばかりして御迷惑でせうが
私は遂に楽天パックに見放
なされましたと申すとおかしい
ですが商買人の珠盤に乗ら
ない代物となッたと見へます
そして楽天パック今は前川[1]
と原[2]、下川[3]の三氏でやッており
まして私は御注文によッて
中絵と表紙を揮毫料
を貰らッて書くだけの関
係になりました生活の
都合から時事新報[4]へ
殆ント毎日のように画をおくり
ますがこれも別だん傭はれ
たのではありませんから日々
勤めには出ません楽天社も
同様一ト月に二三度顔を
出すだけになりましたので
この暑中は大抵一宮[5]の方へ
ばかり参ッておりますので
お手紙を頂いてそれを今日
只今拝見しました、たしかに
私は向上之機会を捉へた
事と非常に満足しており
ます、こんな小さい家に住で
無駄費ひをせぬと物質
的にも安心を得られました、
モウ出来得る限り売る
画をかきたくないと思ひ
ます自分勝手のことのみ
おうるさいでせう先日
おいで下さいましていろ〳〵
おはなしがありましたが君の
言外の意味を感受し
て、それに甚だお金の都合
が悪いため心ならずも私が
心に誓ておりましたことも
果されず御厚意に任せ
其侭御無沙汰に相成り
ました今は私も責任の
ない地位に立ちまして心苦

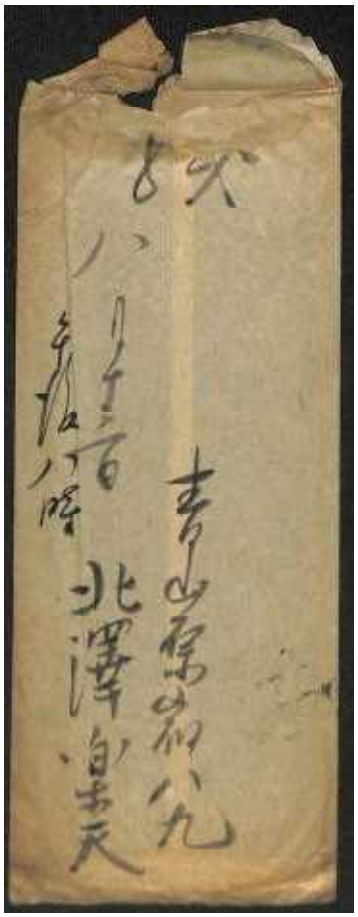
しさがいくらか軽くなッた
ようにおもひます私も思
ひのまゝの勉強をします
君もパック時代は既に
過き去り新時代に入ッて
定めし清新の趣味に満ち
満ちて居るでせう其内に
最新の新傾向を伺ひ
たいものです私も伺ひます
が君もおいで下さい土曜日
日曜日は或は不在ですが
其他は大低(ママ)おりますおい
での前にハガキでも下され
ばなほ結構です
場所は青山四丁目で電
車を下りて右へ曲り電
柱二本目の処を左へ折れ
て三丁程行くと坂があり
ます其坂の中途右側の
土手の上ですそこは私宅の
裏口です表口は坂になる
前に四辻がありますそれを右
に曲り五六間にて左に入ると
坂の方と背中合せに表口
がありますぢきに知れます
　　ではさよなら

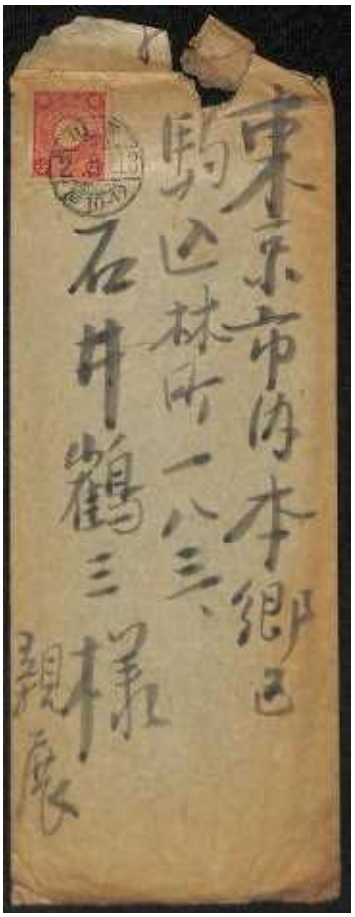
八月十三日　　楽天

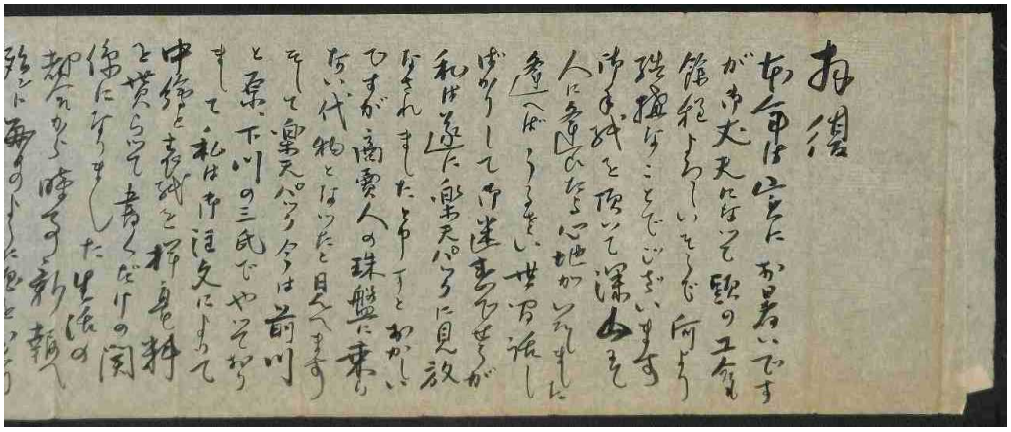
石井鶴三様

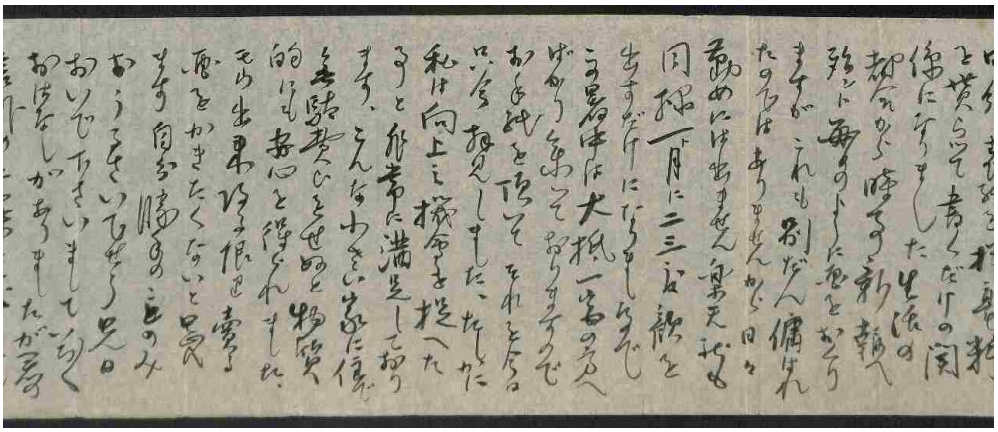
［受信者］東京市内本郷区／駒込林町一八三、／石井鶴三様／親展
［発信者］青山原宿八十九／北沢楽天
［日付け］八月十三日／午後八時
［消印］《発信》青山／2・8・13／后10―12
《受信》□□／□・8・14／前□―□

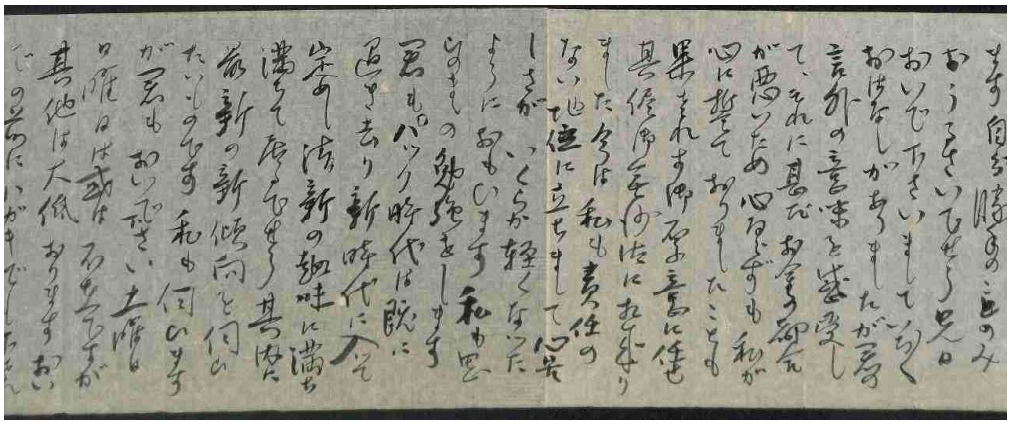
［註］
（1）前川千帆。（**書簡7**参照）。
（2）原誠之助。漫画家。『楽天パック』に漫画を描く。大正三年に『銀の杖お伽絵噺』を金井信正堂より刊行した。
（3）下川凹天。漫画家。明治二十五年～昭和四十八年。沖縄県に生まれる。本名は貞矩。明治四十年、『東京パック』の漫画家募集養成に応募し、採用された。その後、『楽天パック』や『読売サンデー漫画』などに漫画を描き、活躍した。
（4）福沢諭吉が明治十五年に創刊した日刊紙。楽天は明治三十二年に時事新報に入社し、三十五年から日曜『時事漫画』の主筆を務めた。

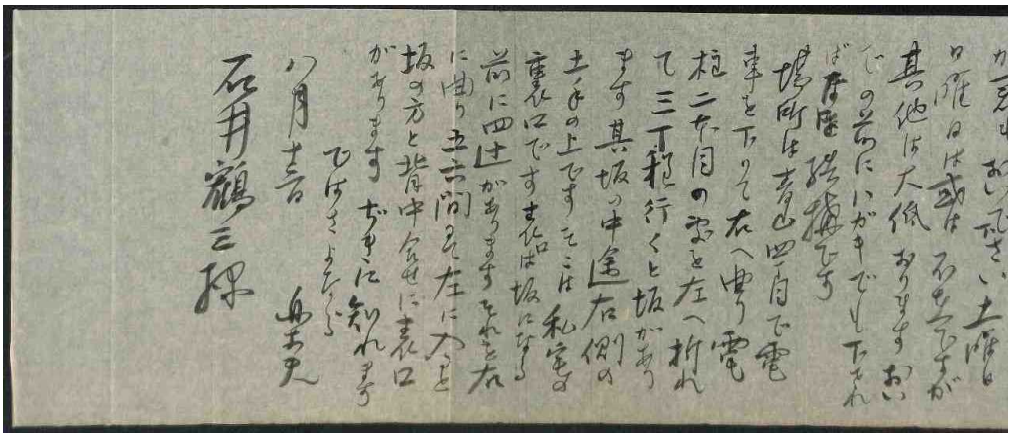












書簡18（高1―176）

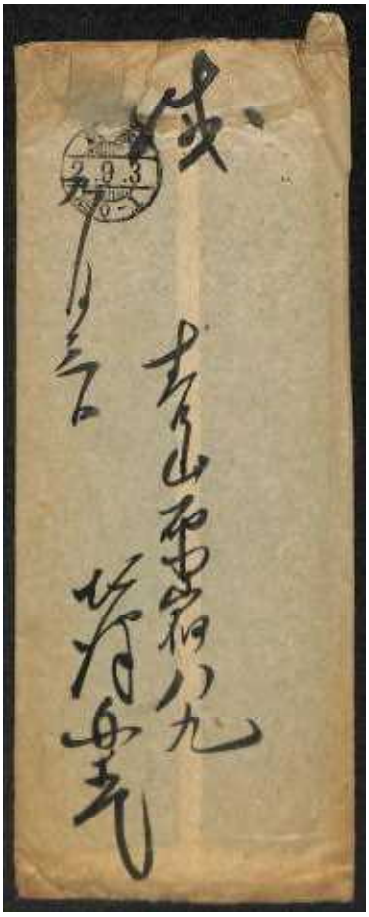
巻紙　毛筆

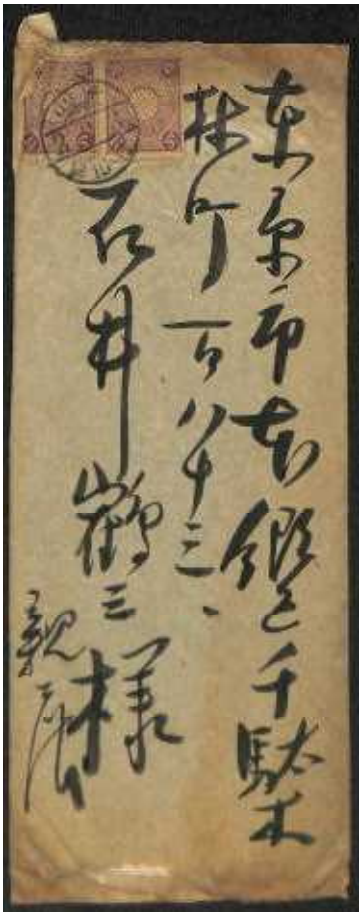
先日は御母堂様[1]が
わさ〳〵御出下さいました
が生憎不在で失礼
いたしました其後久
しくお目にかゝりませんが
どうしております健康
は如何君の今の境
遇は如何是非一度
お伺ひしやうと存じて
おりますが私はまた少々
道楽気を出しまして
とても本年の間には合は
ぬとは思ひますが文
展[2]へ出品のツもりで油
絵のデッサンを苦心して
おります、しかし見られ
ようと思はずに感興のまゝ
にかくツもりです君は文
展を考へておいでゞす
か私の画は夏の画で
田舎で写生をはじめて
おりますから今月の十日
頃までは季節を追
ひかけて僅かに閑を
得れは田舎にばかり往て
おりますから十日過ぎ
たらお目にかゝりた●〔い〕
と思ッております
私は近頃如何にしたら
善い意味の精神修
養が出来るか読書も
可なりと思ひますが良
書を得るに苦しみます
今は独り瞑想にのみ
耽ッております確かに
それだけでモウ余程向上
した様に思はれます
なんだか絵がずん〳〵
うまくなるように思はれ
ます
いづれ近日に御目にかゝれませう
大に楽でおります
十日過きに伺ひます
九月三日　楽天
鶴さん

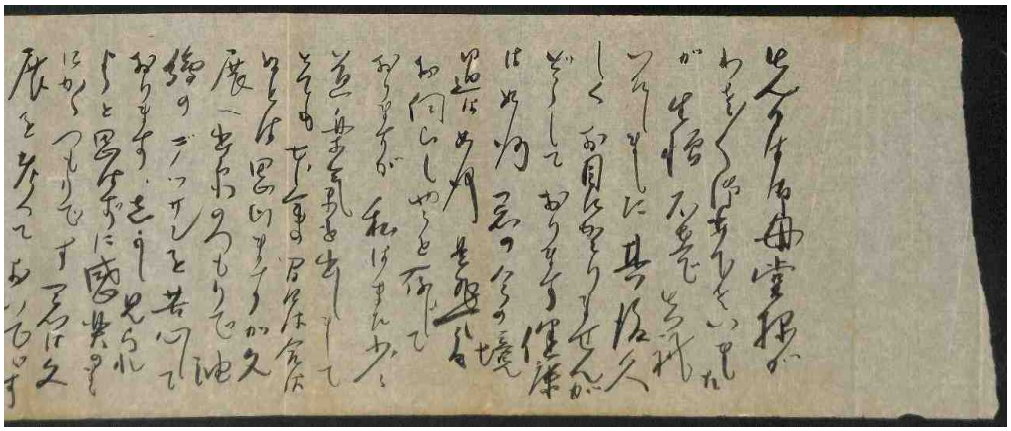
［受信者］東京市本郷区千駄木／林町百八十三、／石井鶴三様
／親展

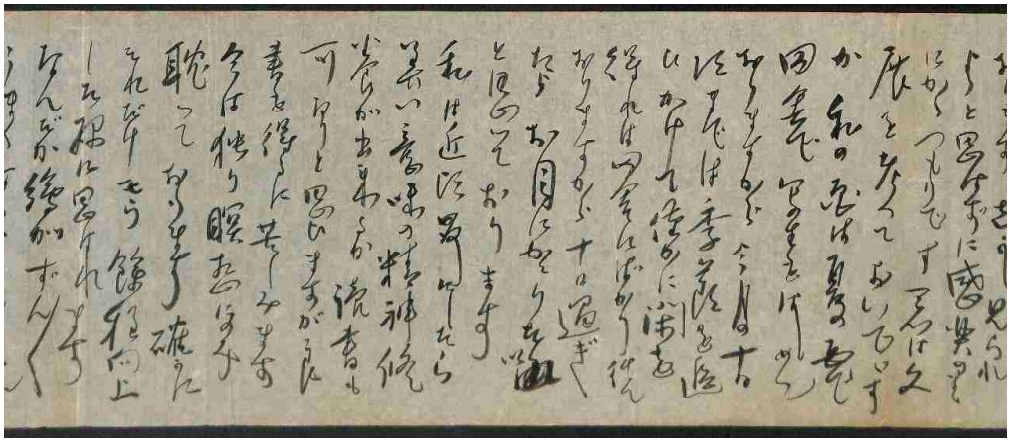
［発信者］青山原宿八十九／北沢楽天
［日付け］九月三日
［消印］《発信》青山／2・9・3／前10―11
《受信》駒込／2・9・3／后0―1

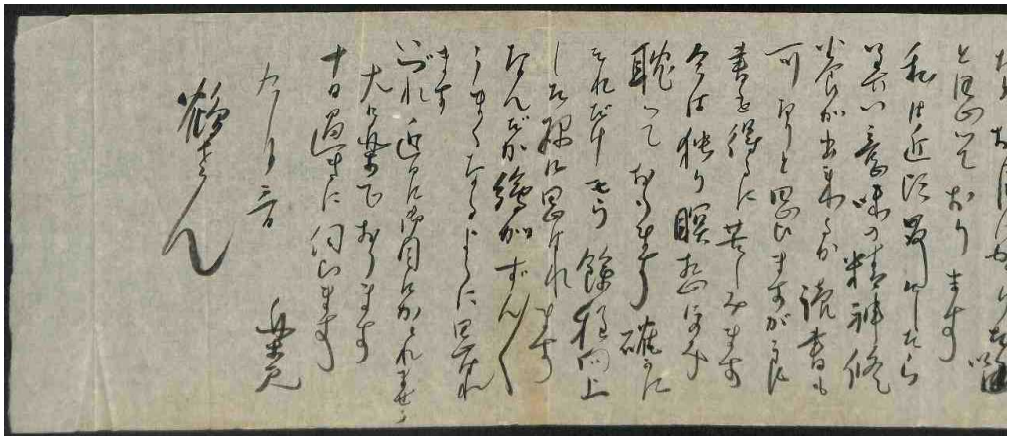
［註］
（1）鶴三の母・ふじ。
（2）明治四十年創立の官展「文部省美術展覧会」のこと。楽天は大正二年に開催された第七回文展への「油絵」の出品を目指していたのであろうか。しかし、『日展史3文展編三』（日展、昭和五十五年十二月）で第七回文展の出品目録を確認する限り、北沢楽天の出品はなかった。









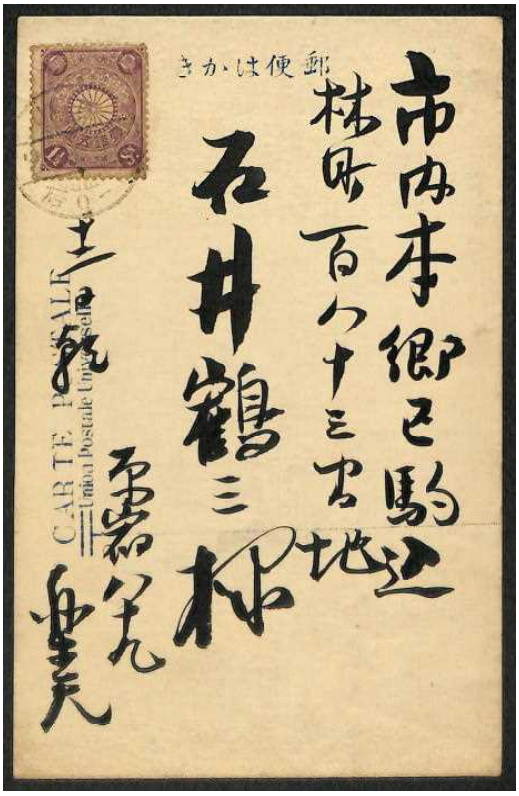


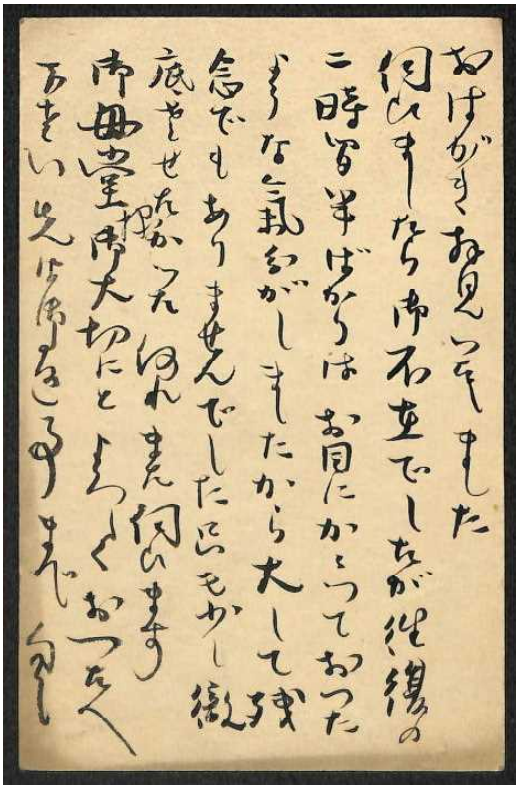
書簡19（高1―241）

葉書　毛筆

おはがき拝見いたしました
伺ひましたら御不在でしたが往復の
二時間半ばかりはお目にかゝっておった
ような気分がしましたから大して残
念でもありませんでした只モ少し徹
底させたかッた何れまた伺ひます
御母堂様御大切にとよろしくおったへ
下さい先は御返事まで　匆々

［受信者］市内本郷区駒込／林町百八十三番地／石井鶴三様
［発信者］原宿八十九／楽天
［日付け］十二日朝
［消印］青山／2・9・12／后0―1
［註］





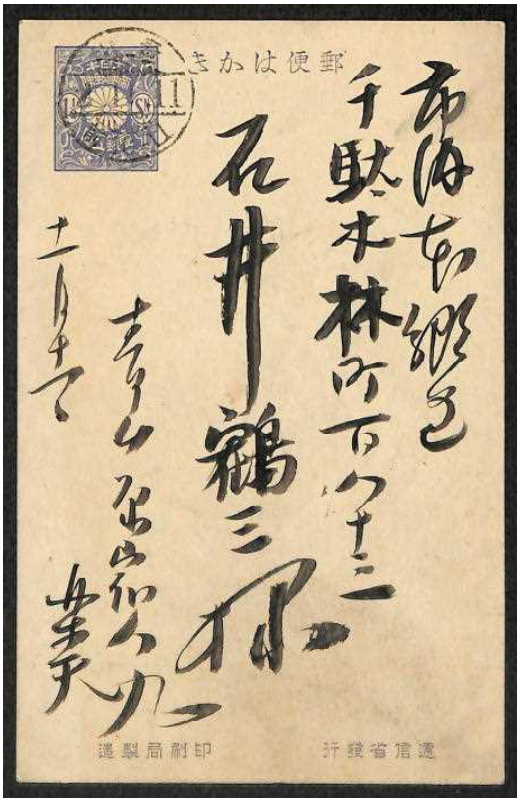
書簡20（高1―240）

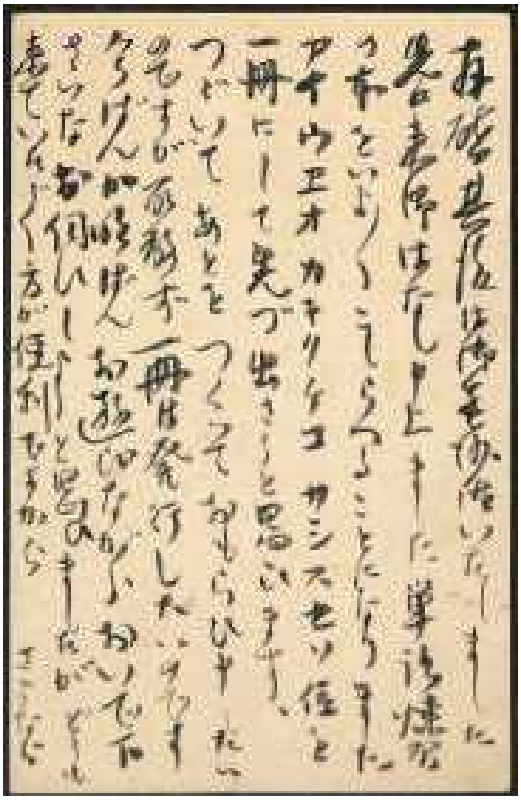
葉書　毛筆

拝啓　其後は御無沙汰いたしました
先日来御はなし申上ました単語煉習
の本[1]をいよ〳〵こしらへることになりました
アイウエオカキクケコサシスセソ位を
一冊にして先づ出さうと思ひます、
つゞいてあとをつくッておもらひ申したい
のですが取敢ず一冊は発行したいのです
今ばんか明ばんお遊びながらおいで下
さいなお伺ひしようと思ひましたがどうも
来ていたゞく方が便利ですから　さよなら

［受信者］市内本郷区／千駄木林町百八十三／石井鶴三様
［発信者］青山原宿八九／楽天
［日付け］十一月十一日
［消印］青山／2・11・11／前10―11

〔註〕
（1）単語練習の本、『教育おとぎ先生　単語づくし』（光彩社、大正三年一月）。大正初期、絵を中心としたいわゆる「絵雑誌」に「単語づくし」が頻出することについては、三宅興子・香曽我部秀幸編『大正期の絵本・絵雑誌の研究　一少年のコレクションを通して』（翰林書房、平成二十一年十一月）に言及がある。





書簡21（高1―177）

巻紙　毛筆

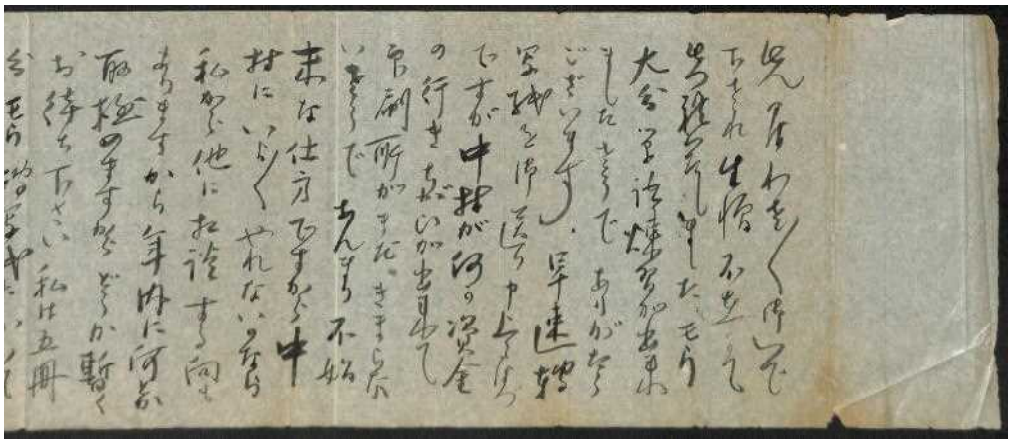
先日はわさ〳〵御いで
下され生憎不在にて
失礼いたしましたモウ
大分単語煉習が出来
ましたさうでありがたう
ございます、早速転
写紙を御送り申上るはづ
ですが中村が何か資金
の行きちがひが出来て
印刷所がまだきまらな
いさうであんまり不始
末な仕方ですから中
村にいよ〳〵やれないのなら
私から他に相談する向も
ありますから年内に何とか
取極めますからどうか暫く
お待ち下さい私は五冊
分モウ転写紙にかいて
あとをこしらへるのを扣へ
ております近々に話が
つきますから其節は
早速おしらせ申ます
からおひまでしたら其
あともお考へおき下さい
決して無駄にはなりません
からどうかよろしく願
ひます私も中村氏の
今の境遇を気の毒に
思ひますので他の仕事を
捨てゝそれにかゝりました
ら殆ントお金の融通が
つかないので私も今は金が
ありませんから其方の助力
はしてやれませんどうでも
他の人にやらせて中村
も其人から多少の分け
前をもらふ事にするが
よろしいと思ひます
お目にかゝっておはなしを
いたしたいのですか今は一寸
多忙ですから其内上る
時には前以てはがき申
あけます、

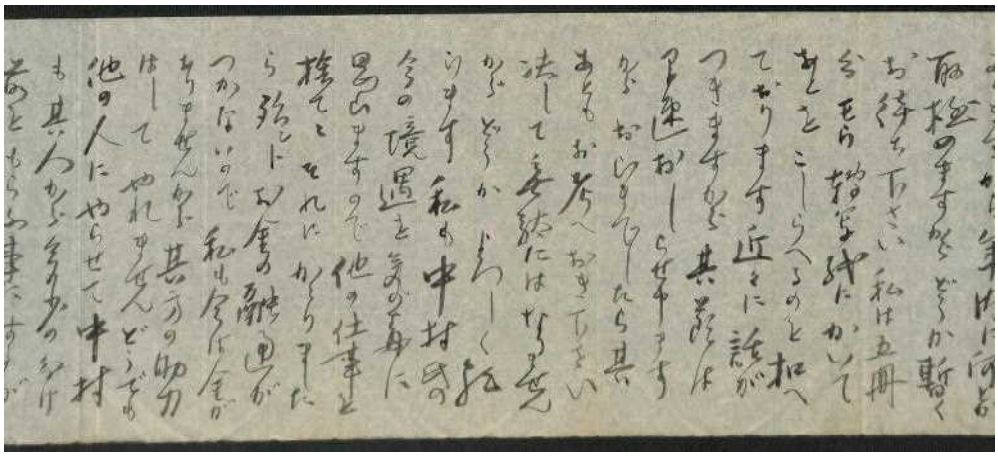
十一月二十九日朝　　楽天

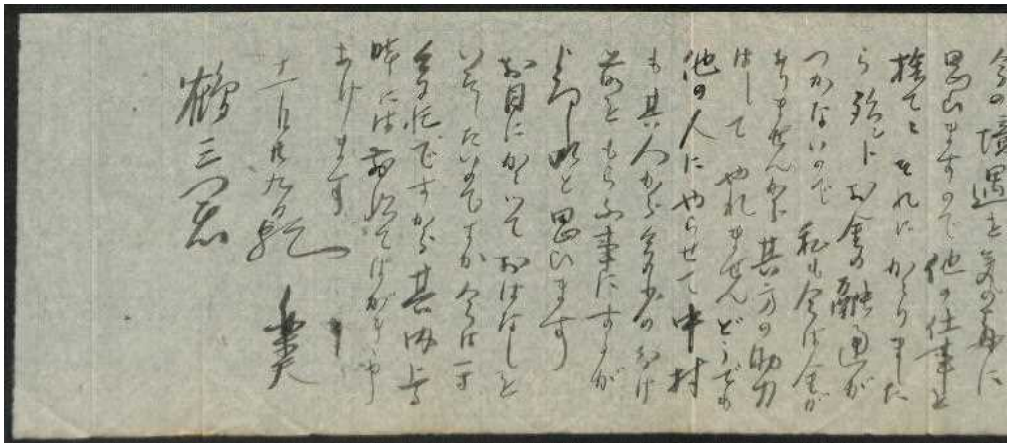
鶴三君

［受信者］本郷区駒込林町一八三／石井鶴三様／親展
［発信者］青山原宿八九／北沢楽天

［日付け］十一月二十九日
［消印］《発信》青山／2・11・29／后0―1
《受信》□込／□・11・□／□□―□





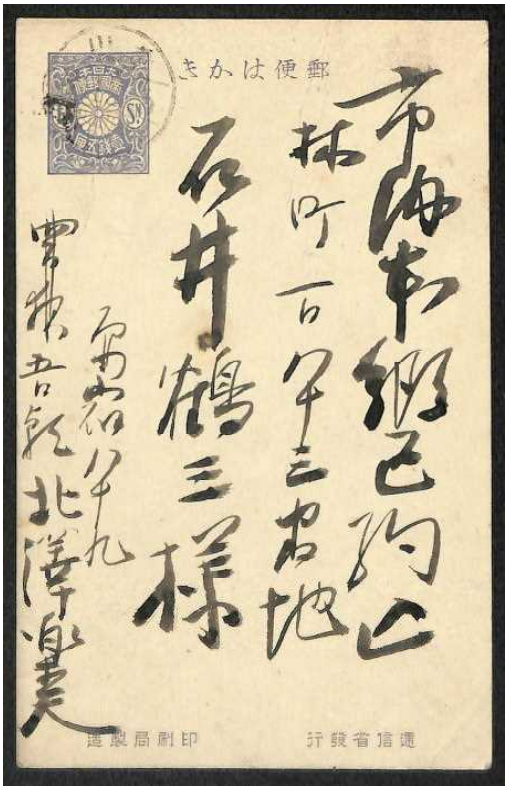


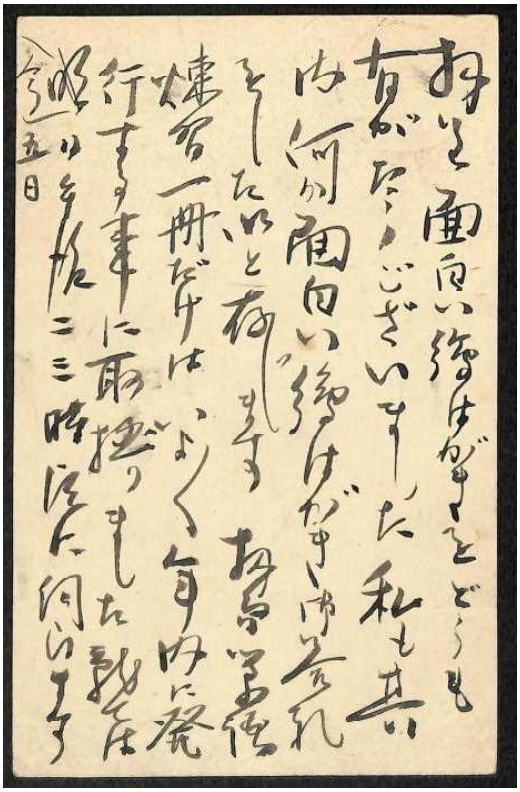
書簡22（高1―242）

葉書　毛筆

拝呈　面白い絵はがきをどうも
有がたうございました私も其
内何か面白い絵はがき御答礼
をしたいと存じます扨而単語
煉習一冊だけはいよ〳〵年内に発
行する事に取極りました就ては
明〔今〕日午後二三時頃に伺ひます
　五日

〔受信者〕市内本郷区駒込／林町百八十三番地／石井鶴三様
〔発信者〕原宿八十九／北沢楽天
〔日付け〕四日夜〔五日朝〕
〔消印〕青山／□・12・5／□□―□



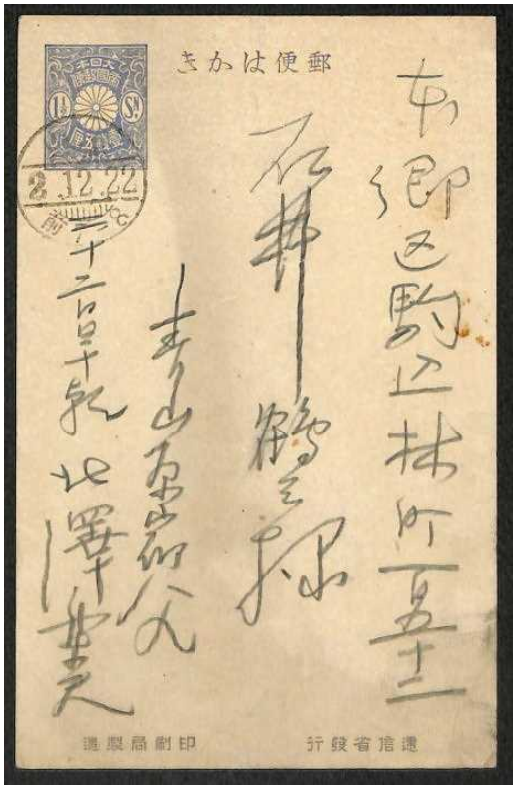


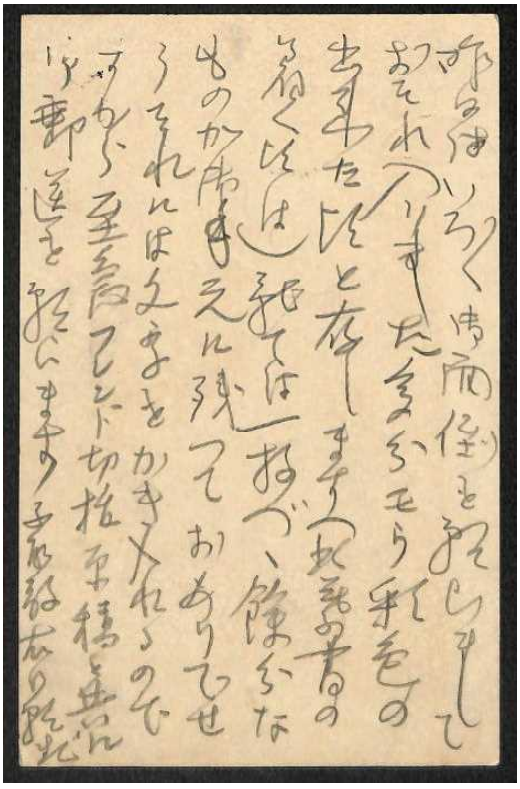
書簡23（高1―244）

昨日はいろ〳〵御面倒を願ひまして
おそれ入りました多分モウ彩色の
出来た頃と存します（此葉書の
着く頃は）就ては一枚づゝ余分な
ものか御手元に残っておありでせ
うそれには文字をかき入れるので
すから至急フレンド切抜原稿と共に
御郵送を願ひます不取敢右御願まで

［受信者］本郷区駒込林町百五十二／石井鶴三様
［発信者］青山原宿八九／北沢楽天
［日付け］二十二日早朝
［消印］□山／2・12・22／前7―8

葉書　鉛筆





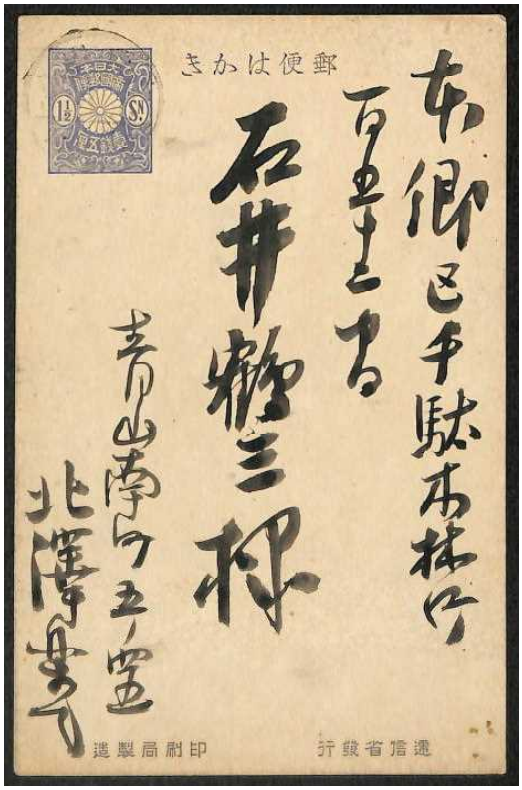
書簡24（高5―144）

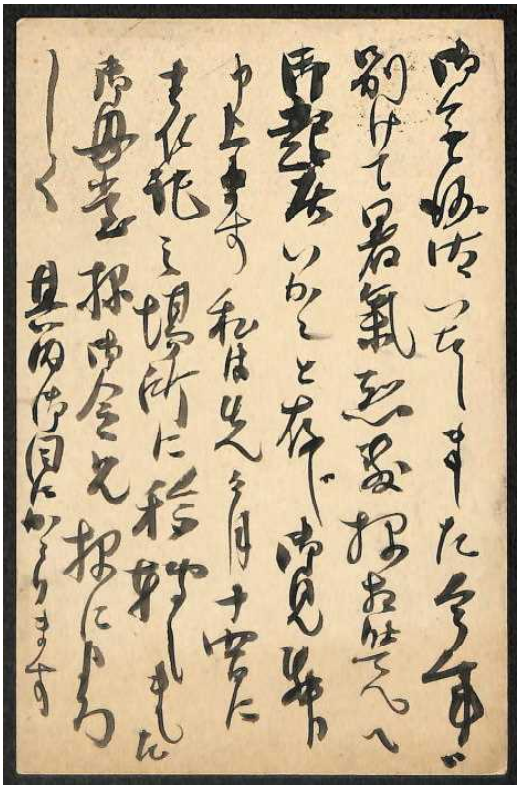
御無沙汰いたしました今年は
別けて暑気烈敷様相覚へ
御起居いかゝと存じ御見舞
申上ます私は先々月十四日に
表記之場所に移転しました
御母堂様御令兄様[1]によろ
しく其内御目にかゝります

葉書　毛筆

［受信者］本郷区千駄木林町／百五十二番／石井鶴三様
［発信者］青山南町五ノ四五／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］□□／□・1・1／□□―□

〔註〕
（1）鶴三の母・ふじ、兄・柏亭。





書簡25（書6―30）

便箋　毛筆

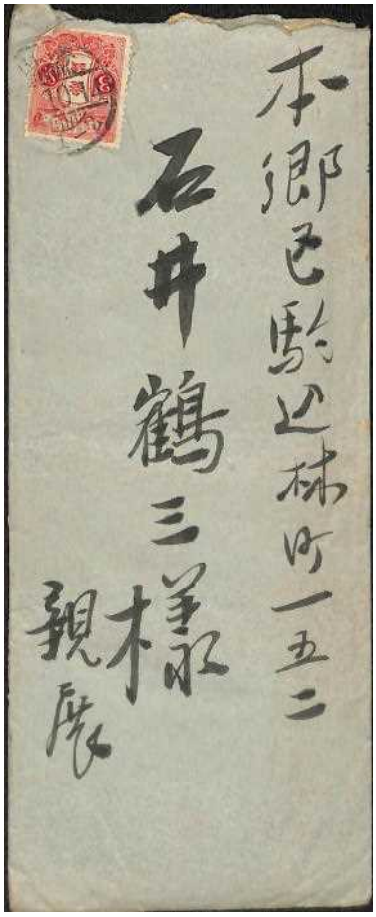
拝啓
一年中で最も好な
時候になりました弥々
御健康で芸術三昧(ママ)に
入ツて居られるとの事を
承り欣羨に堪へません
今朝は二科会[1]の切符
を御送り下さッてありがたう
ぞんします、久しく御目には
かゝりませんが私は心理的に
屢々君と対話した事が
ありますでもそれは昨日の
鶴さんで今日の鶴さんには
やはり御目にかゝらなくば
なるまいと思ひお目にかゝり
たいと思ッております昨日
当舎君が来て中野
方面に遊びに行かれた
事を聞き且つ近日中に
京阪地方へ御旅行の
事も聞きました、必らず
新しい或物を君の思想
之上に附け加へられるでせう
なるべくゆッくりおいでが
よろしいとおもひますお出
かけ前に一度お尋ね
申たいと存じます二十日
前は用事が多くて展
覧会も見物に出かけ
られません二十日過きたら
毎日のやうに見物に出かけ
るつもりであります今年
は別しておもしろさうで
真に愉快に感しており
ます、私もお伺ひいたし
ますが君もお気が向い
たらおいで下さい土曜
日曜は或は一宮の方に居る
事もありますから火水
木曜の内なら私の方は好都
合です尚々私は此頃
いろ〳〵自分のかく画で
煩悶しておりますが自分
だけでは稍々よくなッたと
思ッておりますがどうも
精神修養が足らない
のを遺憾としております
いづれまたお目にかゝッて
お話しゝませう

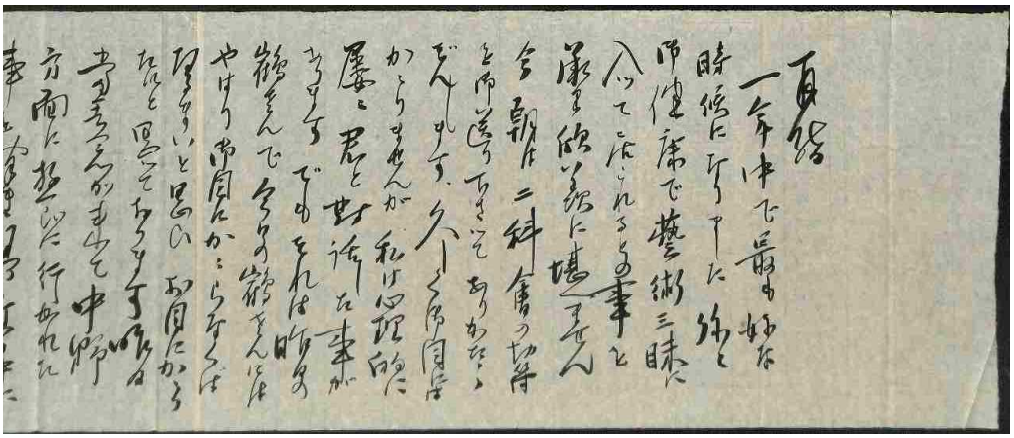
先は御礼まで　匆々頓首
十月十四日　北沢楽天
石井鶴三君

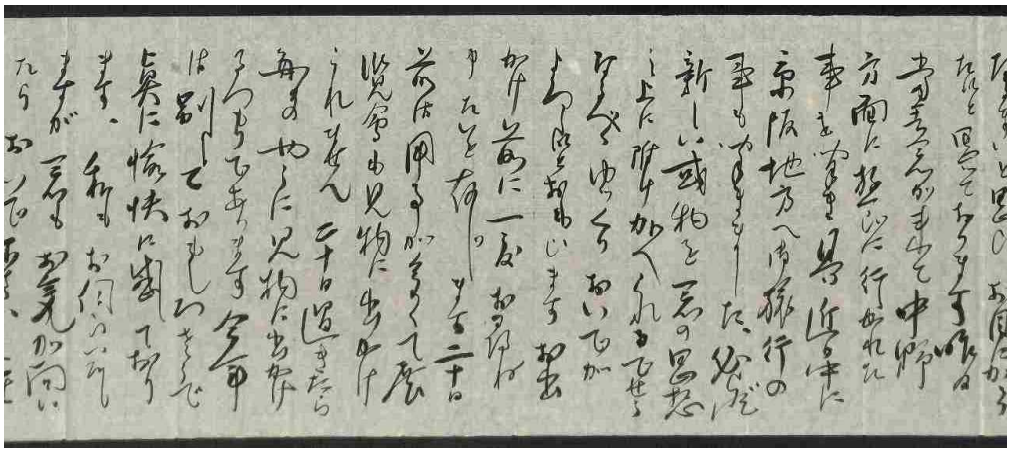
御母堂様柏亭君によろしく
おつたへを願ひます

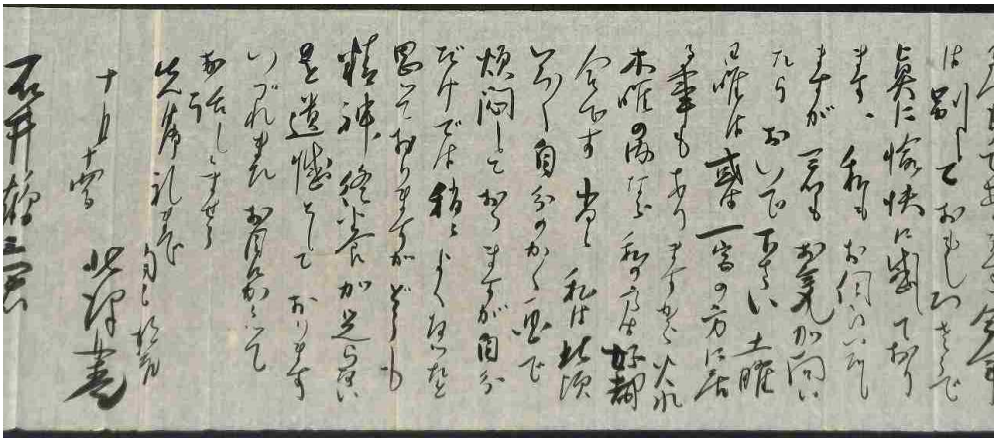
［受信者］本郷区駒込林町一五二／石井鶴三様
［発信者］青山南町五ノ四五／北沢楽天
［日付け］十月十四日
［消印］《発信》青山／□・10・14／□1―2
《受信》駒込／3・10・14／□3―4

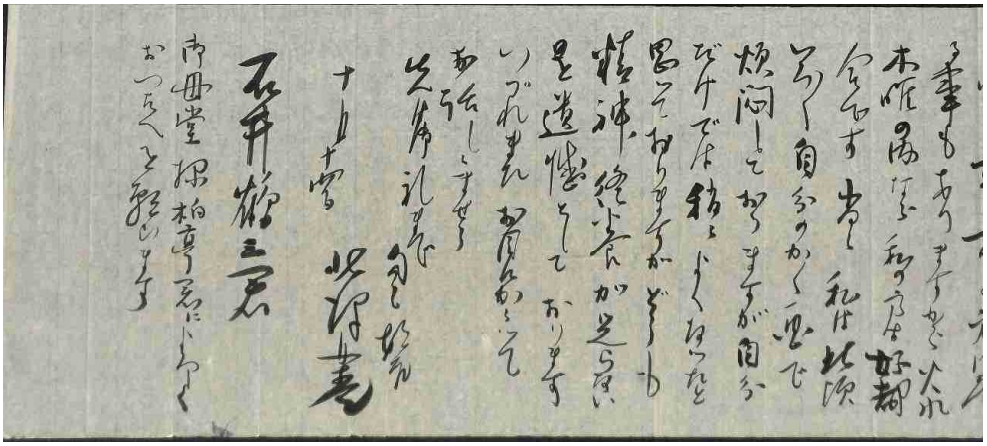
〔註〕
（1）大正三年十月一日から三日まで竹之台陳列館にて開催の第一回二科会展覧会。











書簡26（高1―172B）

拝呈
御無沙汰いたしました
不相変彫刻之御
勉強でせうね大正博[1]
へは出品しますか先日
（二十四日）徳永柳洲[2]氏の
帰朝歓迎会へ出
席しましたら朝倉
文夫[3]君か居ました
同君のかげとさゝやき
は多分パックの種になる
だろうと笑っておりました
君の噂も出て朝倉君
は君の真面目の態度
を褒ておりました
木村梁一[4]君にも逢
ひました君の紹介状を
持て居て出して見せ
ましたそして私の版画
でもいゝから展覧会
をしては如何と
勧誘しておりました
が私は其気になれ
ません
どうも柏亭君の
お頼み之画がつい〳〵
いそかしさにおそくなり
ましてすみません　モウ
程なくやれると思ひ
ます
先日のカードの揮毫
料一枚落第しまし
てそんな事を申ては
失敬ですかどうぞ
あしからず甚だ軽
少ですが渡されまし
たからお届け申ます
来月五日頃までは
中々いそかしいのです
がそれがすぎたらすこし
は楽になるだろう
と思ひます思召が
ありましたらお遊び
いらッしやい私も
伺ひます
単語づくしかやッと
昨日出来て来ました
昨日ではなくモット二三
日も前であッたかも知れ

巻紙　毛筆

ませんが昨日手に入りまし
たから一冊お届け
申ます

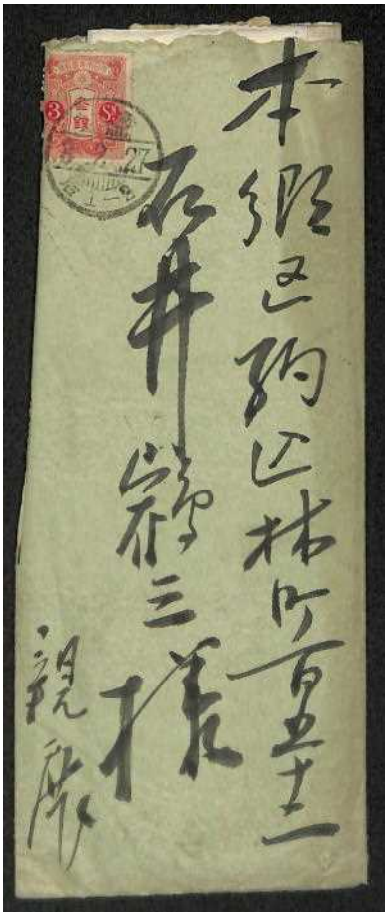
楽天

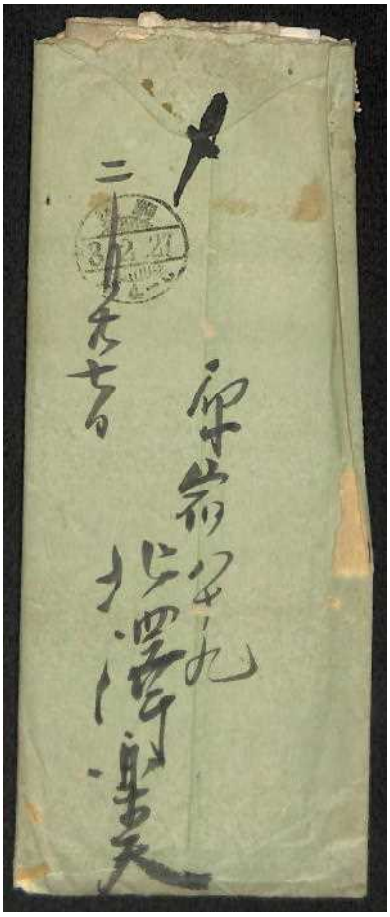
鶴三君
二十七日

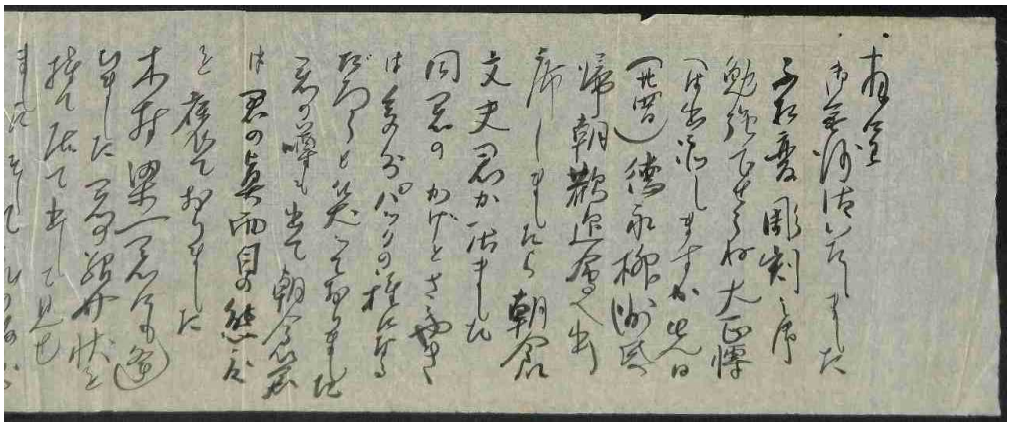
君の名が落ち
ましたがあとの
分に入れる事に
しませう

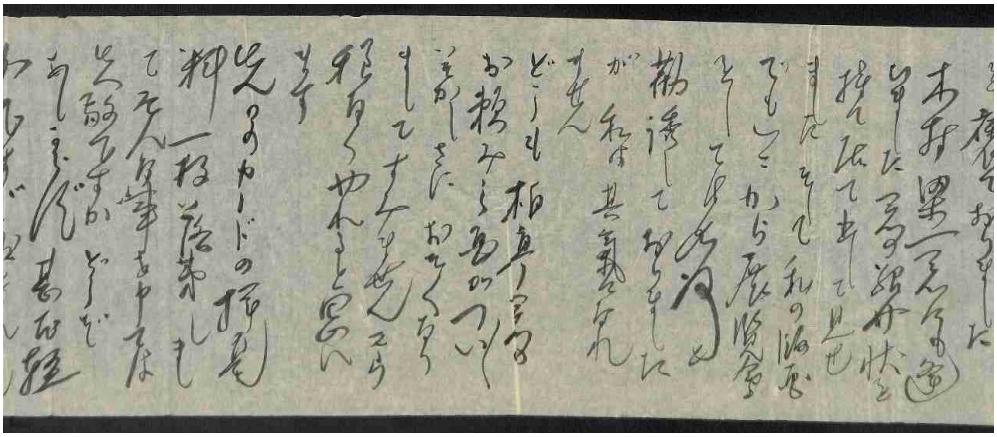
［受信者］本郷区駒込林町百五十二／石井鶴三様／親展
［発信者］原宿八十九／北沢楽天
［日付け］二月二十七日
［消印］《発信》□□／3・2・27／后1—2
《受信》駒込／3・2・27／后4—5

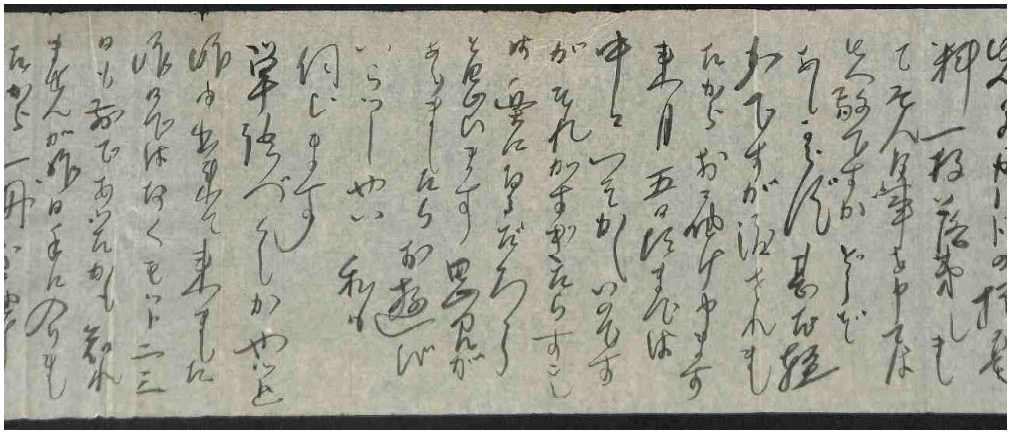
［註］
（1）大正三年三月二十日から七月三十一日まで上野公園にて開催の東京大正博覧会。
（2）画家。明治四年～昭和十一年。明治四十三年渡欧、巴里で画を学び、大正三年帰朝。
（3）彫刻家。明治十六年～昭和三十九年。「かげとさゝやき」は東京大正博覧会出品作。
（4）画家。大正二年、神田三崎町に画廊「ヴィナス倶楽部」を開いた。大正二年にはフューザン会解散後（草土社以前）に結成された「生活社」展覧会や、梅原良三郎（龍三郎）帰朝展覧会を開催している。

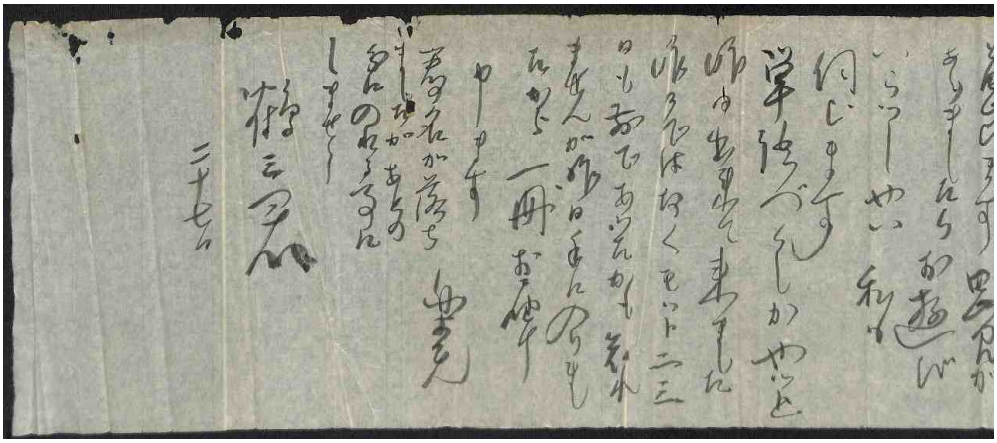












書簡27（高1―172A）

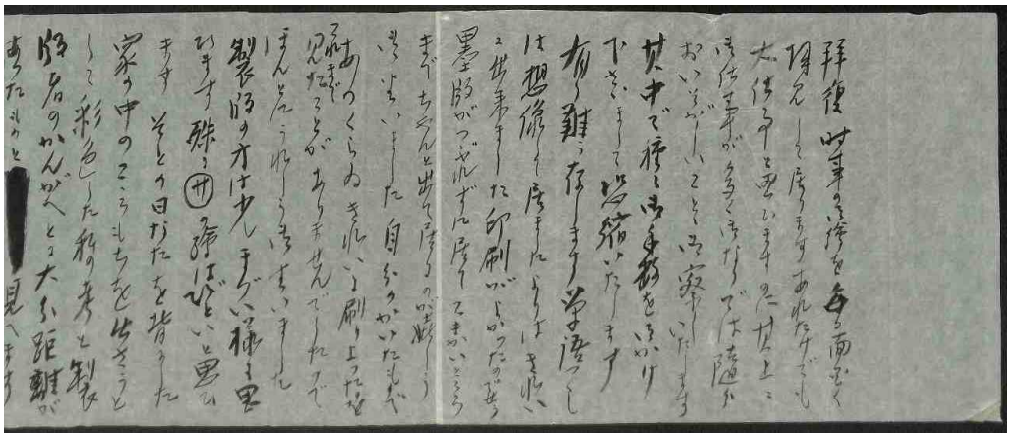
巻紙　毛筆

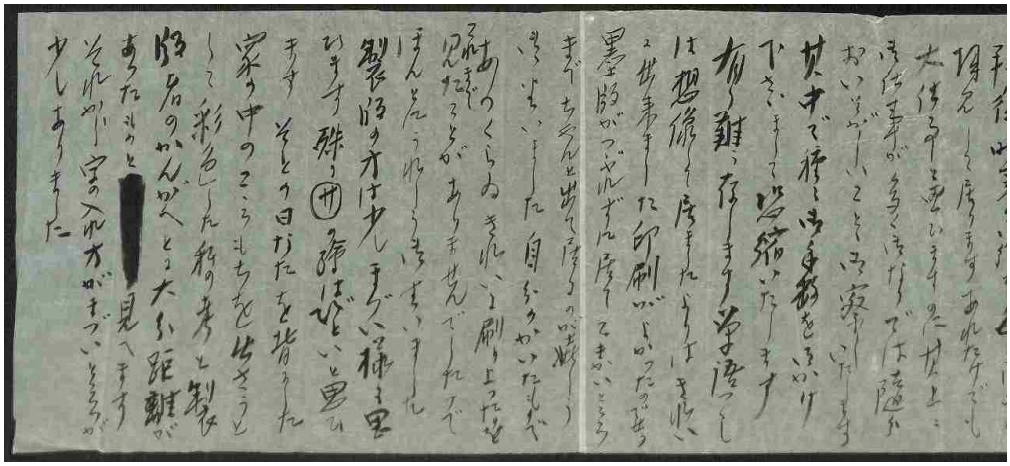
拝復　時事の御絵[1]を毎日面白く
拝見して居りますあれたけでも
大仕事と思ひますのに其上に
御仕事が多く御なりでは随分
おいそがしいことゝ御察しいたします
其中で種々御手数を御かけ
下さいまして恐縮いたします
有り難う存します単語つくし
は想像して居ましたよりはきれい
に出来ました印刷がよかったのでせう
墨版がつぶれずに居てこまかいところ
までちやんと出て居るのが嬉しう
御坐いました自分のかいたもので
あのくらゐきれいに刷り上ったのを
これまで見たことがありませんでしたので
ほんとにうれしう御坐いました
製版の方は少しまづい様に思
ひます殊に㋚の絵はびとい（ママ）と思ひ
ますそとの日なたを背にした
家の中のこゝろもちを出さうと
して彩色した私の考と製
版者のかんがへとに大分距離が
あったものと思ひます〔見へます〕
それから字の入れ方がまづいところが
少しありました

《**書簡26**の封筒に同封されたもの》

〔註〕

（1）本書簡は**書簡26**の封筒に共に収めてあり、『教育おとぎ先生　単語づくし』（大正三年）の話題もあることから大正三年二月から三月にかけて発信されたと考えられる。大正二年七月以後紙面改革を行った『時事新報』は大正三年一月から三月一五日まで、「現代文壇名家の面影」と題した文士似顔絵を連載している（池内輝雄「文芸欄と漫画」、『時事新報目録　文芸篇　大正期』八木書店、平成一六年一二月）が、この連載漫画が鶴三の絵であるか否かは不明。



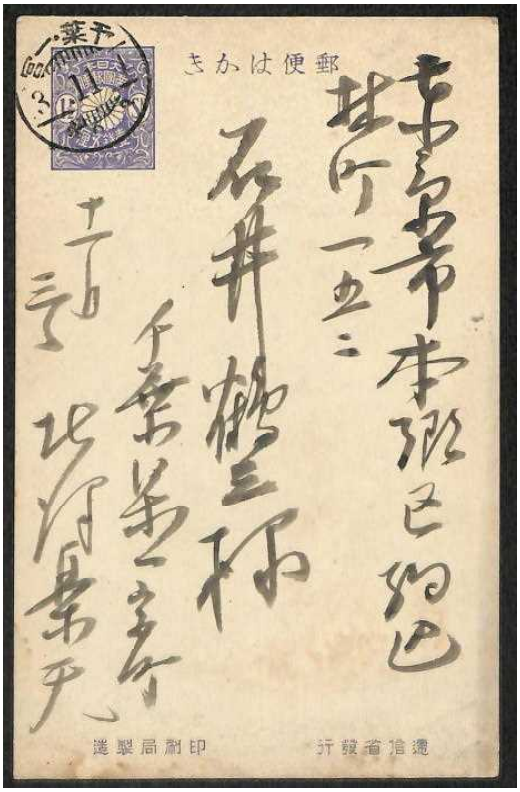


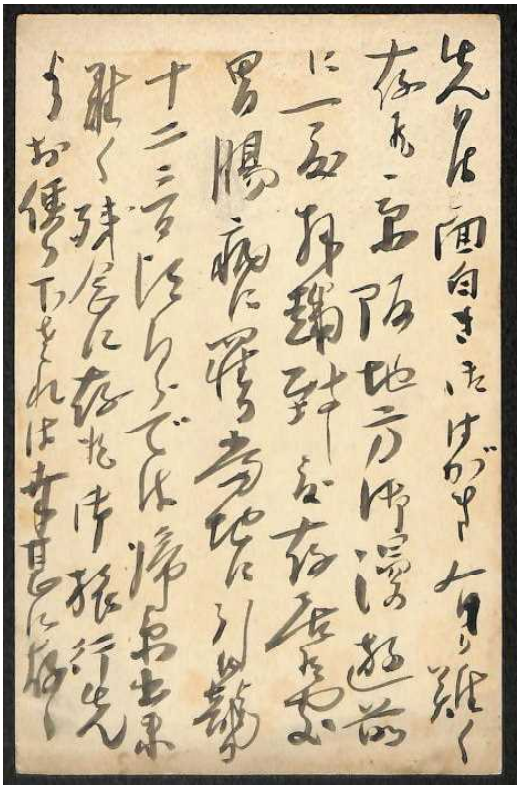
書簡28（高5―117）

先日は面白き御はがき有り難く
存候京阪地方御漫遊前
に一度拝趨致し度存居候処
胃腸病に罹り当地に引籠り
十二三日頃ならでは帰京出来
難く残念に存候御旅行先
よりお便り下されは幸甚に存候

［受信者］東京市本郷区駒込／林町一五二／石井鶴三様
［発信者］千葉県一宮町／北沢楽天
［日付け］十一月三日
［消印］千葉・一宮／3・11・4／□□―□

葉書　毛筆





書簡29（高1―171）

巻紙　毛筆

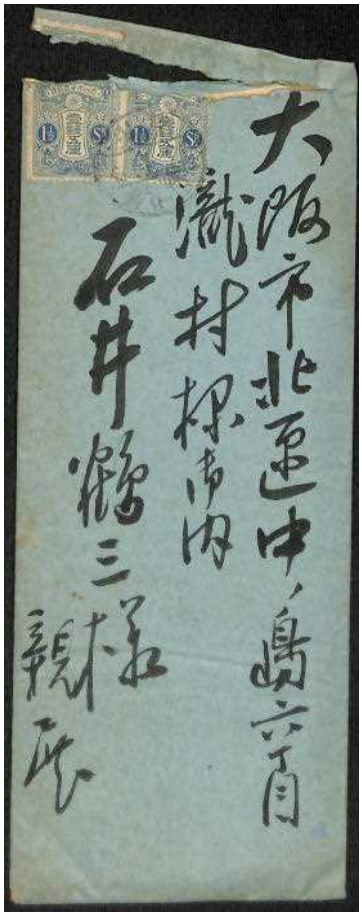
恭賀新年
大正四年はあなたには
別して新らしい年でせう
お手紙の御様子や私の想
像いたしました処で
偉大なる奈良之芸術
は私共はまだ味ふ資格
が出来て居ないと思ッて
おります憧憬之念に堪へ
ません益々努力して
大正四年は私にも意味
深い新年にしたいと思
ひます鹿之画それから
前にいたゞいた画はがき
珍蔵いたしております
度々私の病気をお尋ね
下さいましてありがたう
お察し之通り全快いたし
ました病中も筆を執り
得なかッた日は幾日もありません
でした医者の言葉のあて
にならないのを今更に感し
ました病気もたしかに
自分で治したのですくり返し
くり返し仝し事を思ひ
当る愚かしい人間だと
自ら嘲けるのみです
お手紙のお返事を怠り
失礼でした怠ッてはおり
ません心の内ではもう幾
十遍御返事をして居る
のです仰せの通り居は
志を移すといふ諺の通り
定めし雅嚢を肥やされ
た事でせう其意味
からこの次は洋行も
悪くはありますまい
どうぞお達者で
では京都へお移りでし
たらまたおしらせ下さい
さよなら
一月二十日よる

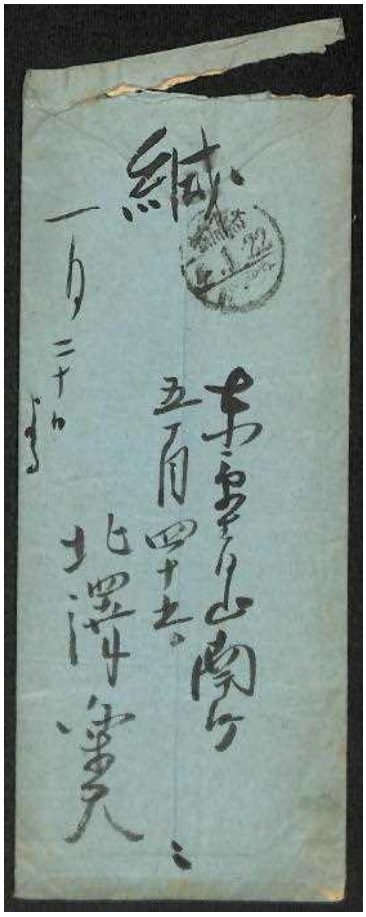
楽天

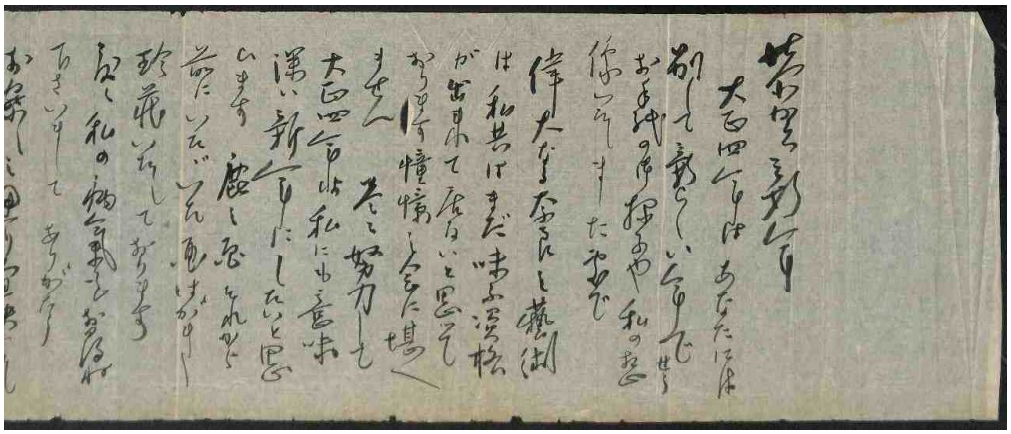
石井鶴三様

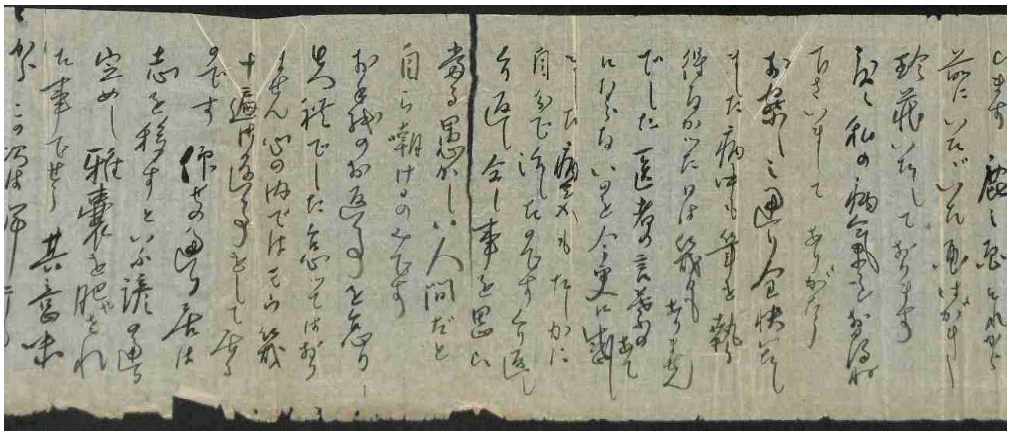
この頃角力写生やら
雑誌の編輯がかち合ひ
齷齪とくらしており
ます

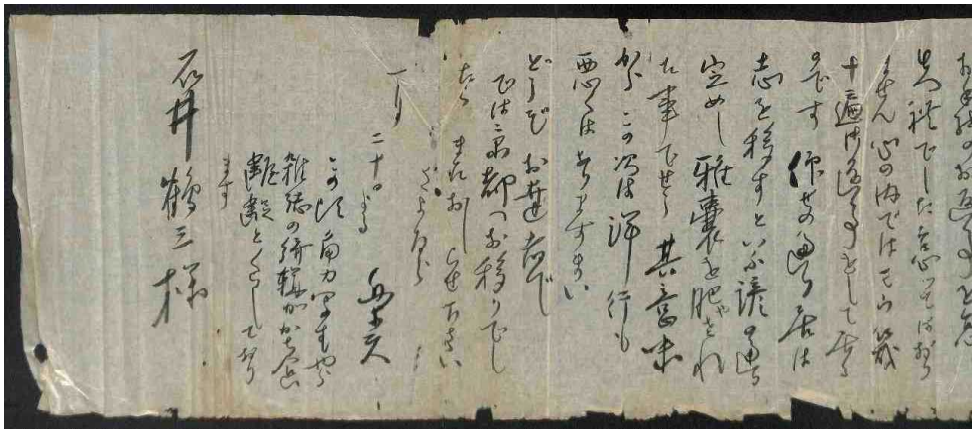
［受信者］大阪市北区中ノ島六丁目／瀧村様御内／石井鶴三様／親展
［発信者］東京青山南町／五丁目四十五／北沢楽天
［日付け］一月二十日よる
［消印］《発信》□山／□・1・21／前9―10
《受信》大阪中央／4・1・22／前□―3









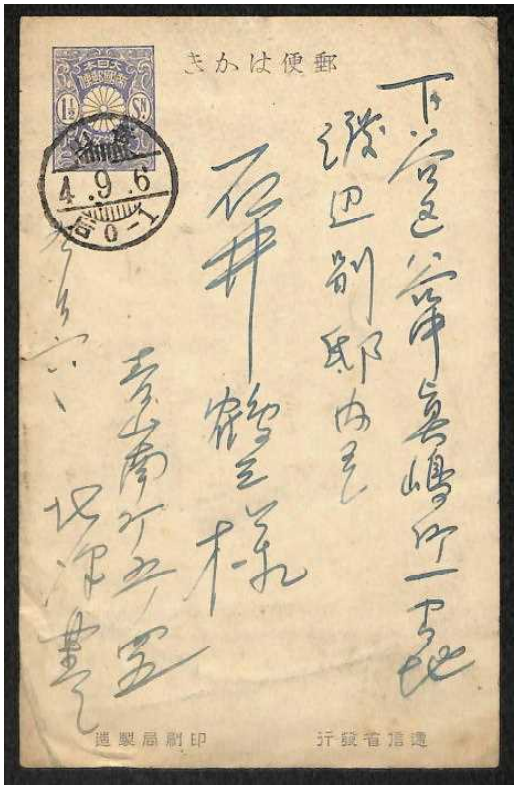


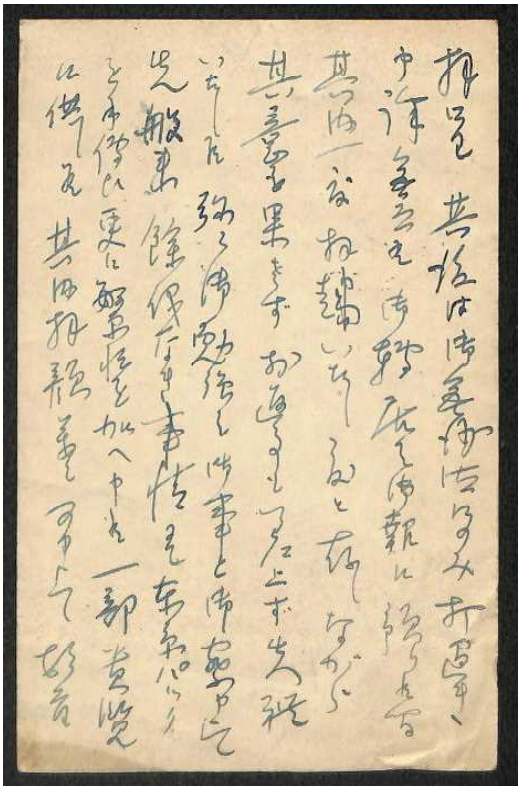
書簡30（高1―249）

拝呈　其後は御無沙汰にのみ打過き
申訳無之候御転居之御報に預り候間
其内一度拝趨いたし度と存しながら
其意を果さずお返事も差上ず失礼
いたし候弥々御勉強之御事と御察申上候
先般来余儀なき事情にて東京パック
を手伝ひ更に繁忙を加へ申候一部貴覧
に供し候其内拝顔万々可申上候　頓首

［受信者］下谷区谷中真島町一番地／渡辺別邸内にて／石井鶴三様
［発信者］青山南町五ノ四五／北沢楽天
［日付け］九月六日
［消印］青山／4・9・6／后0―1

葉書　ペン

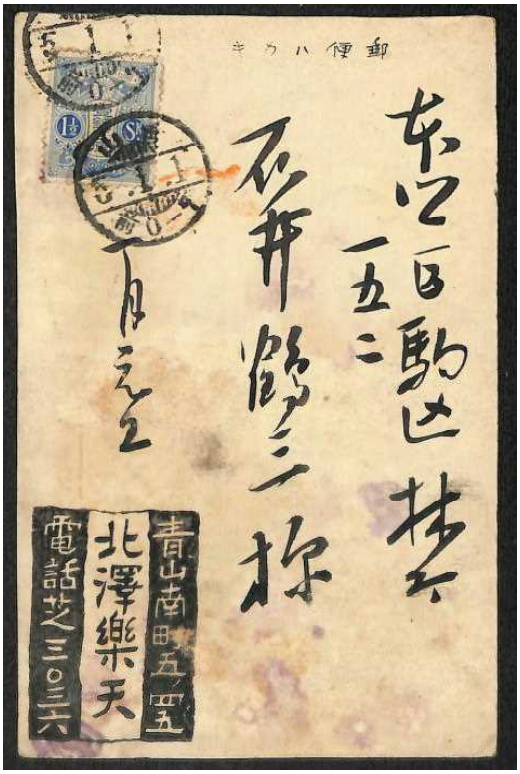




書簡31（高1―247）

葉書　毛筆

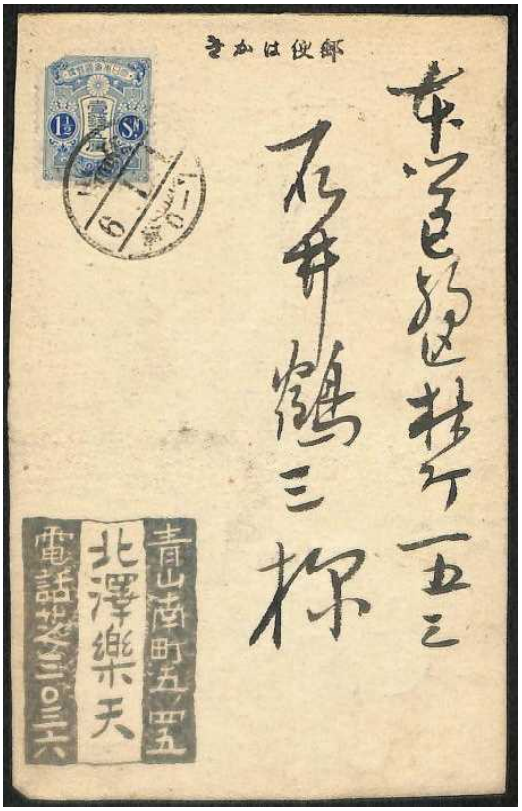
［受信者］本郷区駒込林町／一五二／石井鶴三様
［発信者］《方印》青山南町五ノ四五／北沢楽天／電話芝三〇三六
［日付け］一月元旦
［消印］青山／5・1・1／前0―7



書簡32（高5―123）

葉書　毛筆

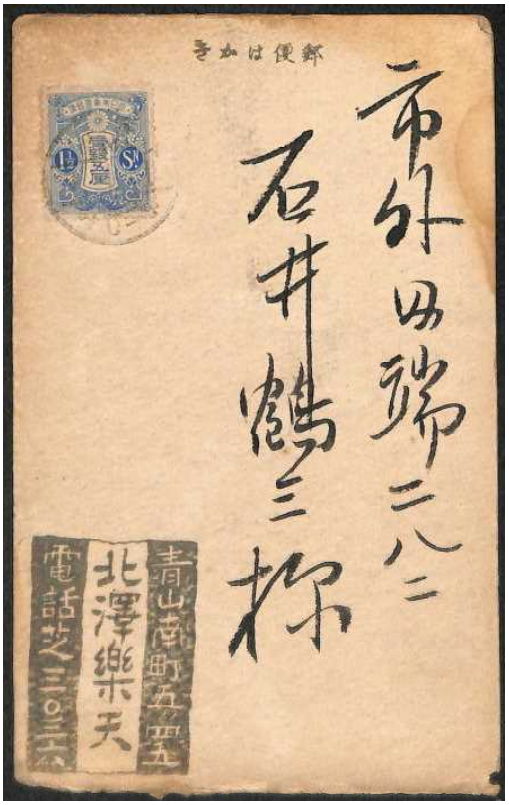
［受信者］本郷区駒込林町一五三／石井鶴三様
［発信者］《方印》青山南町五ノ四五／北沢楽天／電話芝三〇三六
［日付け］《記載なし》
［消印］□山／6・1・1　前0―7



書簡33（馬場５９―８３）

葉書　毛筆

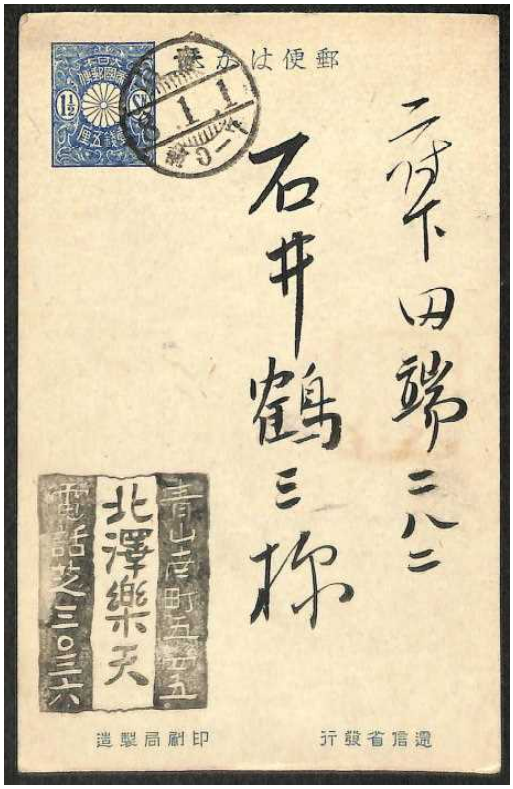
［受信者］市外田端二八二／石井鶴三様
［発信者］《方印》青山南町五ノ四五／北沢楽天／電話芝三〇三六
［日付け］《記載なし》
［消印］□□／□・□・□／□□―□



書簡34（高5―120）

葉書　毛筆

［受信者］府下田端二八二／石井鶴三様
［発信者］《方印》北沢楽天／青山南町五ノ四五／北沢楽天／電話芝三〇三六
［日付け］《記載なし》
［消印］青山／8・1・1／前0―7



書簡35（高1―246）

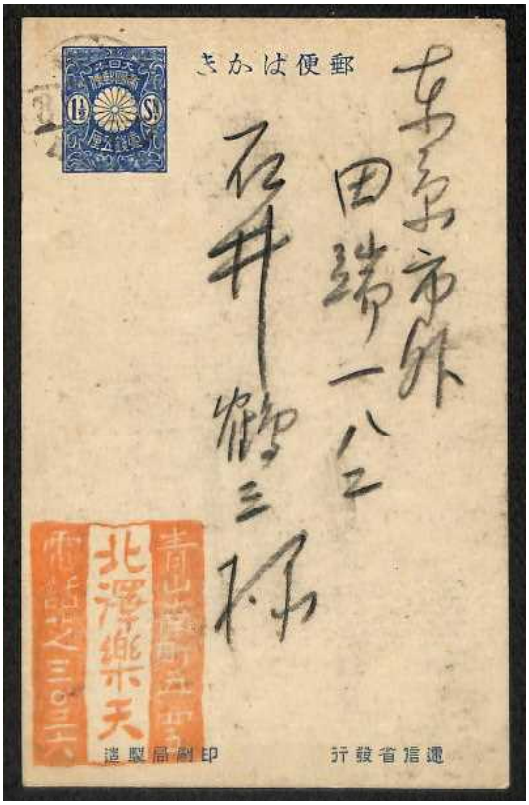
葉書　鉛筆

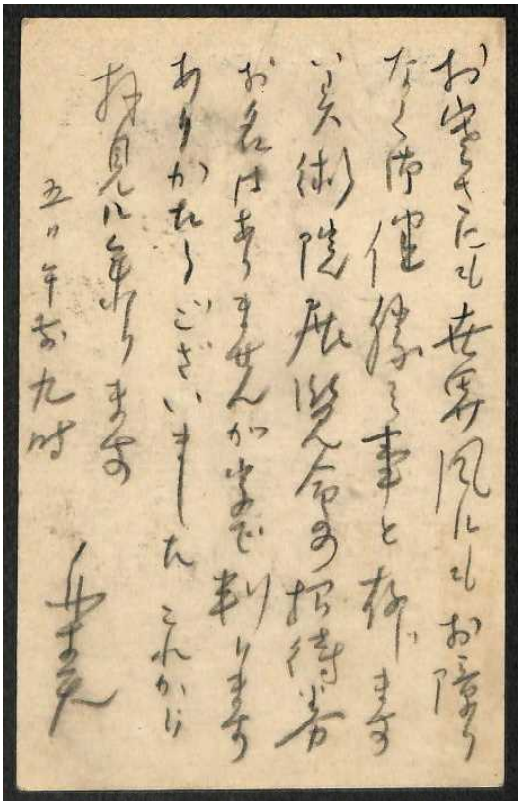
お寒さにも世界風[1]にもお障り
なく御健勝之事と存じます
美術院展覧会[2]の招待券
お名はありませんが字で判ります
ありかたうございましたこれから
拝見に参ります
五日午前九時

楽天

［受信者］市外田端一八二（ママ）／石井鶴三様
［発信者］《朱方印》青山南町五ノ四五／北沢楽天／電話芝三〇三六
［日付け］《記載なし》
［消印］□／□□8・5／前□―□

〔註〕
（1）文中の「世界風」（世界風邪、「西班牙風邪」とも称した）の流行は大正七年末から大正八年。
（2）大正八年二月一日から十日まで竹之台陳列館にて開催の第五回日本美術院試作展覧会。鶴三は「自画像」「秋の山」を出品した。

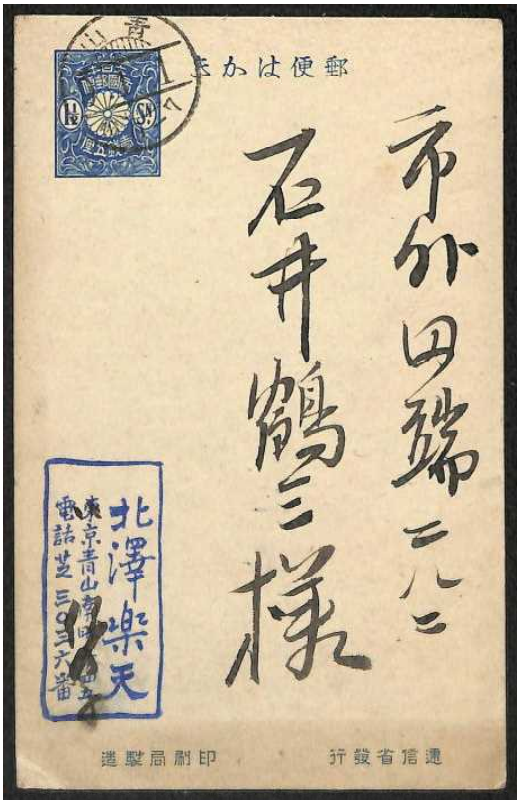




書簡36（高1―248）

葉書　毛筆

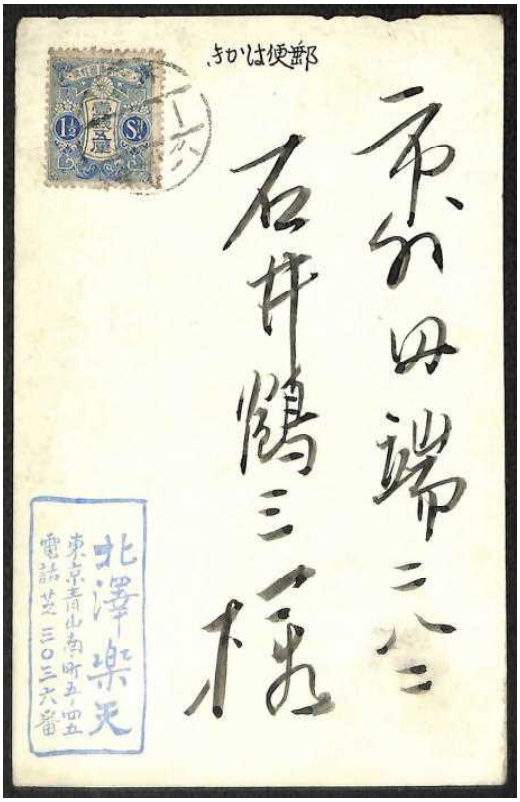
［受信者］市外田端二八二／石井鶴三様
［発信者］《青方印》北沢楽天／東京青山南町五ノ四五／電話芝三〇三六番《「いの子」と毛筆で上書き》
［日付け］《記載なし》
［消印］青山／9・1・1／前0―7



書簡37（高5―135）

葉書　毛筆

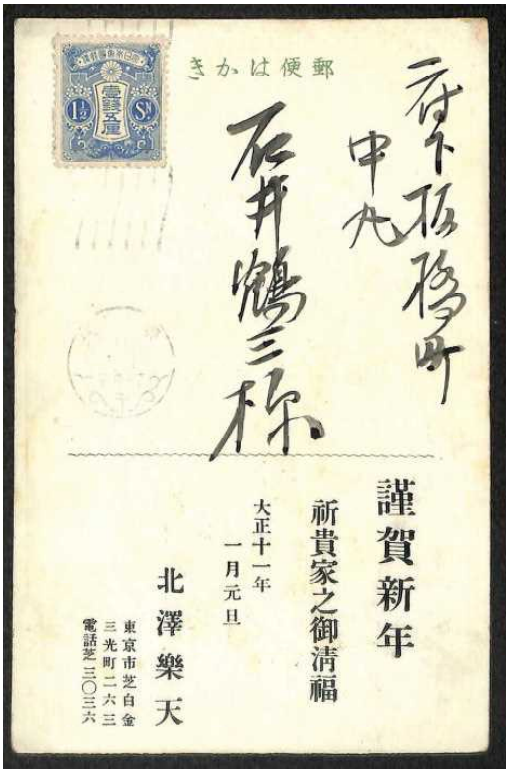
［受信者］市外田端二八二／石井鶴三様
［発信者］《青方印》北沢楽天／東京青山南町五ノ四五／電話芝三〇三六番
［日付け］《記載なし》
［消印］□□／□・1・1／□□―□



書簡38（高5―126）

葉書　毛筆

［受信者］府下板橋町／中丸／石井鶴三様
［発信者］《印刷》北沢楽天／東京市芝白金／三光町二六三／
電話芝三〇三六
［日付け］《記載なし》
［消印］□□／□・1・1／□□―□



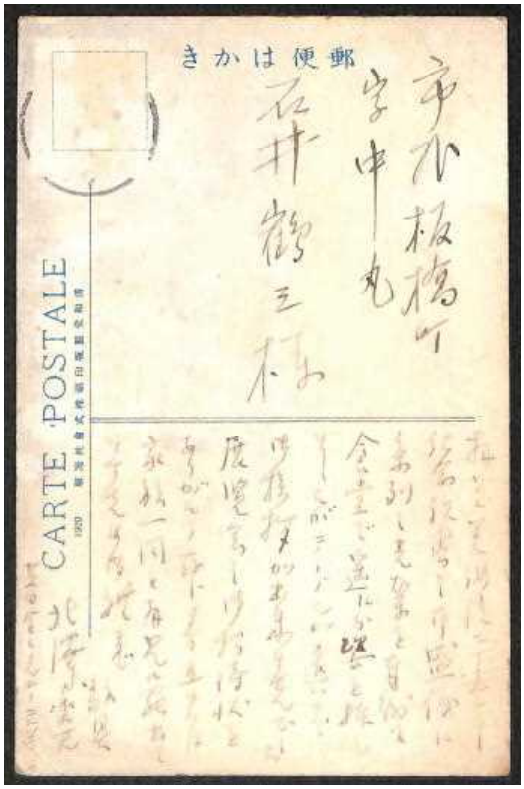
書簡39（馬場５９―６３）

拝呈　美術院二十五年
紀念祝典[1]之御盛儀に
参列之光栄を奉謝候
食堂で遥にお姿を拝し
ましたがテーブルが遠いので
御挨拶が出来ませんでした
展覧会之御招待状を
ありがたう存じます五日には
家族一同と拝見に罷出て
ます先は御礼まで　敬具

葉書　ペン

［受信者］市外板橋／字中丸／石井鶴三様
［発信者］北沢楽天／芝白金三光町二六三
［日付け］《記載なし》
［消印］《切手剥離のため枠のみ》

〔註〕
（1）大正十一年九月二日、日本美術院創立二十五周年記念祭が行われ、上野精養軒で祝賀会が行われた。



書簡40（馬場５９―６１）

葉書　ペン

いつも御機嫌よく御暮
し之由結構に存上候
先日御光来之節は
生憎旅行中にて拝顔
を得ず残念に存候明日は
御厚情により院展[1]
拝見に参り或は拝眉
を得べく哉と楽み居候
先は御招待御礼迄申上候

楽天
伊乃子

［受信者］市外板橋町／中丸／石井鶴三様／御奥様
［発信者］楽天／伊乃子
［日付け］八月尽日
［消印］白金／12・8・31／后10―12

〔註〕
（1）大正十二年九月一日から竹之台陳列館にて開催の第十回日本美術院展覧会。鶴三は「松沢氏寿像」を出品したが、初日に関東大震災に被災し、中止となった。

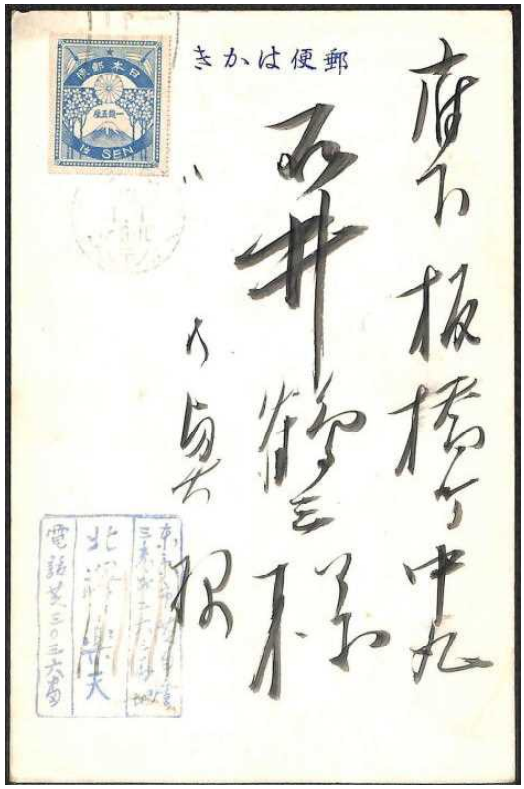
郵便はがき
POST CARD
POSTKARTE (FOR ADDRESS ONLY)

（男鹿名所）
鐙　島
（船川港県営旅館賃部発行）

書簡41（馬場５９―７０）

葉書　毛筆

［受信者］府下板橋町中丸／石井鶴三様／御奥様
［発信者］《青方印》東京市芝白金／三光町二六三番地／北沢
楽天／電話芝三〇三六番
［日付け］《記載なし》
［消印］白金／13・1・1／□9―10



書簡42（馬場５９―６２）

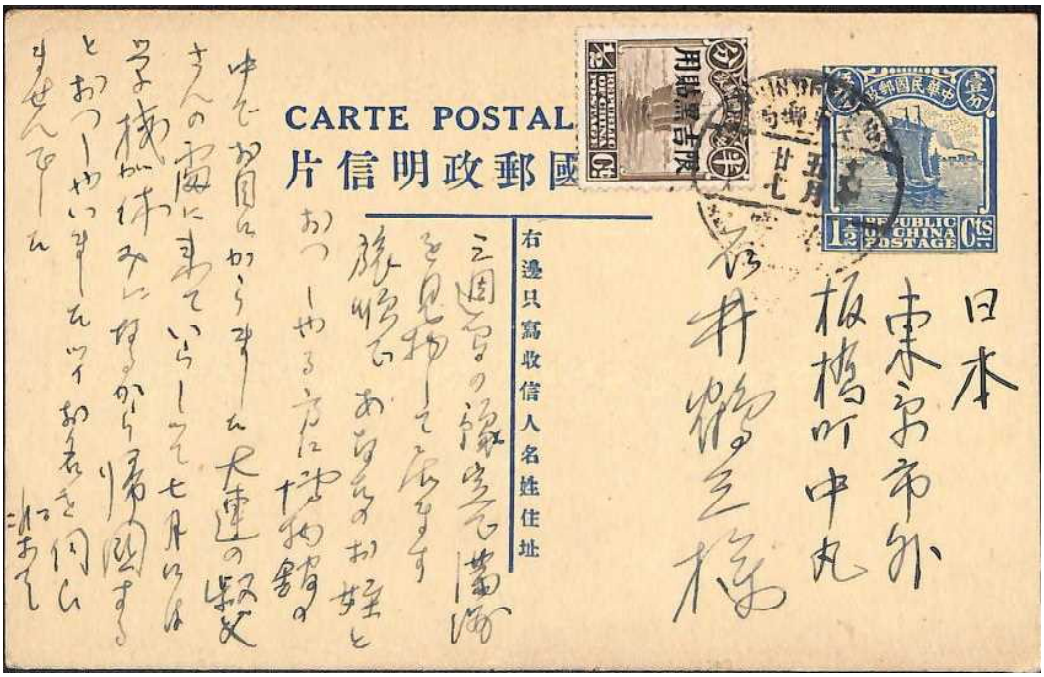
葉書　ペン

《オモテ》
三週間の予定で満洲
を見物[1]して居ます
旅順であなたのお姪と
おっしやる方に博物館の
中でお目にかゝりました大連の叔父
さん[2]の処に来ていらしッて七月には
学校が休みになるから帰国する
とおっしやいましたツイお名を伺ひ
ませんでした　楽天

《ウラ》
哈尓賓の露西亜婦人は四十五十の
おはあさんまで真赤な帽子で
短いスカートのきものを着て居ます
楽天写

［受信者］日本／東京市外／都板町中丸／石井鶴三様
［発信者］《記載なし》
［日付け］《記載なし》
［消印］□□郵局　五月二十七□

〔註〕
（1）楽天は昭和二年五月十日より、池部鈞らとともに満洲・朝鮮を観光視察した。彼らの紀行・絵画は『漫画の満洲』（大阪屋号書店、昭和二年十月）にまとめられ、楽天も作品を寄せている。同書によれば、一行が大連に入ったのは五月十四日、発したのは同十七日であった。「博物館」は、旅順にあった関東庁博物館（現・旅順博物館）で、楽天は「満蒙の現況風俗から二三千以前の古陶器石器古銭土偶其他新疆地方から発掘した武人と婦人のミイラ西蔵の壁画など頗る見るべきものが多い」と記している（百六十九頁）。
胡砂吹く風も漸く凪ぎ、野山は緑に甦へる陽春五月の満洲を東京の八新聞の漫画記者が観光視察の途に上つた、一行は海路を神戸から一直線に大連に上陸し、南満鉄道の本線を北へ巡次に見物し、長春よりは東支鉄道にて哈爾浜に至り、此処を最終の観光地点とし、帰路は安奉線を経由し朝鮮の風光を賞して帰つた、限られたる短時日の旅程にて比較的多くの事物を視察し得たるは東道の主人たる満鉄の加藤新吉君と及び鮮鉄の前田東水君の周到なる斡旋に依つた事を感謝する、（無署名「漫画の満洲に就て」、『漫画の満洲』巻頭序文）。
（2）満鉄に勤めていた次兄の石井貞次。


CARTE POSTAL
國郵政明信片
右邊只寫收信人名姓住址
中華民國郵政
REPUBLIC OF CHINA POSTAGE
日本
東京市外
板橋町中丸
井上様

書簡43（書4―184）

葉書　ペン

《小川治平[1]の死亡通知と告別式の連絡状》

［受信者］板橋町中丸二六六／石井鶴三様

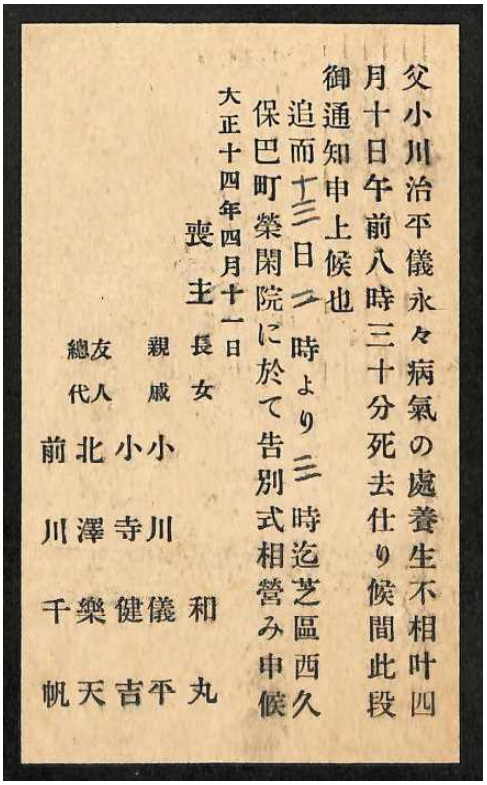
［発信者］《記載なし》

［日付け］《印刷》大正十四年四月十一日

［消印］四谷／14・4・11／前10―11

〔註〕

（1）楽天門下に出発した漫画家。明治二十年～大正十四年。北沢楽天は先の『第二次東京パック』の終刊以降、『時事新報』に戻っていた。新聞読者の急増に呼応して、一九二一年に時事新報日曜付録『時事漫画』を創刊させた。発効部数は一〇万部を数え、二〇世紀初頭の『時事漫画』の復活をみた。自身の後継者と目する小川治平を巻頭の漫画に登用した（一九二一年）が、小川の急逝（一九二五年）により、楽天のモチベーションは急速に低下してしまった。（茨木正治『メディアのなかのマンガ―新聞一コママンガの世界』臨川書店、平成十九年七月、六十二頁）


父小川治平儀永々病氣の處養生不相叶四月十日午前八時三十分死去仕り候間此段御通知申上候也
追而十三日二時より三時迄芝區西久保巴町榮閑院に於て告別式相營み申候
大正十四年四月十一日
喪主　長女　和丸
親戚　小川儀平
小寺健吉
總友代人　北澤樂天
前川千帆

書簡44（馬場５１―４４）

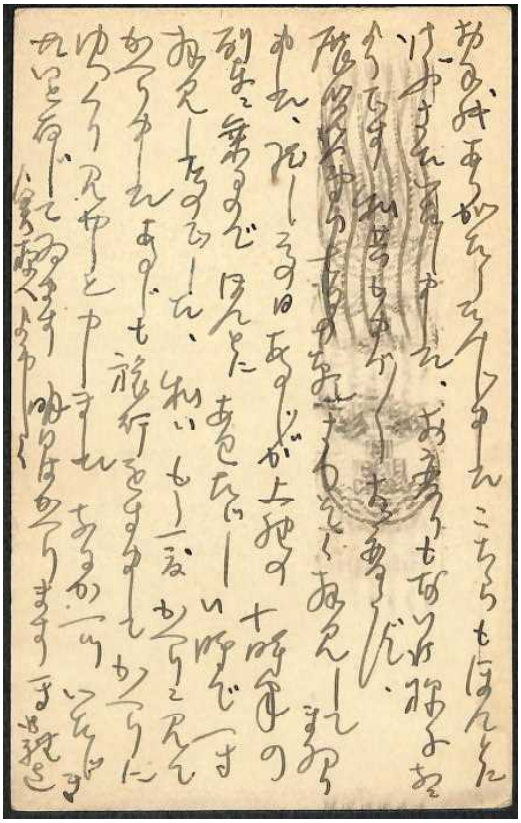
葉書　ペン

お手紙ありがたうそんじましたこちらもほんとに
御ぶさたいたしました、お変りもない御様子なに
よりです私共もまづ〳〵相変らず、
展覧会[1]は七日の朝さっそく拝見してまゐり
ました、然しその日あるじが上野の十時半の
列車に乗るのでほんとにあわたゞしい時で一寸
拝見しましたのでした、私はもう一度かへりに見て
かへりましたあるじも旅行をすましてかへりに
ゆつくり見やうと申ましたなにか一ツいたゞき
たいと存じてゐます明日はかへります一寸御礼迄

奥様へよろしく

［受信者］市外板橋町／中丸／石井鶴三様
［発信者］芝白金三光町／二六三／北沢いの
［日付け］八日夕
［消印］白金／14・11・8／后9―10

［註］
（1）大正十四年十月十七日から十一月二十日まで東京都美術館にて開催の第六回帝展か。



書簡45（馬場59―64）

紅葉見物に京阪をち
こちをあるいて居ります
先日川原湯[1]へ参る朝
一寸木村五郎[2]さんの彫
刻を拝見しましたが
何れを頂戴しやうか
決し兼てついその侭に
なってしまひました
いつれ帰京之上参上
申上ます

楽天
いの子

葉書　鉛筆

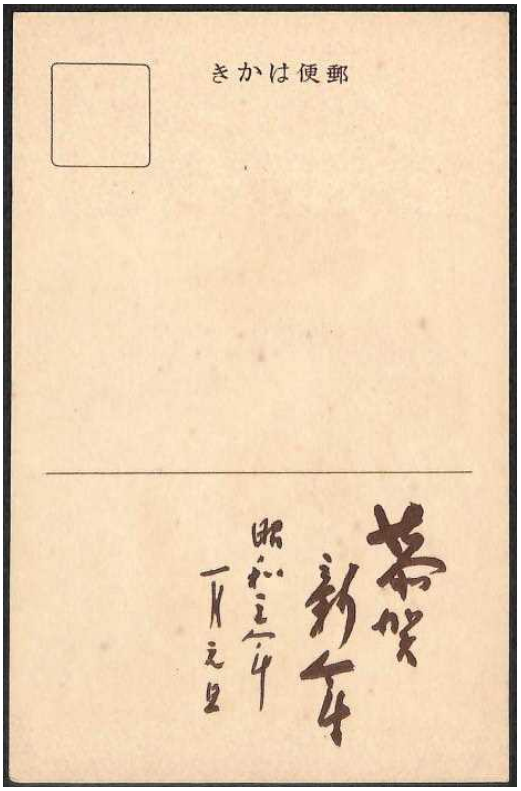
［受信者］東京府下板橋町／字中丸／石井鶴三様／御奥様
［発信者］《記載なし》
［日付け］《記載なし》
［消印］大阪中央／14・11・14／后10―12

〔註〕
（1）現・群馬県吾妻郡長野原町にある温泉。
（2）彫刻家。明治三十二年～昭和十年。はじめ山本端雲に木彫を学び、大正中期より鶴三を慕ってその教えを受けた。この時楽天夫妻が訪れたのは、大正十四年十一月に上野の孚水画房で開いた個展と考えられるが、千田敬一によれば「二十三点の作品を展示即売」したものの、「三点売れただけ」であった（『「これは彫刻になっております」―木村五郎の彫刻とその生涯』ブイツーソリューション、平成十七年六月、九十三頁）。

（大阪府箕面公園楓渓）　左側ヨリ見タル瀧

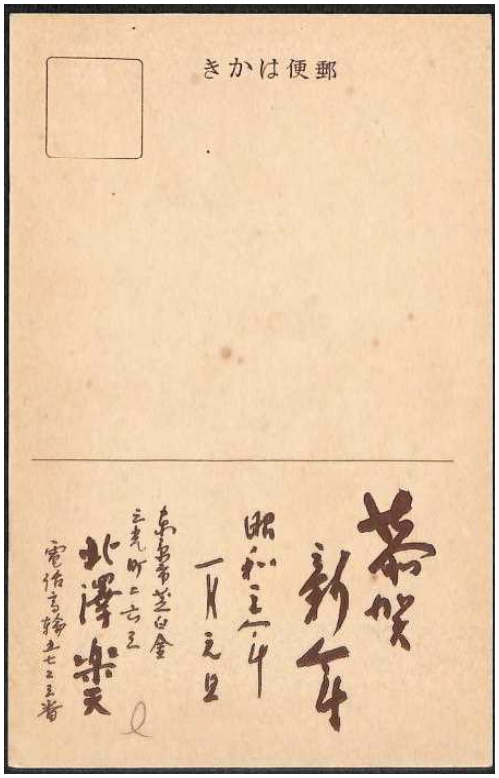
書簡46（馬場59―84A）

《未使用》



書簡47（馬場59―84B）

《未使用》

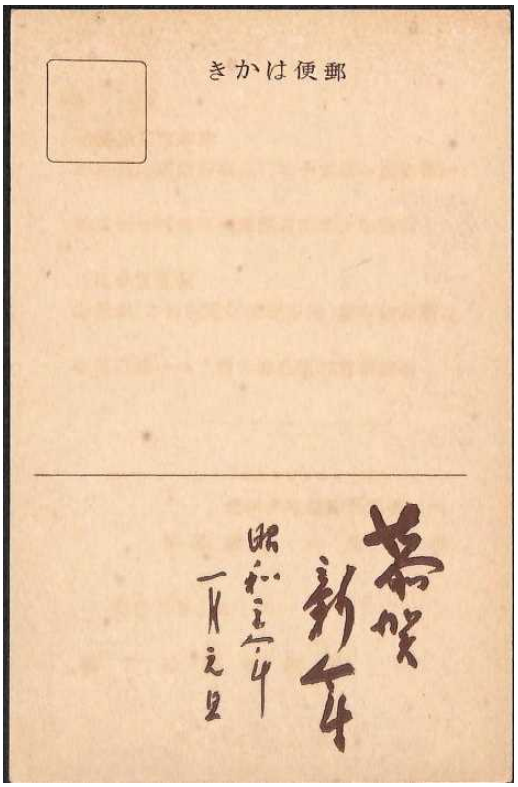


書簡48（馬場59―84C）

《ウラ》
今年より
明治かるたを
かとことに
春にきはしく
よむぞたつとし
わが大阪時事
社にて[1]
明治かるた[2]を
新製し
ければ
楽天

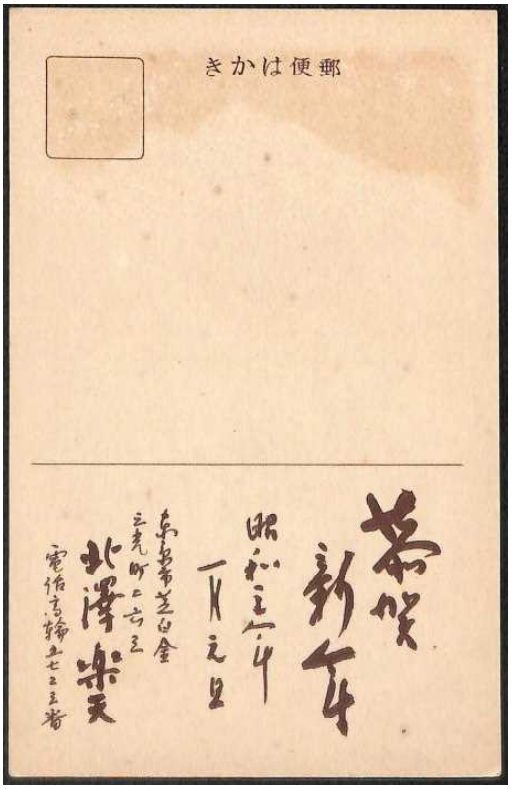
《オモテ》
恭賀新年
昭和三年
一月元旦

〔註〕
（1）明治三十八年三月十五日創刊の『大阪時事新報』の発行元。大正十二年八月に、東京の時事新報本社と分離し、大阪時事新報社となった。昭和五年三月に『神戸新聞』に買収された。楽天は明治三十四年に時事新報社主福沢諭吉の招聘で入社し絵画部に所属してから、昭和七年五月まで同社に勤めた。
（2）明治節が制定された昭和二年十一月三日を記念し、大阪時事新報社から発売された『聖典明治かるた』のこと。明治天皇・皇后の歌から百首を選んで作成された物で、定価は一組一円。大阪、京都、神戸の百貨店で売り出された。


郵便はがき
謹賀
新年

書簡49（馬場59―84D）

《未使用》



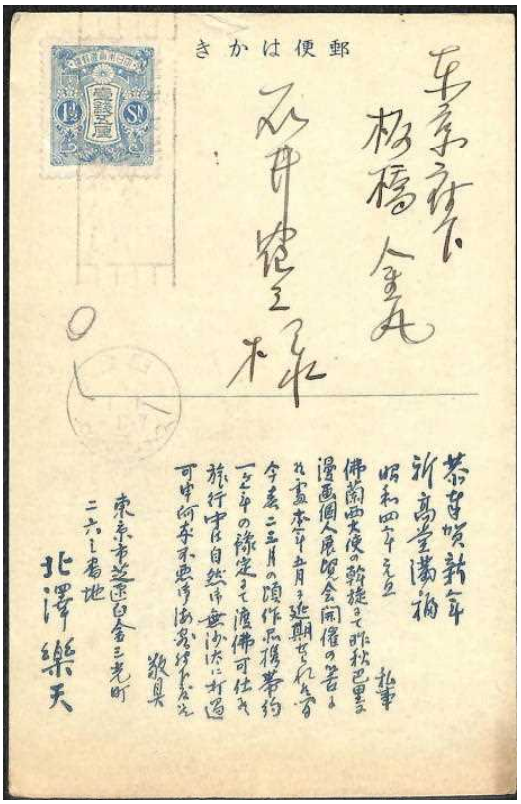
書簡50（書7―840）

葉書　ペン

《オモテ面下部に印刷》
恭奉賀新年
祈高堂満福
　昭和四年元旦　　私事
仏蘭西大使の斡旋にて昨秋巴里に
漫画個人展覧会[1]開催の筈に
候処本年五月に延期せられ候間
今春二三月の頃作品携帯約
一ヶ年の予定にて渡仏可仕候
旅行中は自然御無沙汰に打過
可申何卒不悪御海容被下度候
　　敬具

［受信者］東京府下／板橋金丸[ママ]／石井鶴三様
［発信者］東京市芝区白金三光町／二六三番地／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］白金／4・1・1／□0―7

［註］
（1）漫画個人展覧会開催の際、フランス政府より勲章を贈られた。同展覧会は、パリの他、ロンドンでも開催された。また、パリではサロン・ドートンヌに出品して、入選している（『楽天』北沢楽天顕彰会、昭和五十五年五月）。この展覧会のため、楽天は昭和四年二月二十八日に神戸から出発、ヨーロッパに到着後、パリを中心にドイツ、イギリス、オランダなどを歴訪し、アメリカ経由で昭和五年一月に帰国するまで、「各地の風物、風俗を漫画にして時事新報に送り、その画信が昭和四年六月から、同紙日曜付録「時事漫画」の表紙を飾」った。（長崎抜天編『楽天漫画集大成　昭和編』北沢楽天顕彰会、昭和五十一年五月、二十九頁）



郵便はがき

東京府下
板橋人生丸
石井鶴三様

恭賀新年
祈高堂萬福
昭和四十年元旦
北澤
佛蘭西大使の勲授さて昨秋巴里ニ
漫画個人展覧会開催の若ハ
れ盡本年五月ニ延期せられ事
今春二三月の頃作品携帯約
一ヶ年の滞在さて渡佛可仕ル
旅行中は自然御無沙汰に打過
可申何卒不悪御海容御ゆるし
敬具
東京市芝区白金三光町
二六一番地
北澤樂天

書簡51（高1―180）

洋紙　ペン

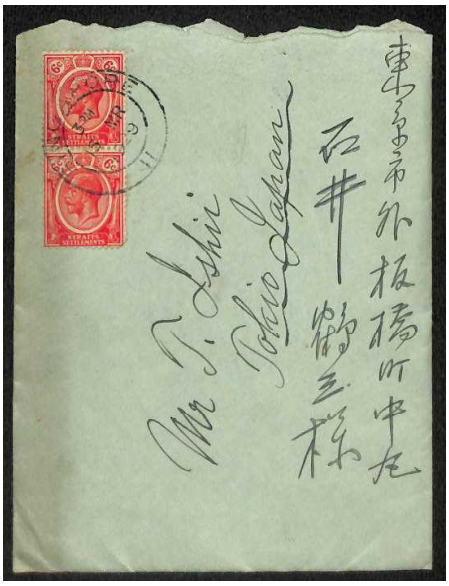
拝啓
先日[1]はわざ〳〵東京駅へお見
送り下さいまして誠にありがたう
ございましたあんな混雑の
中でろく〳〵お話も出来ません
で残念でした、出発前に中
丸のお宅へ上っていろ〳〵お話
を申上たいと存じながら巴里
で展覧をする画ができま
せんでとう〳〵二十日までかゝって
しまひましてそれから僅一週
間ばかりで旅行の仕度をし
ましたのでモウどちらへもお暇
乞ひに出るひまもありませんでした
貴兄にはそんな形式的なことで
なくまた一年間もお目にかゝれ
ないのですから久々で寛談申し
たいと思って居りましたのにそれが
できませんで残念でした、妻を
つれて往くどうかなど問題に
なって居りました、妻と往く
位ひなら鶴三君を誘って一しよに
いッた方がいくらいゝか知れないなどゝ
申しました妻もたくさんお金を
つかって只腰巾着て見物など
するのはモッタイないと申して居り
ました今度は展覧会をモシ
出来ましたら独伊英等で
もやりたいと思って居ります
いづれあちらへ参りましてからも
おたより申しますが何でも御用
がありましたらお申越し下さ
ればできるだけのことをいたし
ませうパリの宿はまだわかり
ませんが着次第御通知申
上ます乍末筆奥様に
よろしく

楽天

鶴大兄

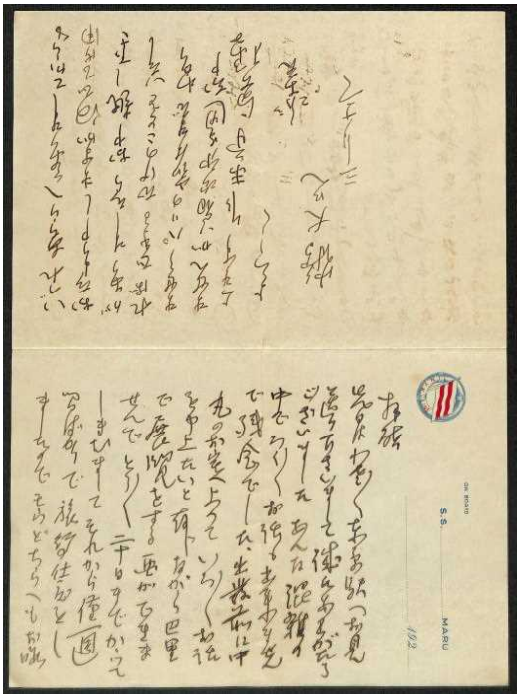
三月十二日

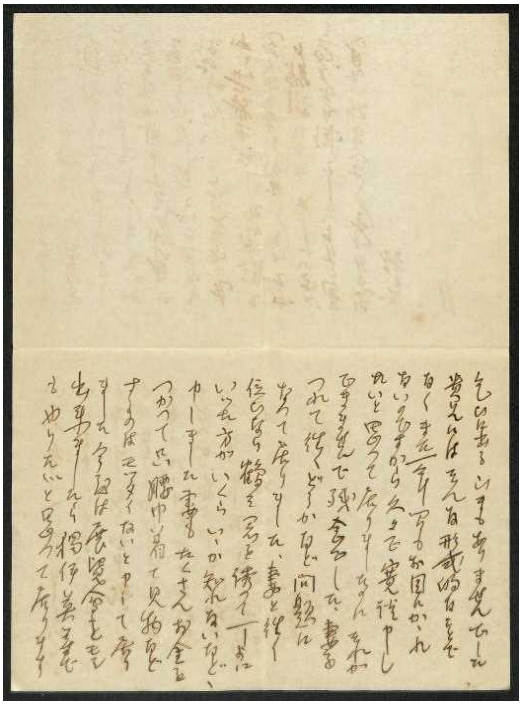
［受信者］東京市外板橋町中丸／石井鶴三様／Mr. T. Ishii／Tokio Japan
［発信者］《記載なし》
［日付け］《記載なし》
［ 消印 ］SINGAPORE 3PM　15　MR □ 29



〔註〕

（1）石井鶴三の日記、昭和四年三月二十六日に、「東京駅に北沢楽天氏渡仏を見送る　楽天氏頗る元気なり」（『石井鶴三全集　第四巻』形象社、昭和六十一年十月、百十九頁）とある。





書簡52（馬場５９―６８）

葉書　ペン

只今オランダを歩いて居ます
ヘーグではゴッホ[1]の画を二百余枚
集めたものを見て感心しました
それにオランダの田舎にはまだこの
絵はがきの通りの風俗が残って居
て珍しく思ひました海が陸地
より高いといふのも実地を見て初めて
合点が往きました
　アムステルダムにて

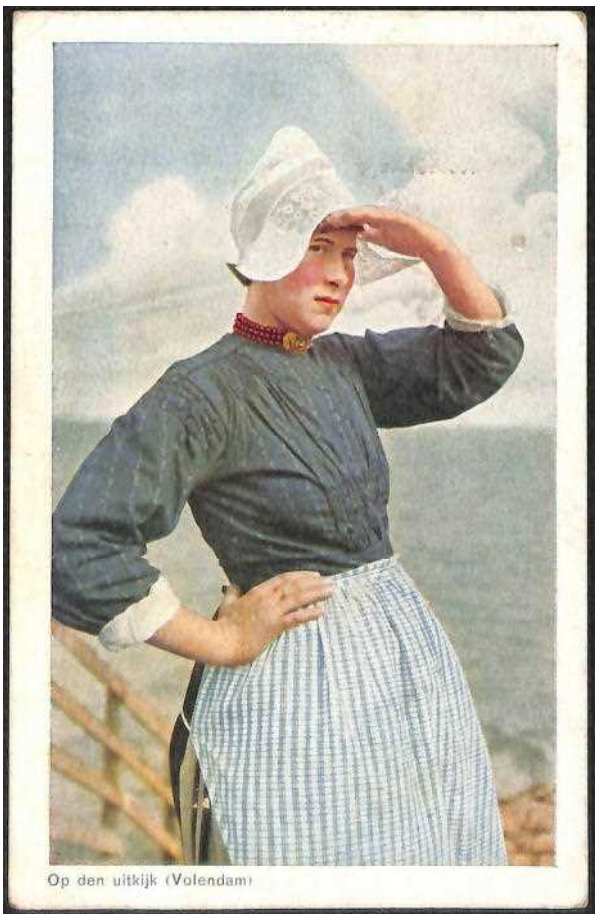
楽天

［受信者］東京市外板橋町／中丸／石井鶴三様／Mr. T. Ishii／Tokyo／JAPON
［発信者］楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］AMSTERDAM CENTRAAL-STATION 21-22／11・VIII,／1929

〔註〕

（1）フィンセント・ファン・ゴッホ（一八五三年～一八九〇年）、オランダの画家。主にフランスで活躍。印象派と日本の浮世絵の影響を受け、強烈な色彩と大胆な筆触によって独自の画風を確立した。表現主義・フォービスムなどの先駆ともされる。作「ひまわり」「糸杉」「からすのいる麦畑」など。ゴッホは、一八六九年～一九七三年に画商グーピルのハーグ支店に勤務、一八八二年～一八八三年にハーグで絵の修行をしている。

AMSTERDAM CENTRAAL-STATION
21-22 VIII
POSTZEGELS RECHTS BOVEN IN DEN HOEK!
VLUGGER VERZENDING
Mr T. Ishii
Tokyo
JAPON
D.B.M.


Op den uitkijk (Volendam)

書簡53（馬場５９―７３）

葉書　ペン

《ウラ》
御両所様おさわり
ないことゝ存じます私
おもひかけずこちらへ
まゐり只今伊太利
をまわってをります、
何の準備もなくまた、
あわたゞしい旅にて
せっ角のこの旅行に
いつも残念のおもひの
みがともなってをります、
然し私などがかうして
あるいてゐる事はまことに
僭越のことだと存じ
ます、今日フロレンス[1]
をたってナポリ[2]に向ひ
ます、ではまた、
四月八日
いの子

《オモテ》
花の都と其名に伝へる
フロレンスに参りましたダンテ[3]が恋
を語ったアルノ川[4]のあたりに古都の
俤を偲びます絵が沢山あって
見きれません半月前の北アフリカ
の旅とは海一ツ隔てゝ大変な違ひ
です人間の文化は全く気候に支配
されるものと思ひます
四月七日
北沢楽天

［受信者］東京府下板橋町中丸／石井鶴三様／同御奥様／ Via Siberia ／ Monsieur T. Ishii ／ Tokio JAPON
［発信者］北沢楽天／北沢いの
［日付け］《四月七日／四月八日》
［ 消印 ］FIRENZE HOTEL BAGLIONI □□ 4. 30

［註］
（1）フィレンツェ。イタリア中部、トスカーナ州の州都で、フィレンツェ県の県都。名称は「花の都」の意味で、フロレンスは英語名。
（2）イタリア南部、カンパニア州の州都で、工業、港湾都市、観光都市。
（3）ダンテ・アリギエーリ（一二六五年～一三二一年）イタリアの詩人。フィレンツェの人。ルネサンス文学の先駆者。九歳で初めて出会い、十八歳でアルノ川のサンタ・トリニタ橋で偶然再会し、間もなく早逝したベアトリーチェへの精神的愛を終生の詩作の源泉とした。
（4）トスカーナ州の川。アペニン山脈中のファルテローナ山に源を有し、フィレンツェ、ピサを経て、リグリア海に注ぐ。

POSTE ITALIANE
FIRENZE
HOTEL BARLION
Via
Monsieur T. Ishii
Tokio JAPON
Proprietà artistica riservata
Milano
4433-15

FIRENZE
Galleria Pitti - Raffaello: Madonna della Seggiola.
Galerie Pitti - Raphaël: Notre Dame de la Chaise.
Pitti Gallery - Raffaello: The « Chair » Madonna.

書簡54（馬場５９―７４）

葉書　ペン

Tokio JAPON

［発信者］《記載なし》
［日付け］《記載なし》
［ 消印 ］INTERLAKEN　20 IV 30. 10

《オモテ》

伊太利の旅を終りましてスヰスに入り
さすがによい景色にかんしんいたしました。
今日はユングフラウ[1]といふ一万三千尺
の山に登りましたが頂上下二千尺
まで電車にて一歩も労せず登り
ましてそこにて平地と少しもかわらぬ
食事をとりましてこれにもかんしんい
たしました、スキーが盛んに行れて
ゐます、然し不自由な日本アルプス
登山の方が遥るに趣があると存じ
ました、奥様によろしく。

伊の子

《ウラ》

このヴヰナスの誕生[2]は紀元前の作
で場中第
一の名
品
です

楽天

［受信者］東京府下板橋町中丸／石井鶴三様／Via Siberia／

［註］

（1）スイス中部、アルプス山脈の高峰の一。アイガー南西にあり、標高四一五八メートル。一八一一年スイスのマイヤー父子が初登頂した。登山鉄道が山頂北麓のユングフラウヨッホまで通じている。

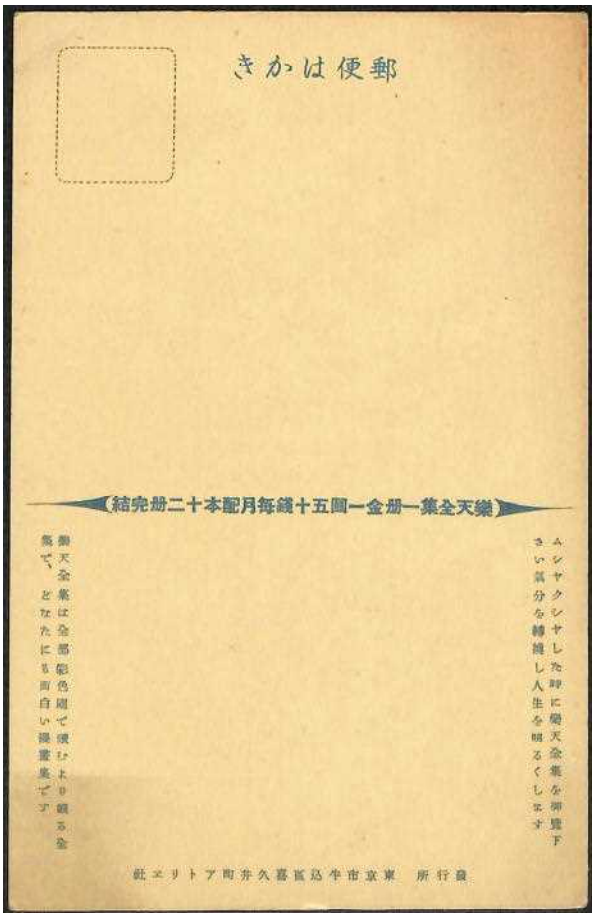
（2）ヴィーナスの誕生。ローマ国立博物館のアルテンプス宮にある、「ルドヴィシの玉座」に刻まれた紀元前五世紀に制作されたギリシャの彫刻のこと。

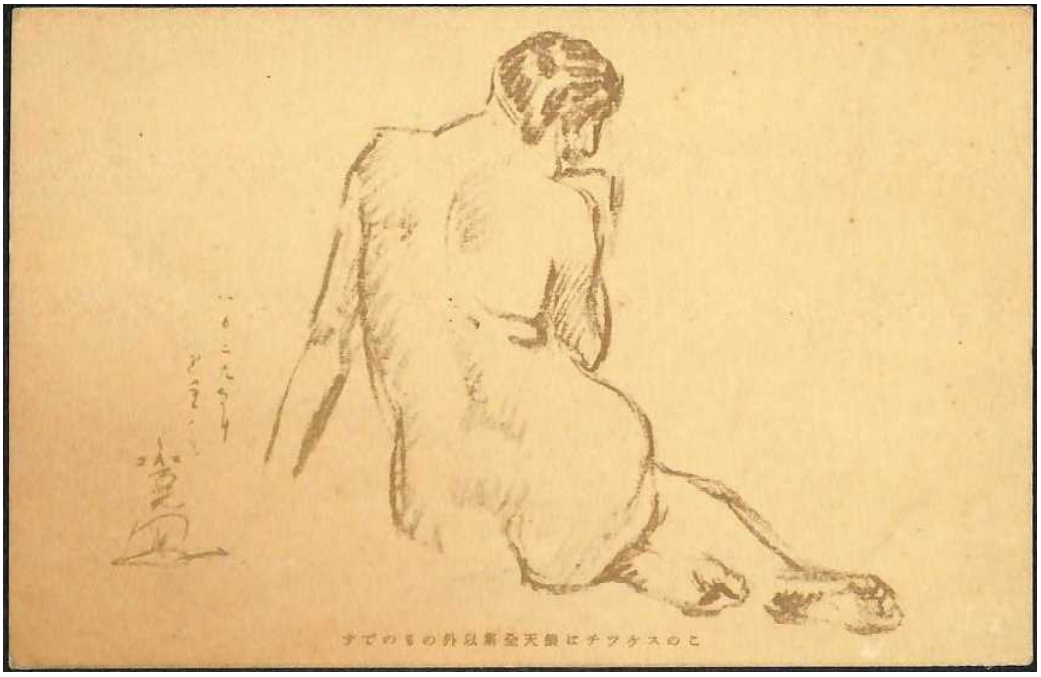
Via Siberia
Tokio
JAPON
HELVETIA
HOTEL BELVEDERE
INTERLAKEN
PAUL CHAUZFOURIER
Via Tasso, 7 - ROMA

書簡55（書7—1265）

《未使用》

葉書　未使用





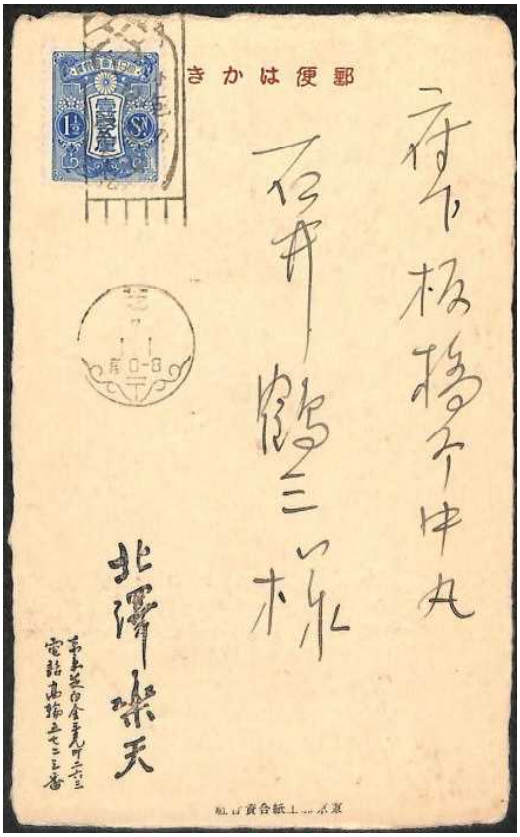
書簡56（馬場５９―６７）

あけ
まして
おめで
たう

楽天堂筆《朱円印「楽天」》

［受信者］府下板橋町中丸／石井鶴三様
［発信者］《印刷》北沢楽天／東京芝白金三光町二六三／電話
高輪五七二三番
［日付け］《記載なし》
［消印］芝／7・1・1／前0―8

葉書　ペン



書簡57（馬場５９―７２）

葉書　毛筆

御年賀ありがたく拝しました
御ぶさたはお互様のことゝて
おめもじの機を得たく存ます

［受信者］板橋区板橋町三丁目／石井鶴三様
［発信者］《紫方印》東京芝白金三光町二六三／北沢楽天／電話高輪二七一三《毛筆で「伊乃子」と上書き》
［日付け］《記載なし》
［消印］白金／９・１・８／后４―８

書簡58（書7―249）

拝啓　寒喧常なき
此頃愈々御勇健奉賀候
平素は思ひながら御疎
音に打過き申訳無之候
然る処再昨日はわざ〳〵
御光来御著作貳冊
御贈与に預り誠に有難く
厚く御礼申上候折悪く
私も妻も他行にて失礼
いたし候折角の御光来
御目に懸れず残念に存候
好評天下に轟く挿
画集[1]繰り返へし拝見
欣懐に堪へず候素描も
一種独得の風韻敬
服仕候何れ其内参堂
寛談の機を得度楽み
居候不取敢右御礼まで
如斯に御座候乍末筆
奥様によろしく御伝声
願上候伊乃子よりも宜敷
申出で候　敬具
三月二十六日

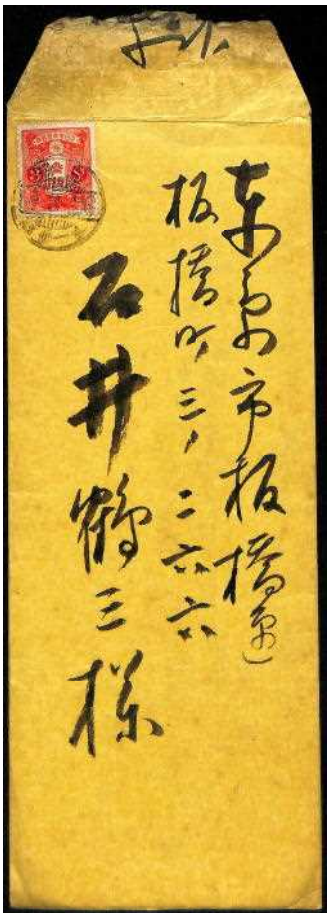
楽天

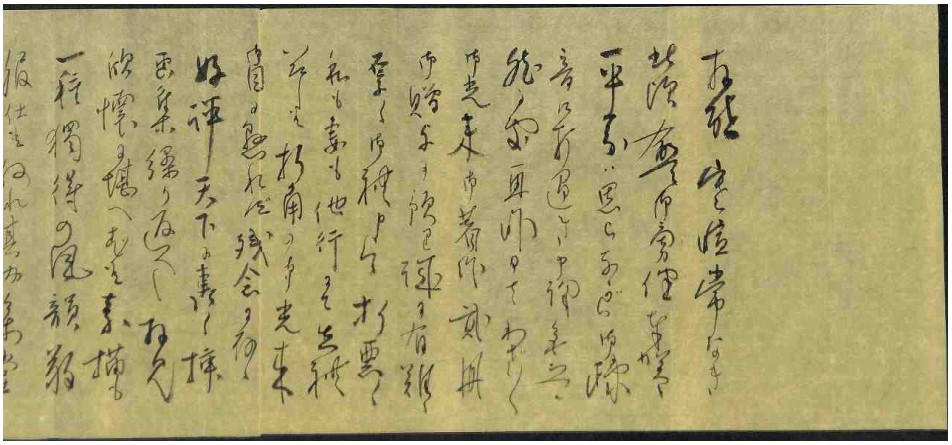
巻紙　毛筆

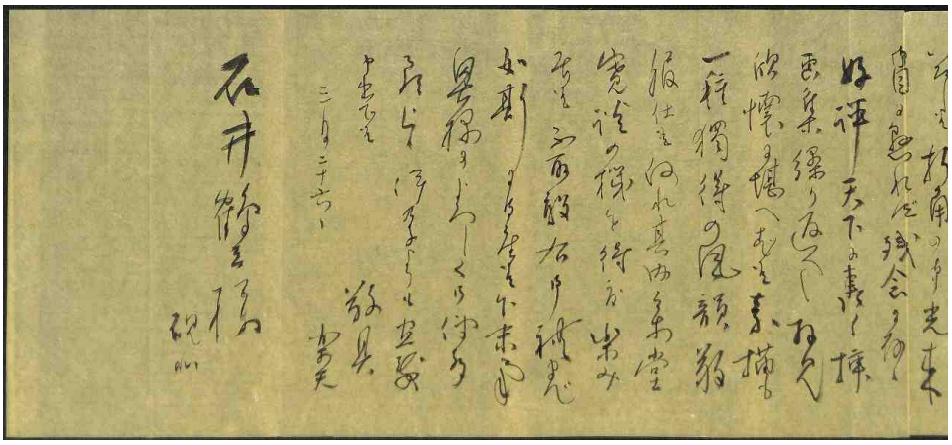
石井鶴三様
硯北

［受信者］東京市板橋区／板橋町三ノ二六六／石井鶴三様
［発信者］芝白金三光町二六三／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］三田／10・3・26／后0―4

〔註〕
（1）石井鶴三『石井鶴三挿絵集　第一巻』（光大社、昭和九年七月）。







書簡59（馬場５９―７５）

《オモテ》

御親切の御注意が大層
力となりまして只今頂上の
小屋に足をのばした処です
六日夜十時に乗込昨日は
浅間温泉に一日ゆっくりして
日の暮々四谷につきました(1)
今朝は七時十五分前宿を
出発、八時二股着、十一時半
白馬尻小屋に着（この前五六丁大雨にあふ）
十二時半出発大雪渓を三時
に踏破し、お花畑にかゝる時
より雷雨しきりに至り其中
をあへぎ〳〵四時半に県立小屋に
たどりつきこゝで一時間雨を待っ
て六時頂上小屋に着しました(2)

《ウラ》

□□□（明日カ）
□朝□（早カ）（出カ）
立して
大池を
見物し
頂上に引
かへして
白馬
鑓に
至り
温泉に
一泊の余
定でをり
ます(3)思った
よりも楽で
愉快壮快
きわまりな□
右行程御□□
をかねて御礼まで

楽天拝

葉書　ペン

［受信者］東京市外／板橋町中丸／石井鶴三様
［発信者］楽天／いの子
［日付け］八日
［消印］《記載なし》
《裏面記念印》信州鑓ヶ岳／白馬温泉／10・8・10／
登山記念

〔註〕

（1）浅間温泉は、現・長野県松本市浅間温泉にある温泉。また、四谷は現・長野県北安曇郡白馬村の地名で、昭和七年、国鉄大糸南線の四ツ谷駅（現・ＪＲ大糸線白馬駅）が開業した。

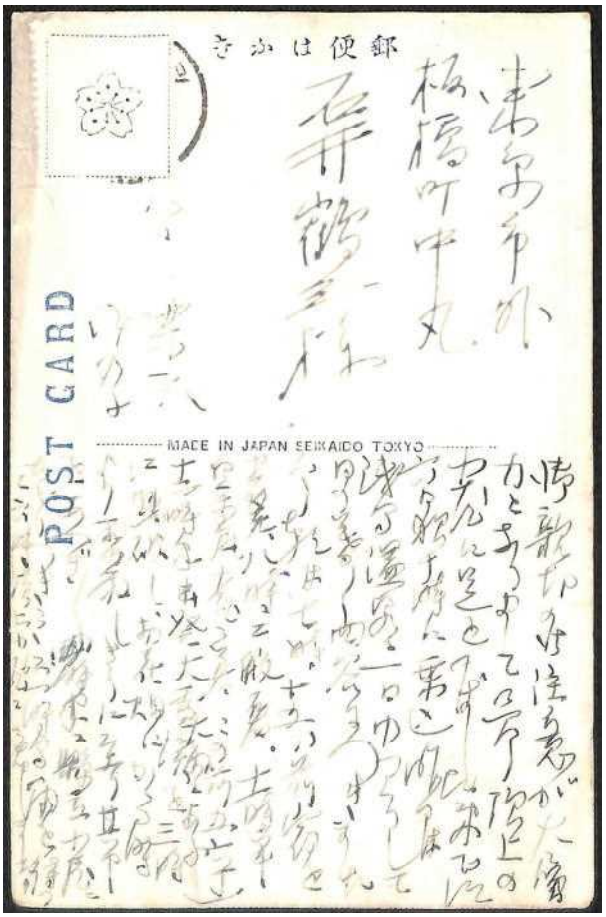
（2）二股は現・白馬村の地名で、北股入と南股入の二つの沢が合流し、松川となっている。北股入を遡上すると、白馬尻小屋を経て大雪渓にかかり、お花畑、小雪渓を経て頂上小屋に至る。

白馬尻から頂上までは約一里半四時間余を要するが途中大雪渓と小雪渓との間に葱平と云ふ処がこれば俗にお花畑と称して夏の登山期には千紫万紅高山植物特有の色彩を放つて見事である（中略）鞍部には県営小屋を始め山小屋があつて（中略）これから頂上までは約一丁半である。（武田鎌次郎『日本アルプス登山要項』信濃山岳会事務所、昭和五年六月、七頁）

（3）白馬大池は白馬岳から北東六キロほどのところにある池で、高山植物の名所である。また「白馬鑓」とあるのは鑓ヶ岳で、白馬岳南方に位置し、山腹に温泉を湧出する。

【白馬大池】白馬頂上より屋根伝ひに北約六粁、海抜千八百米、東西二百米、東北四百米、清冽推奨の如き水に湛へ性質寒帯湖に近い。西方池に向ふ斜面、高山植物一面に咲き誇りて、五彩陸離たる所、大池キャンプ指定地である。（藤原鎌兄『健勝地高日本』高日本社、昭和十三年八月、八十三頁）

白馬岳から西南の屋根は、杓子岳から鑓ヶ岳に連つて居る。（中略）鑓ヶ岳の絶頂に着けば、玢岩の累々たる中に小祠があるのみで、狭いから多人数の休む程の場処も無い位で、東側の眼の下には、白馬温泉が遥かに谷間から湯気を立てて居る（後略）（矢沢米三郎『白馬岳』岩波書店、昭和五年六月、三十九～四十三頁）


郵便はがき
POST CARD
MADE IN JAPAN SEIKAIDO TOKYO

白馬山大正池
(日本アルプス)

書簡60（高1―168）

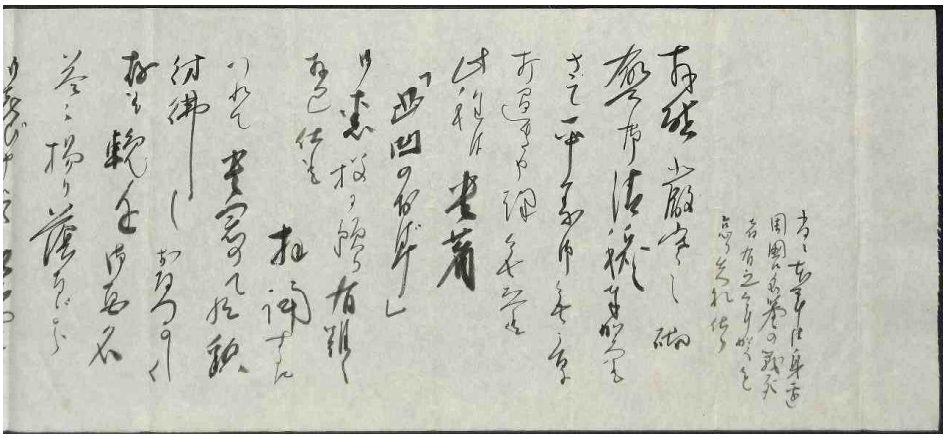
巻紙　毛筆

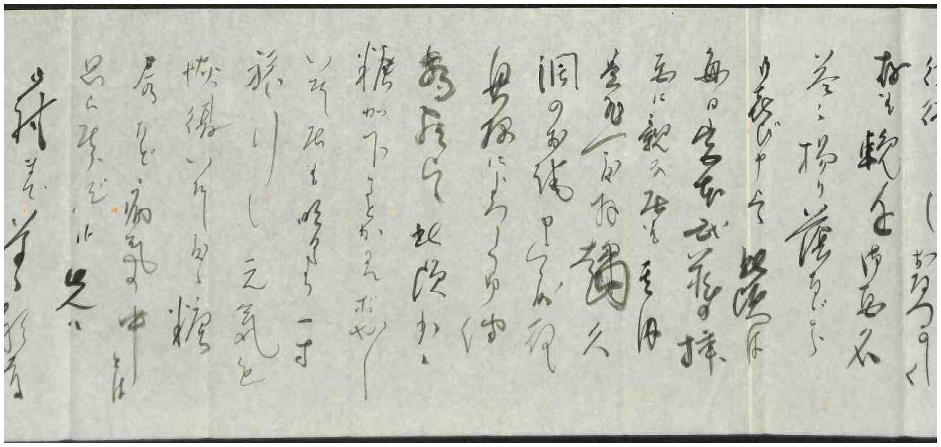
拝啓厳寒之砌
愈御清穆奉賀候
さて平素御無音に
打過き申訳無之候
此程は貴著
「凸凹のおばけ」[1]
御恵投に預り有難く
拝見仕候拝誦するに
つれて貴君の風貌
彷彿しおなつかしく
存候輓近御画名
益々揚り蔭ながら
御喜び申上候此頃は
毎日宮本武蔵[2]の挿
画に親み居候其内
是非一度拝趨久
濶のお詫申上度存候
奥様によろしく御伝
声願上候此頃少々
糖が下るとかにてボヤ〳〵
いたし居候明日より一寸
旅行し元気を
恢復いたし度候糖
尿など病気の中とは
思ひ居らず候先は
御礼まで　草々頓首
二月五日　楽天拝
石井鶴三様

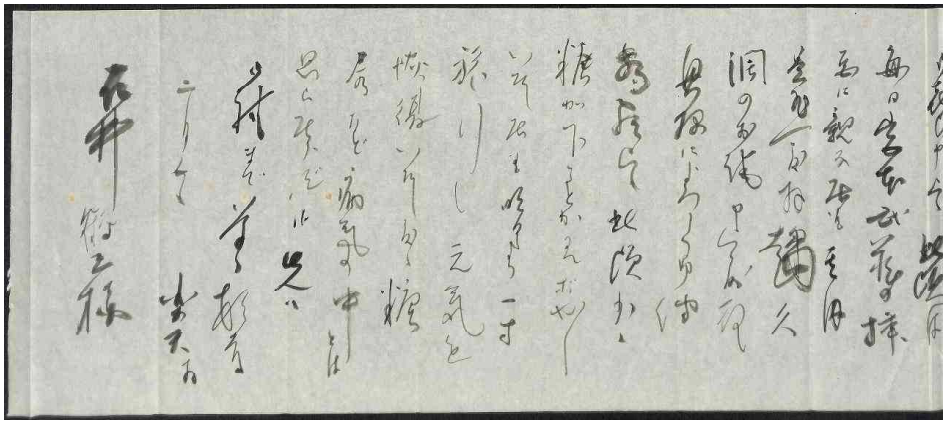
尚々本年は身辺
周囲に名誉の戦死
者有之年賀を
怠り失礼仕候

［受信者］市内板橋区板橋／三丁目二六二／石井鶴三様
［発信者］芝白金三光町二七一三／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］渋谷／13・2・6／前8―12

〔註〕
（1）石井鶴三『凸凹のおばけ』（光大社、昭和十三年一月）。
（2）吉川英治作「宮本武蔵　空の巻」（『東京／大阪朝日新聞』昭和十三年一月五日夕～十二月三十日）。





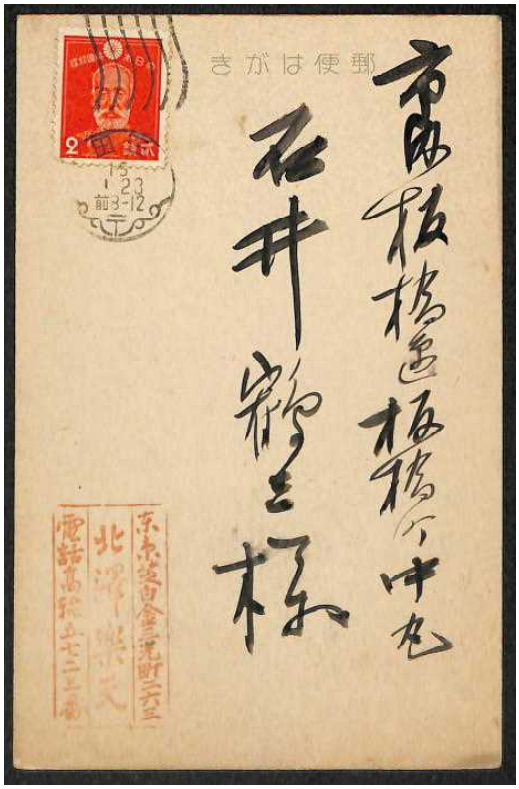


書簡61（高5―142）

謹而
寒中御見舞申上候
昭和十五年一月大寒の日
平素御疎音
不悪御諒恕
猶依旧御厚
誼希上候
北沢楽天拝

葉書　毛筆

［受信者］市内板橋区板橋町中丸／石井鶴三様
［発信者］《朱方印》東京芝白金三光町二六三／北沢楽天／電話高輪五七二三番
［日付け］《記載なし》
［消印］三田／15・1・23／前8―12



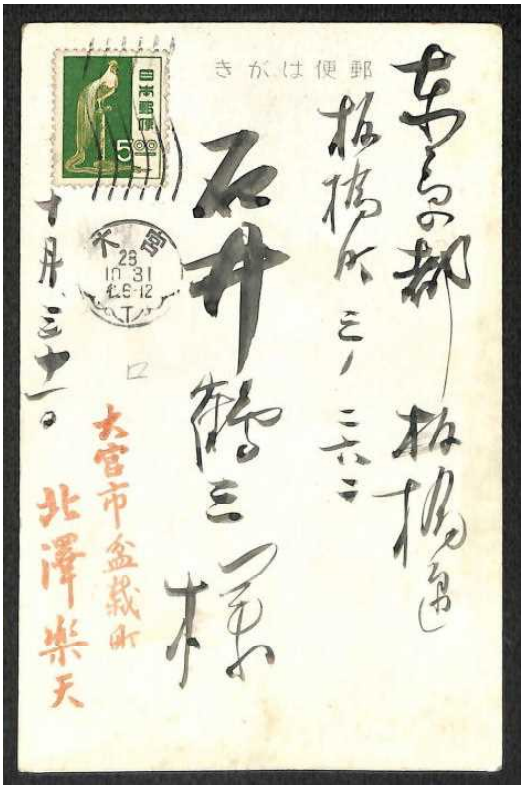
書簡62（書4―270）

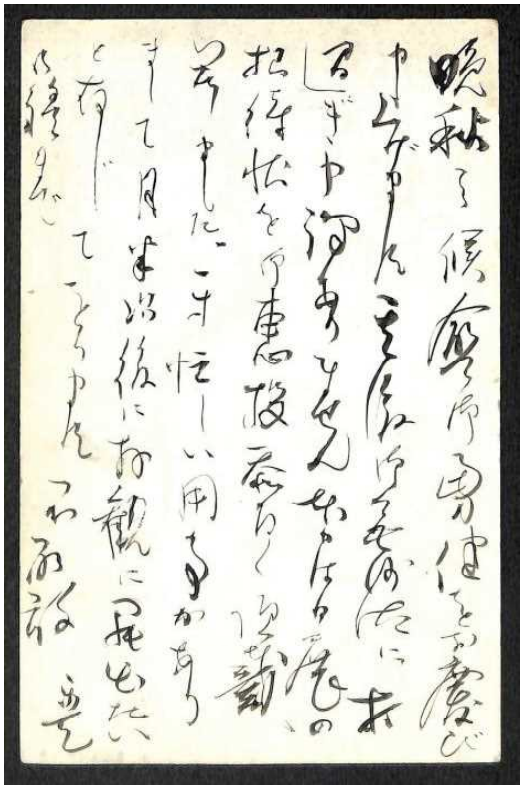
葉書　毛筆

晩秋之候愈々御勇健をお慶び
申上げます其後御無沙汰に打
過ぎ申訳ありません本日は日展[1]の
招待状を御恵投忝なく頂戴
いたしました、一寸忙しい用事があり
まして月半以後に拝観に罷出たい
と存じてをります不取敢
御礼まで　　楽天

［受信者］東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］《朱印》大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］十月三十一日
［消印］大宮／23・10・31／后6―12

〔註〕
（1）昭和二十三年十月二十日から十一月二十日まで東京都美術館にて開催の第四回日展。鶴三は十一月十九日に観覧にでかけている（『石井鶴三日記　第三巻』形文社、平成十七年三月、百六十七頁）。





書簡63（高1―169）

巻紙　毛筆

拝啓　御健勝で益々
芸術御精進を心から
お欣ひ申上げます私共も
幸ひ無事碌々消
光罷り居ります
展覧会のある都度
御招待状を頂き御好
情感謝に堪へません
春陽会[1]には二十四日に《右に「老妻同伴」挿入》拝
見に罷り出ましたどうも
だん〳〵新い絵ばかりになつて
私には合点の行かぬものが
多くなって行きます金賞
になった絵も感心出来
ないのは自分が淋しく思へ
ます御出品作[2]いづれも貴兄の
人格が滲み出て居ておなつ
かしく思ひました私は今
全く閑居所謂晴耕雨読
の境遇ですがどうも無用の
用が多くでさて力作も出来ずに
居りますお目に懸かれる機会
がありましたら欣幸の至り
です
御健康を祈ります

楽天

石井鶴三様

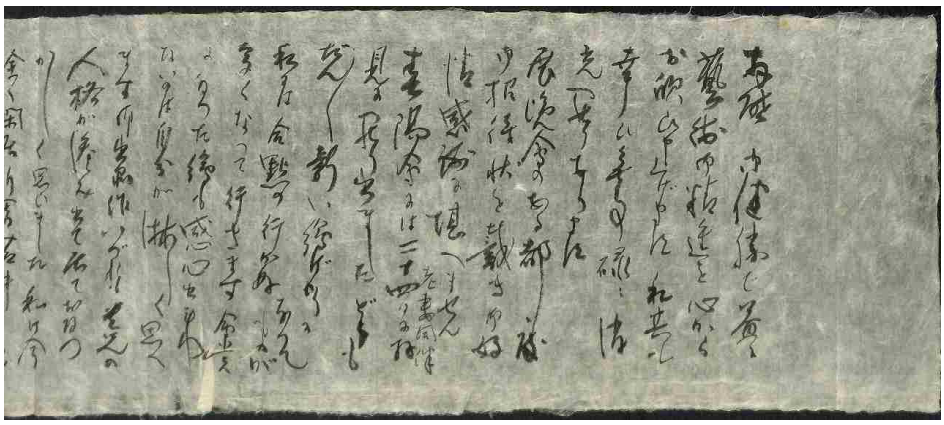
四月二十六日

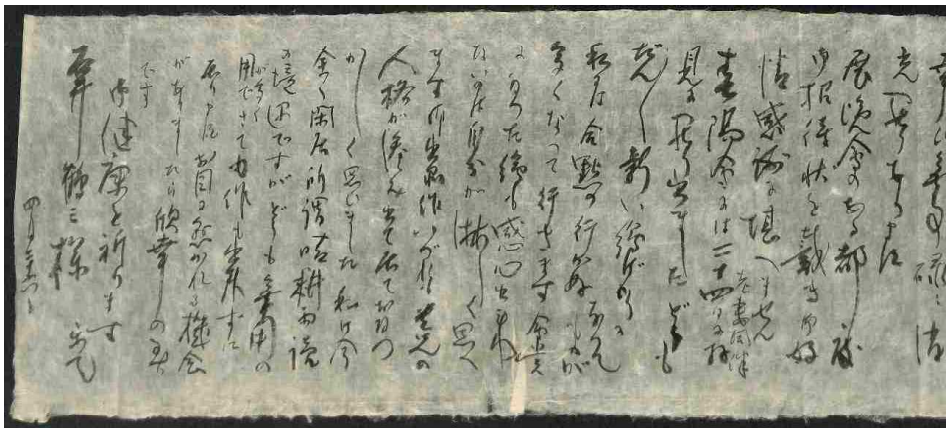
［受信者］東京都板橋区板橋町／三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］埼玉県大宮市／盆栽町／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］大宮／25・4・28／后□―□

〔註〕

（1）昭和二十七年四月十日から二十六日まで東京都美術館にて開催の第二十七回春陽会展。春陽会で用意されている賞は「金賞」ではなく「春陽会賞」である。同回の受賞者は、大嶺政敏、久保田恒男、駒井哲郎。なお同回では「研究賞」（受賞者は西尾節子、田中岑）、会友賞（受賞者は野村千春、村山密）も設けられていた（春陽会編『春陽会画選（二八回）』美術工芸会、昭和二十六年五月、二十四頁）。

（2）「裸女」「相撲」「少女・着衣女一二」「双雉飛翔・山中新緑」の四点。





書簡64（書4―271）

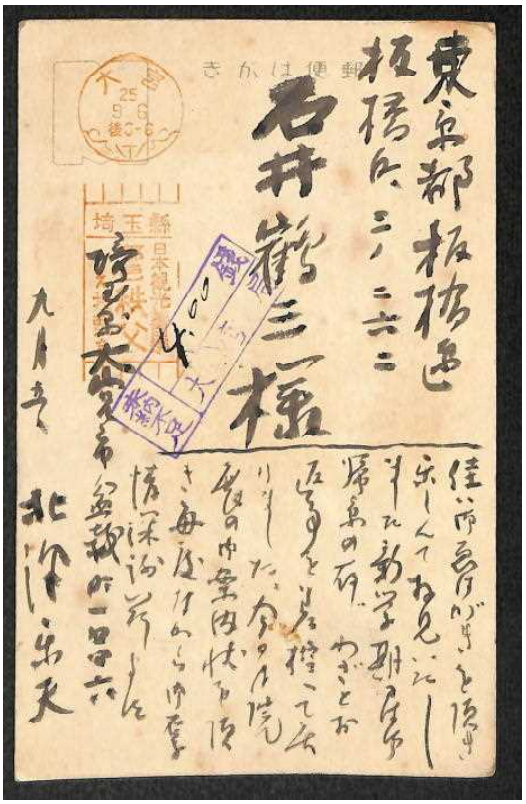
《ウラ》
いつも〳〵御健
勝にて
斯道え御精進
欣羨の至りに存じます
馬籠[1]からのお便りまことに
おなつかしく高山[2]から船津[3]を
経て富山[4]へ参る途中三井鉱
山[5]の下を通って大石が貴兄と私の
通行して居る中間に落下したのに
驚きましたのを覚えて居
ます御嶽[6]で往き暮れて
難儀したのも思ひ
出の程です

《オモテ》
佳い御ゑはがきを頂き
楽しんで拝見いたし
ました新学期には御
帰京の存じわざとお
返事を差控へて居
りました。今日は院
展[7]の御案内状を頂
き毎度なから御厚
情深謝いたします

葉書　毛筆

［受信者］東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］埼玉県大宮市盆栽町一四四六／北沢楽天
［日付け］九月五日
［消印］大宮／25・9・6／後0―6

〔註〕
（1）岐阜県中津川市の地名。北にある妻籠とともに中山道の宿場町として繁栄。島崎藤村の「夜明け前」の舞台。
（2）岐阜県北部、飛騨地方の中心都市。
（3）岐阜県飛騨市神岡町地区の中心街。旧吉城郡船津町。高山から、富山へ至る国道四一号線が通じている。
（4）富山県中央部、神通川流域を占め、北は富山湾に面する都市。
（5）神岡鉱山。平成十三年に閉山した、岐阜県飛騨市神岡町地区にあった非鉄金属鉱山。鉱山の開発は天正年間から進められ、明治七年に三井組に買い取られてから、大規模な開発が推進された。
（6）御嶽山。長野・岐阜県境にある複式成層火山。飛騨山脈の南端に位置する。中央火口丘の剣ケ峰に御嶽神社があり、御嶽講信者の登山者が多い。標高三〇六七メートル。木曾御嶽。
（7）昭和二十五年九月一日から十九日まで、東京都美術館にて開催の日本美術院再興第三十五回展覧会のこと。鶴三の出品作は、「肖像　石黒忠篤翁寿像」。



書簡65（馬場59―80）

《ウラ》
開田村[1]……地蔵峠[2]
など名を聞いても
なつかしく
思ひ出されます
又御一緒に
旅行など
できたら
どんなに
楽しみ
でせう

楽天

青空に
寐そべる床や
草もみぢ

《オモテ》
あの爪の長い老婆
に飯を炊いてもらって
きみの悪るかった
ことも思ひ出され
ますお便り

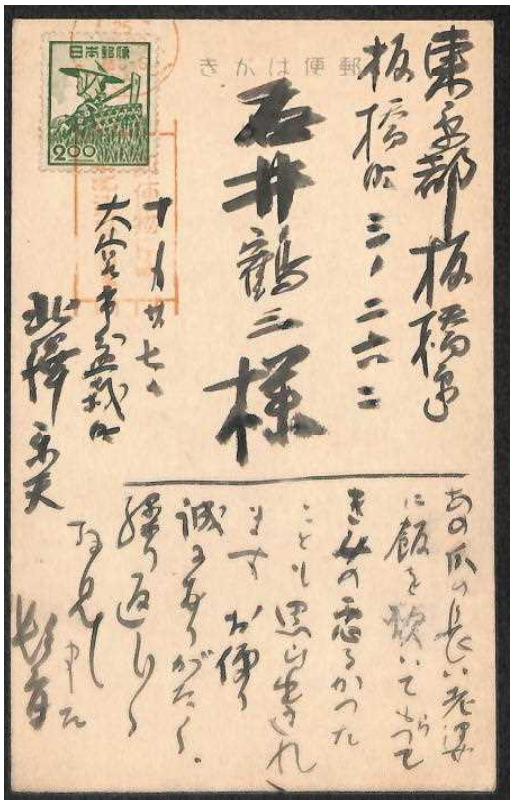
葉書　毛筆

誠にありがたく、
繰り返し〳〵
拝見しました

頓首

［受信者］東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］十月二十七日
［消印］□□／25・10・28／後3―6

〔註〕
（1）長野県南西部、木曽郡にあった旧村名。現在は木曽町の北西部を占める。鶴三の笹村草家人宛昭和二十五年十月二十四日付書簡によると、鶴三も、同月二十二日に開田村を訪れた際、四十年前、すなわち明治四十三年に、楽天を団長として坂本繁二郎とともに同村を訪れたことを思い返している。
（2）長野県西部、木曽郡木曽町福島地区と開田地区の境にある峠。


東京都板橋区
板橋区三ノ二六二
石井鶴三様
きかは便郵
日本郵便
200
十一月廿七日
大宮市高鼻
北澤文夫

岡田村……地蔵峠
又逢う時の
旅行を
思ひ出されます
青空に
どんなら

書簡66（書4―267）

葉書　毛筆

《ウラ》
初霜会[1]の御案内ありがたう御座ゐました
昨七日に三越に参り
不計
拝見しました
良いメンバーの
お揃ひで楽しく
拝見いたしました

楽天

《オモテ》
頂戴の御絵
モウ程なく
表装ができて
参りますそうしたら
箱かきを
願ひに参りたいと
思つて居ります

［受信者］東京都板橋区板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］●月八日
［消印］大宮／25・11・8／后□―6

〔註〕
（1）昭和二十五年五月十七日付石井鶴三日記に、「朝関長造　初霜会出品として金太郎木彫、素描二点托し其外美校研究室にある新春を持って行ってもらう」とある（『石井鶴三日記　第三巻』形文社、平成十七年三月、二百四十二頁）。会期は不明。株式会社三越本社総務室広報担当・資料編纂担当編『三越美術部100年史』（三越、平成二十一年三月、八十一頁）によると、初霜会は昭和二十六年（第一回）から昭和三十三年（第八回）まで開催されているとあるが、鶴三日記では、この書簡がしたためられた昭和二十五年の他、昭和二十三年十月十七日付にも「朝松原君来　初霜会出品ついに手つかず　未成木彫「林檎」を託しあやまる」（「松原君」は松原松造）と、初霜会に関する記述がある。

書簡67（書4―269）

葉書　毛筆

恭賀新年
　昭和二十六年一月元旦
昨年はいろ〳〵
よいお便りを
下さいまして
御芳情深謝いたします
　楽天

［受信者］東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］《印刷》大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］大宮／25・□・□／□□―2

書簡68（馬場５９―６５）

葉書　毛筆

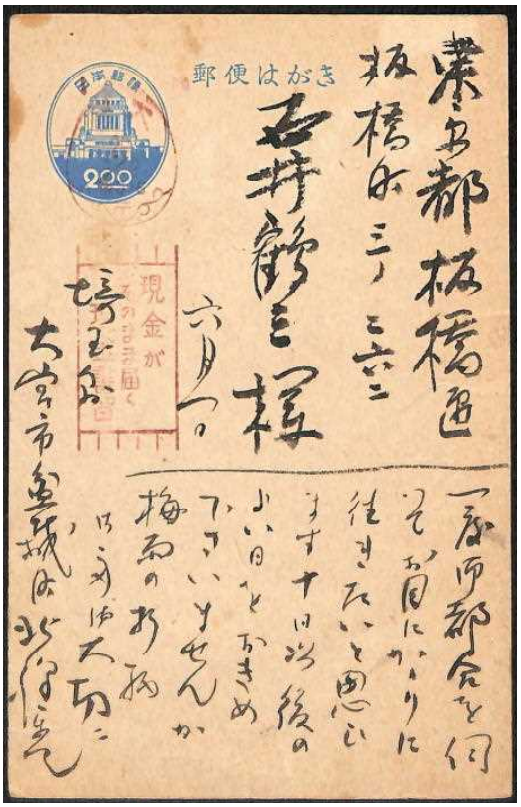
［受信者］東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］埼玉県／大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］六月一日
［消印］大宮／2□・6・2／□3―6

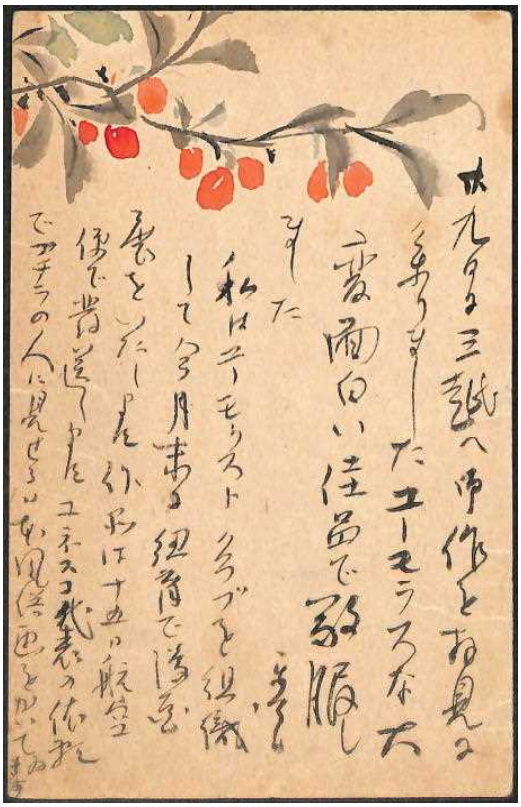
《ウラ》
二十九日に三越へ御作を拝見に
参りましたユーモラスな大
変面白い佳品で敬服し
ました

楽天

私はユーモリストクラブを組織
して今月末に紐育で漫画
展をいたします作品は十五日航空
便で発送しますユネスコ代表の依頼
でアチラの人に見せる日本風俗画をかいてゐます

《オモテ》
一度御都合を伺
つてお目にかゝりに
往きたいと思ひ
ます十日以後の
よい日をおきめ
下さいませんか
梅雨の折柄
御身御大切に


郵便はがき
200
現金が
東京都板橋区
板橋四三一
石井鶴三様
六月一日
一度市都会を何
そ前にかりに
往きたいと思い
ますが十日以後の
よい日をおきめ
ください
梅雨のお
大宮市
北沢楽天



書簡69（馬場５９―６９）

葉書　毛筆

［日付け］十五日
［消印］大宮／26・6・16／後3―6

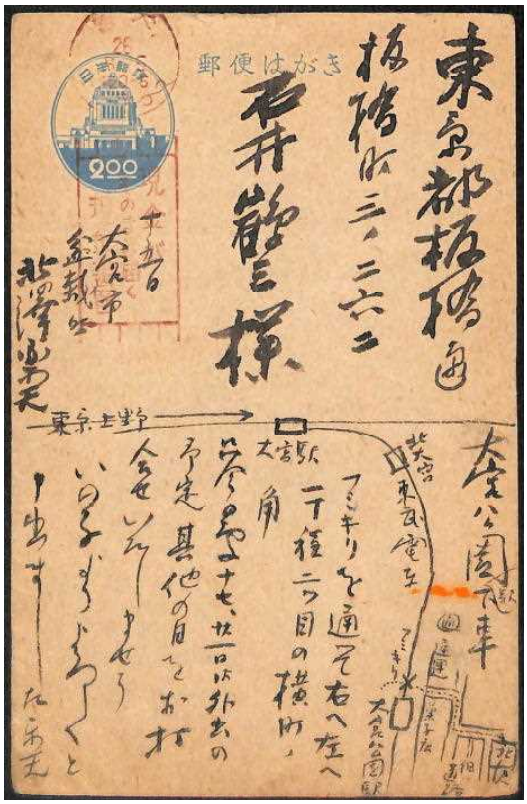
《ウラ》
御旅行先から絵はがき御送り下され
ありがたく拝見いたしました御目に
かゝり寛談の機会が近つきまして
老妻も大喜びです私共も御伺ひ
しますがどうぞ一度お出かけ
下さいまし大宮駅下車、駅構内
から発車する東武電車[1]にて大宮公園

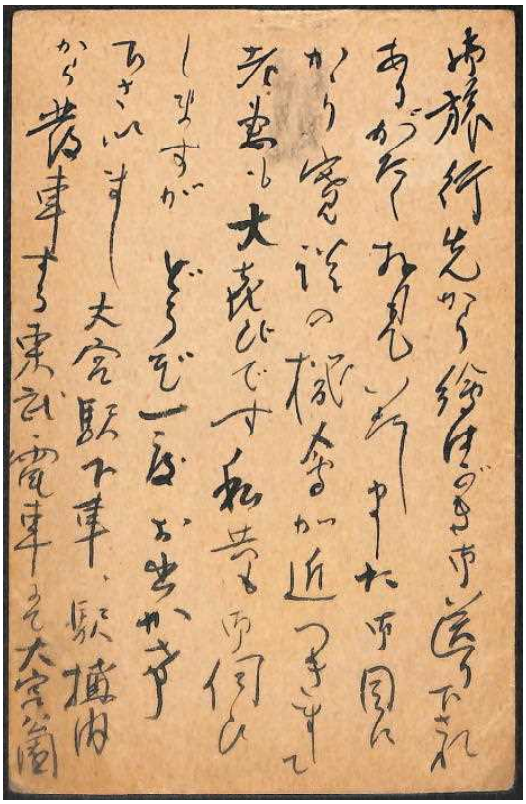
《オモテ》
大宮公園駅下車
フミキリを通って右へ左へ
一丁程二ツ目の横町ノ
角
只今の処十七、二十一日は外出の
予定其他の日をお打
合せいたしませう
いの子よりよろしくと
申出ました

楽天

［受信者］東京都板橋区／板橋三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市／盆栽町／北沢楽天

［註］
（1）東武野田線。現・埼玉県さいたま市大宮区の大宮駅から千葉県柏市の柏駅を経て船橋市の船橋駅を結ぶ東武鉄道の鉄道路線である。昭和二十三年四月に野田線と船橋線を統合して大宮～船橋間を野田線とした。


郵便はがき
東京都板橋区
板橋ハ三ノ二六二
石井鶴三様
東京上野
大宮公園駅
大宮公園
東武電車
大宮駅
角



書簡70（高1―179）

便箋　毛筆

拝啓　此程は遠路御訪ね下さいまして
御厚情忝なく御礼申上げます折角
の御出てにおもてなしが行き届かず心残り
のことのみで御座ゐます、そして兼々御労作を
一枚いたゞきたい念願が叶ひ御傑作を
頂戴し畢生の楽みを得ましたことを感
謝いたします二十五日に水彩画展[1]を拝見
しましたありがたう御座ゐました三宅氏の大
野熟時代[2]の作品には旧時の思出に耽りました
石膏をコンテーで丹念に模写したのは私共後
輩も同様でしたなつかしい思出です
今日始めて御恵与のそば落雁を賞玩
しました上品でよいお菓子です先日来切れ
ものになって居た薄茶でこの高尚な味を味わ
いながら御礼状かきました

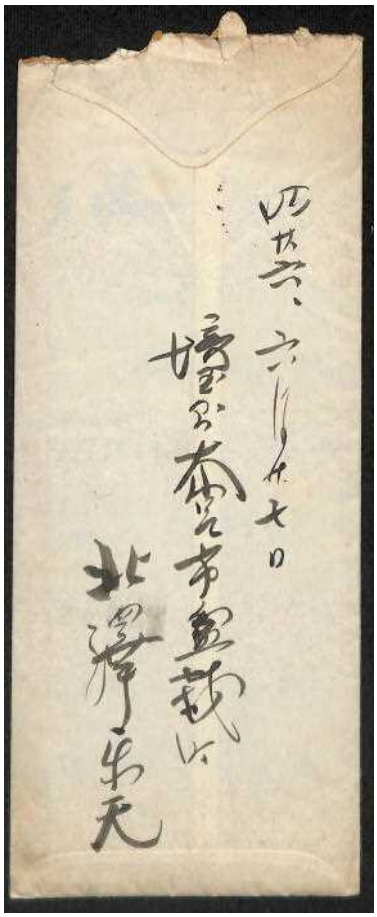
楽天
いの

石井鶴三様
二十六年六月二十七日

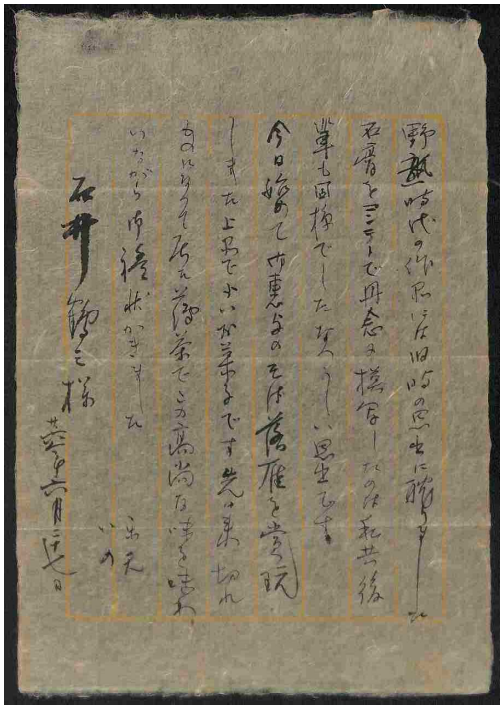
［受信者］東京都板橋区板橋三ノ二六二／石井鶴三様／研北
［発信者］埼玉県大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］昭二十六、六月二十七日

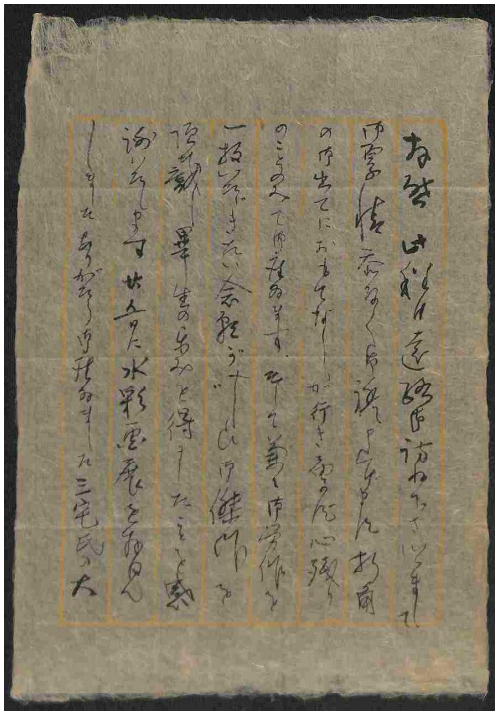
［消印］大宮／26・6・27／前□―6

〔註〕
（1）昭和二十六年六月十五日から二十六日まで東京都美術館にて開催の第三十九回日本水彩画会展。鶴三は「相撲」「裸女」を出品した。また、これに先立つ五月十六日、三宅克己が第七回日本芸術院恩賜賞を受賞したため、三宅克己恩賜賞記念特陳として三十八点が展示された。
（2）「三宅氏」は水彩画家、三宅克己のこと。明治七年～昭和二十九年。明治二十三年に大野幸彦の画塾に入門するも、翌々年、師の死去により原田直次郎の鍾美館に移った。楽天も明治二十四年ころにこの塾に入門している。
大野先生の教授法は、最初西洋の絵手本の模写であった。下等臨本、上等臨本を卒業して、石膏の写生となり、それから人物写生という順序だ。しかしそれはみなコンテエ画であって、油絵は三、四年間の修行の後でなければ、手を触れることが出来ないのである。（中略）私達は毎日朝八時にはきっと出席しなければならない。そうして午後五時まで、ほとんど昼食後の一時間のほか休息なく、コンテエ画の手本の模写をやらねばならなかった。陰影の濃淡の調子など怪しいと、その小言は実に烈しく、なにもそんなに厳格にしなくてもよさそうなものと、先生の立ち去る後ろ姿を眺めて我知らず涙ぐまれた事もあった。
（三宅克己「思い出づるまま」、『日本人の自伝19』平凡社、昭和五十七年四月、八十四～八十五頁）



東京都板橋区板橋三丁目三三
石井鶴三様





書簡71（馬場５９―７６）

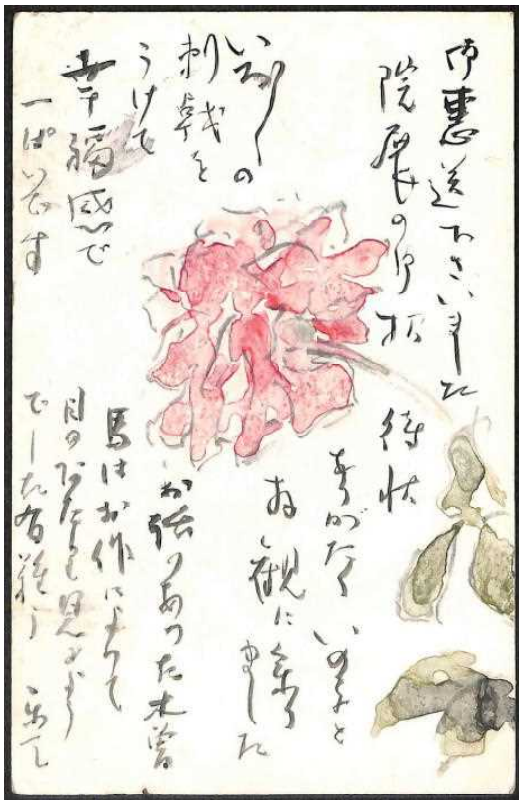
《ウラ》
御恵送下さいました
院展[1]の御招待状
ありがたくいの子と
拝観に参り
ました
いろ〳〵の
刺戟を
うけて
幸福感で
一ぱいです
お話のあった木曽
馬はお作によつて
目のあたりも見るよう
でした有難う
楽天

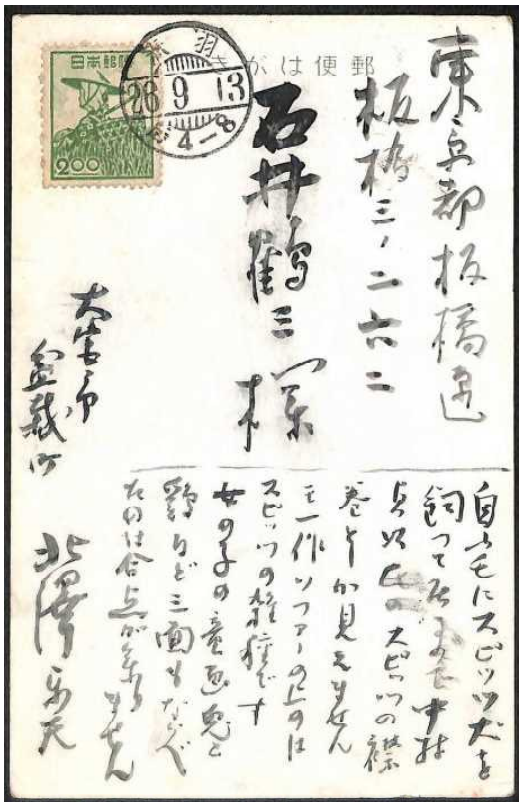
《オモテ》
自宅にスピッツ犬を
飼つて居るので中村
貞以氏[2]のスピッツの襟
巻としか見えません
モ一作ソファーの上のは
スピッツの雑種です
女の子の童画鬼と
鶏など三面もならべ
たのは合点が参りません

葉書　毛筆

［受信者］東京都板橋区／板橋三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市／盆栽町／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］赤羽／26・9・13／后4―8

［註］
（1）昭和二十六年九月一日から九月十九日まで東京都美術館にて開催の第三十六回院展。鶴三は「木曽馬（一）（二）」「青年裸身」を出品した。「木曽馬」は六月、木曽開田村の山下一平宅に滞在中に制作した。
（2）日本画家。明治三十三年～昭和五十七年。貞以が第三十六回院展に出品した「立秋」は、団扇を膝に正座した女の傍らで寝そべる犬を描いており、身体を長くのばして横たわるその姿が「襟巻」に見えたのであろう。「モ一作」「三面もならべた」は、別の作品および陳列方法を指すとみられるが、未詳。





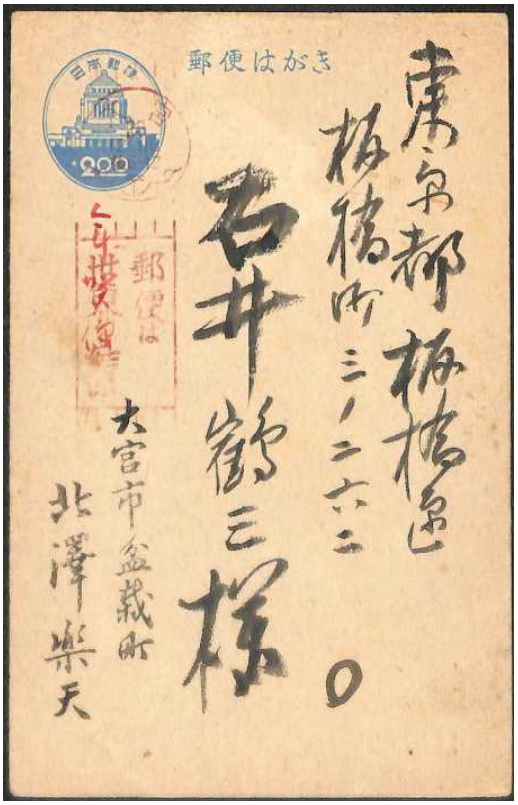
書簡72（馬場５９―８１）

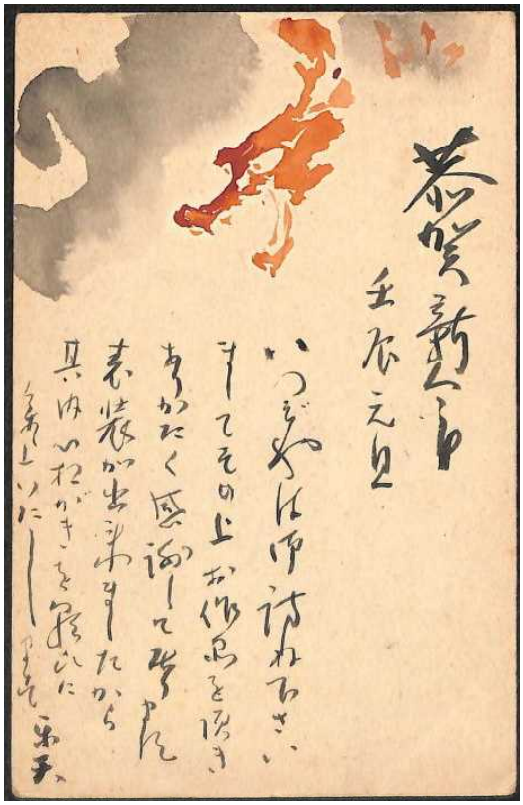
葉書　毛筆

恭賀新年
壬辰元旦
いつぞやは御訪ね下さい
ましてその上お作品を頂き
ありがたく感謝して居ります
表装が出来ましたから
其内箱がきを願ひに
参上いたします

楽天

［受信者］東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］大宮／26・12・30／後6―12





書簡73（馬場53―307）

《ウラ》
御無沙汰しました
お暑さのおさわりありませんか
私は白山登山を企て
まして七月末に北陸地方に
参り雨に阻まれ六日に登山
し山で二泊して反対側の
岩間温泉[1]へ下りました
山上で御嶽山を遠望し
あなたが今頃登って居る
だろうなどゝ思ひました

楽天

［受信者］東京都板橋区／板橋三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］山中温泉／たわらやにて／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］石川・鶴来／27・8・12／前8―12

葉書　ペン

〔註〕
（1）現・石川県白山市尾添に湧出する温泉。白山の北方に位置する。

書簡74（書4―272）

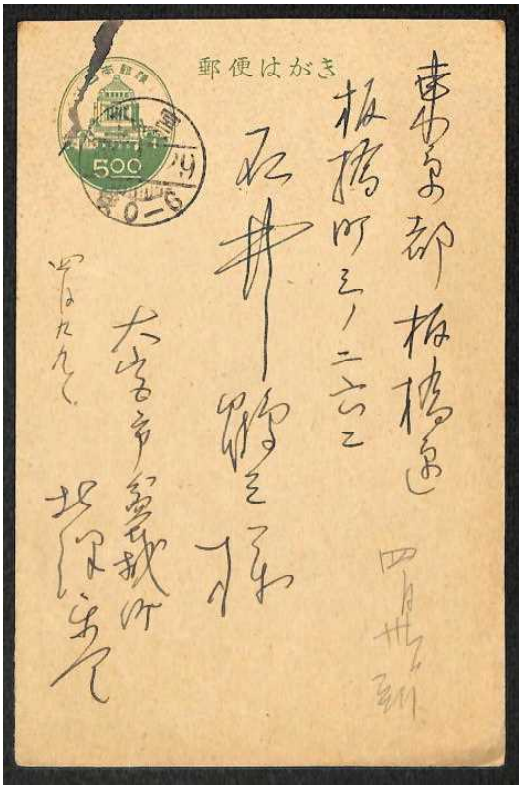
葉書　毛筆

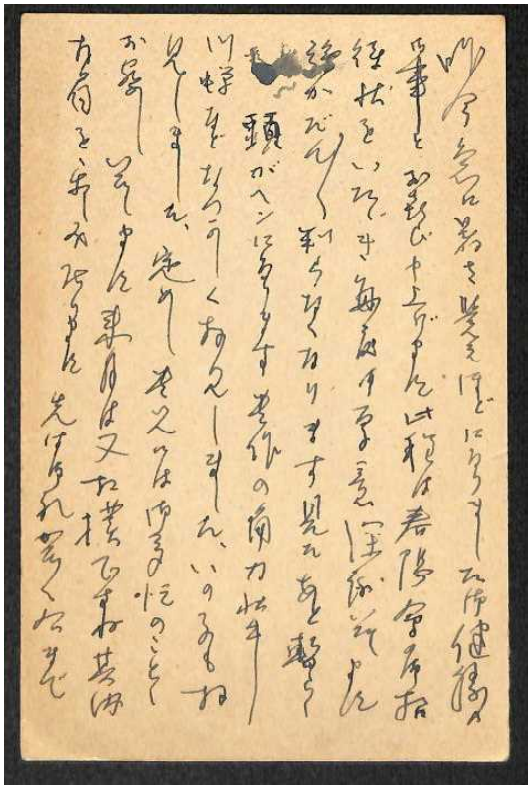
昨今急に暑さ覚えほどになりました御健勝の
御事とお喜び申上げます此程は春陽会[1]の御招
待状をいたゞき毎度御厚意深謝いたします
絵がだん〳〵判らなくなります見たあと暫らく
●頭がヘンになります貴作の角力壮牛
川蝉などなつかしく拝見しました、いの子も拝
見しました、定めし貴兄には御多忙のことゝ
お察しいたします来月は又相撲ですね其内
拝眉を楽しみ居ります先は御礼かた〳〵右まで

《宛書下に鉛筆で「四月三十日到」とあり》

［受信者］東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］四月二十九日
［消印］大宮／28・4・29／后0―6

〔註〕
（1）昭和二十八年四月十七日から五月四日まで東京都美術館にて開催の第三十回春陽会展。三十周年記念展として開催され、鶴三は「雄鹿」「相撲」「翡翠」を出品した。





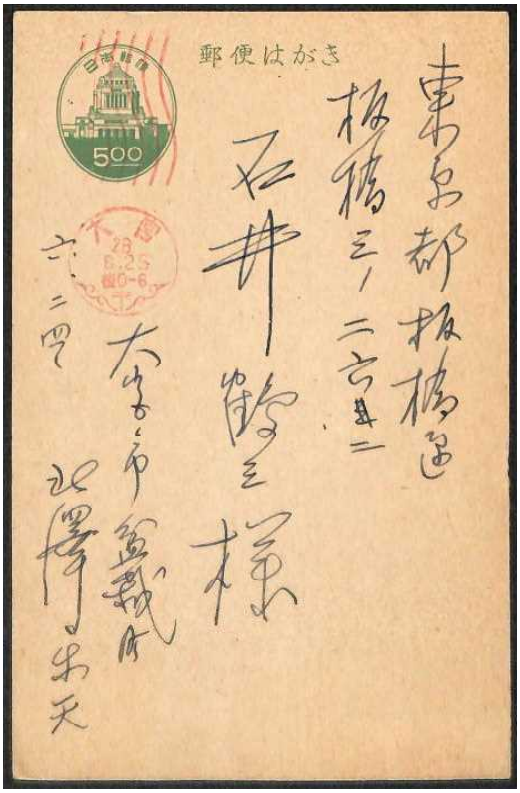
書簡75（馬場５９―６６）

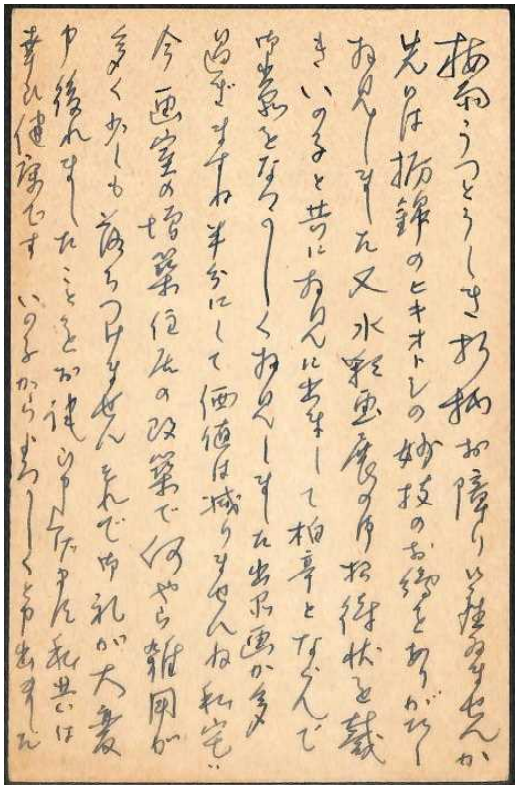
葉書　ペン

梅雨うっとうしき折柄お障り御座ゐませんか
先日は栃錦[1]のヒキオトシの妙技のお絵をありがたく
拝見しました又水彩画展[2]の御招待状を戴
きいの子と共に拝見に出まして柏亭とならんで
御出品をなつかしく拝見しました出品画か多
過ぎますね半分にして価値は減りませんね私宅は
今画室の増築住居の改築で何やら雑用が
多く少しも落ちつけませんそれで御礼が大変
申後れましたことをお詫ひ申上げます私共は
幸ひ健康ですいの子からよろしくと申出ました

［受信者］東京都板橋区／板橋三ノ二六丰〔二〕／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］六、二四日
［消印］大宮／28・6・25／後0―6

〔註〕
（1）第四十四代横綱、栃錦清隆。本書翰が書かれた直前、昭和二十八年夏場所での番付は東大関。
（2）昭和二十八年六月十日から二十一日まで東京都美術館にて開催の第四十一回日本水彩画会展。鶴三は「少女」を出品した。出品総数は五百八十六点（四百五名）であった。





書簡76（書6―79）

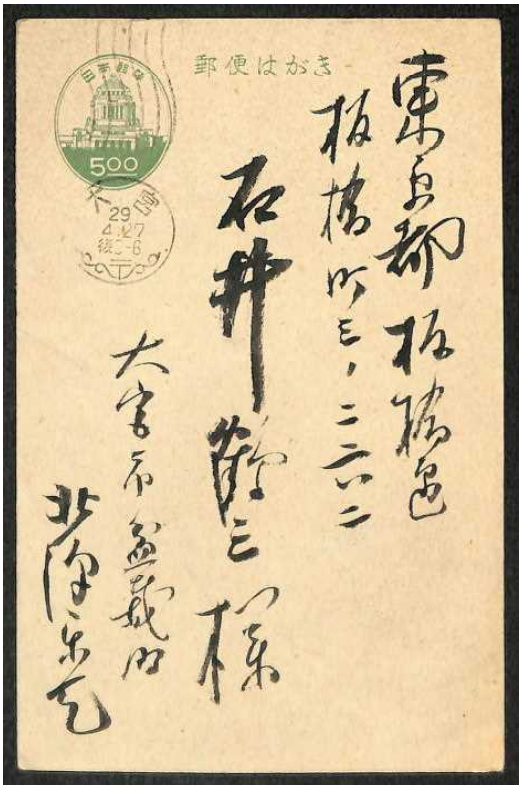
葉書　毛筆

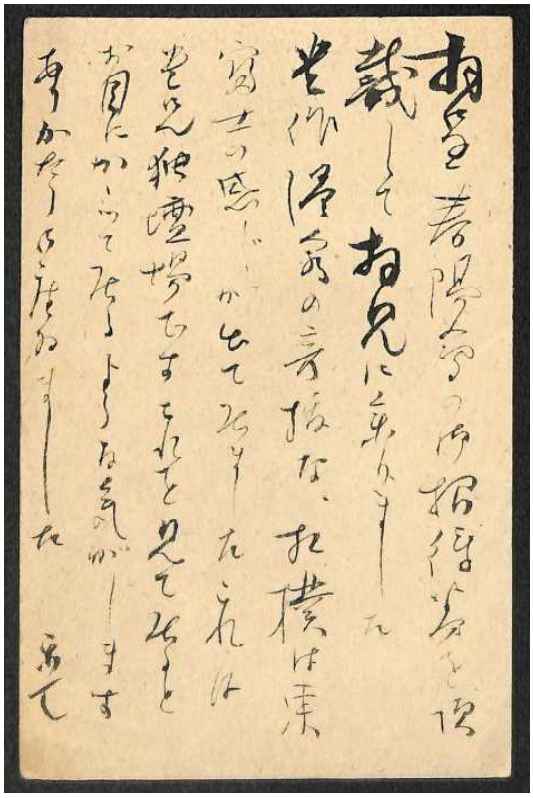
拝呈　春陽会[1]の御招待券を頂
戴して拝見に参りました
貴作温泉の奇抜な、相撲は東
富士の感じが出て居ましたこれは
貴兄独壇場ですこれを見て居ると
お目にかゝって居るような気がします
ありがたう御座ゐました

楽天

［受信者］東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］大宮／29・4・27／後□―6

〔註〕
（1）昭和二十九年四月十七日から五月二日まで東京都美術館にて開催の第三十一回春陽会展。鶴三は「母子入浴」「相撲」を出品した。





書簡77（書6―81）

葉書　毛筆

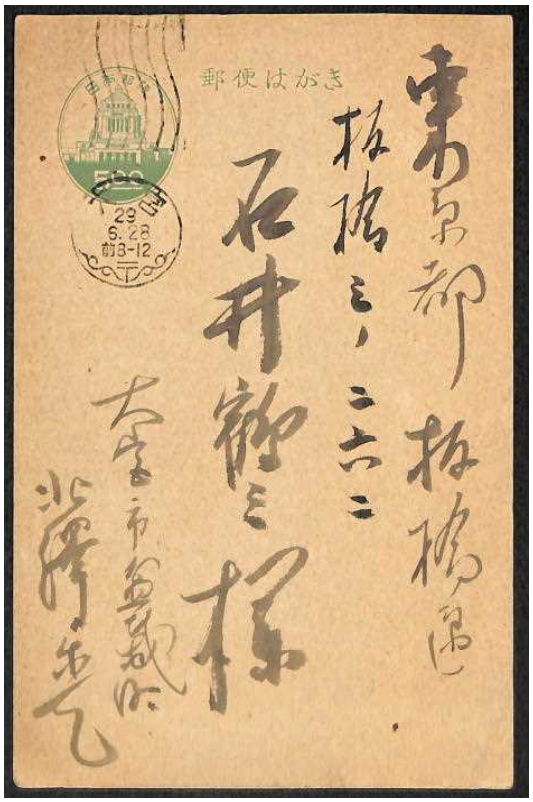
拝呈　梅雨うっとうしく底冷え
の悪天候におさわりありませんか
箱根伊豆風景展[1]を最終日に
拝観に参りました貴作はお宅
で拝見したのでないが展覧されて居
ました水面が多く現はれて八丁池[2]
としては前二作よりよいと思ひます
落ちついた佳作楽しく拝見しました

［受信者］東京都板橋区／板橋三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］大宮／29・6・28／前8―12

〔註〕

（1）鶴三は昭和二十九年六月五日から十五日の間、同展出品作制作のため、天城山中でテント生活を送る。『静岡県博物館協会研究紀要』（平成二十八年三月）によれば、同年に「伊豆箱根風景美術展」と題した展覧会は熱海市観光会館（八月一日から十日）および県民会館（同十三日から十八日）の二会場で行われている。また「石井鶴三年譜」（『石井鶴三展―芸道は白刃の上を行くが如し―』（本市美術館、平成二十一年十月）には、昭和三十年に「箱根伊豆風景武術展《八丁池》」と記載がある。同展に関しては如上の開催記録が確認できたが、昭和二十九年六月の開催を裏付ける記録は未確認である。

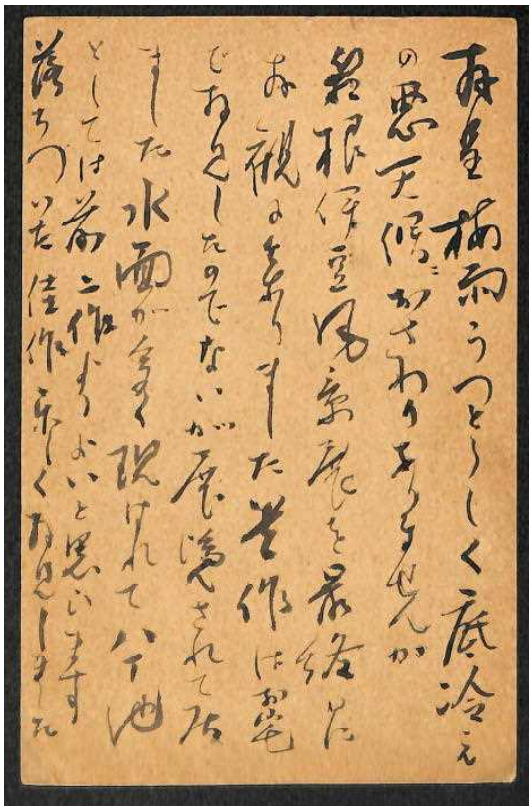
（2）箱根伊豆風景展出品作「天城山八丁池」。八丁池をモチーフとした油彩画は複数存在するが、昭和二十九年に制作された東京芸術大学芸術資料館蔵の「天城山八丁池」がこの時の出品作か。



郵便はがき

東京都 板橋区
板橋三丁目二六二
石井御主人様

大宮市[illegible]
[illegible]



再生 板画うつとしく底冷え
の悪天候がかさわりませんか
最根保重専専を最祈る
お祝状ありがとうございました 出作は毫
じゆうとしたのでないが展覧されて居
ました 水面が全く現れて八十四
としては前二作よりよいと思います
落ちついた佳作嬉しくありました

書簡78（書6―80）

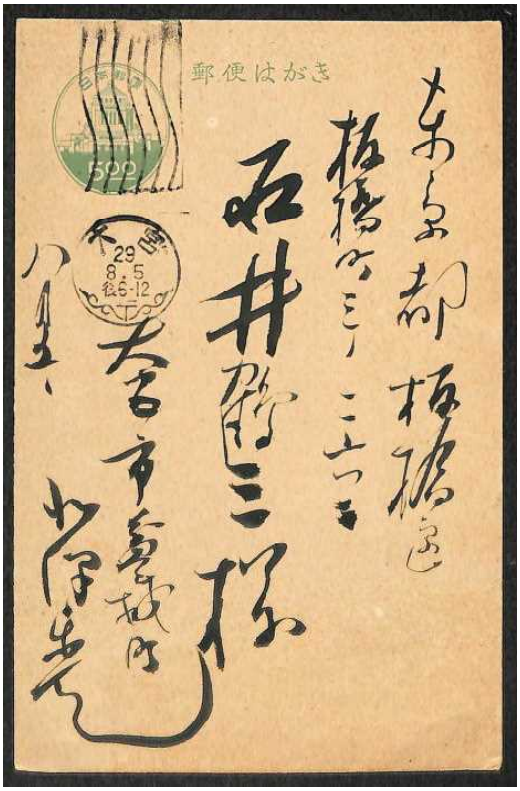
葉書　毛筆

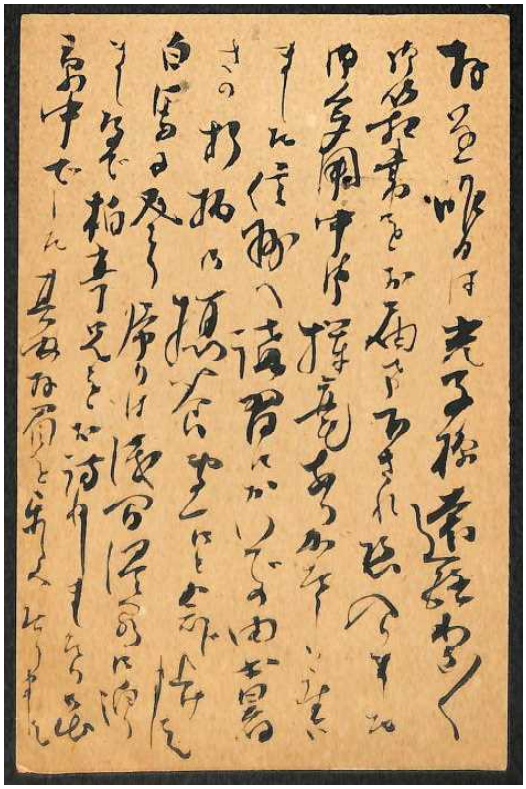
拝呈　昨日は光子様遠路わさ〳〵
御箱書をお届け下され恐入りました
御多用中御揮毫ありがたう御座い
ました信州へ講習[1]においでの由お暑
さの折柄御摂養専一にと念じ上げます
白馬に登り帰りは浅間温泉に泊り
ましたので柏亭兄をお訪ねしましたら御出
京中でした其内拝眉を楽しみ居ります

［受信者］東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］八月五日
［消印］大宮／29・8・5／後6―12

〔註〕

（1）鶴三は、長野県上田在住の春陽会会員倉田白羊の推薦で、大正十三年八月六日から十日の間、小県上田教育会主催の彫塑講習会の講師として上田へ赴いた。大正十四年、有志により上小彫塑研究会が結成され、鶴三は同研究会の講師として毎夏信州へ赴き彫塑の指導に当たった。昭和二十九年九月に上小彫塑研究会三十年記念展覧会、講演会が開催され、鶴三は「彫刻の話」と題して講演をした。





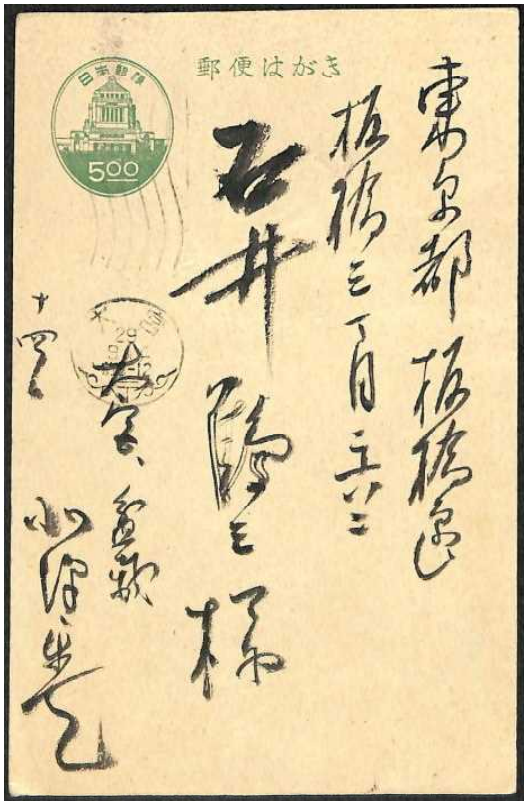
書簡79（馬場53―133）

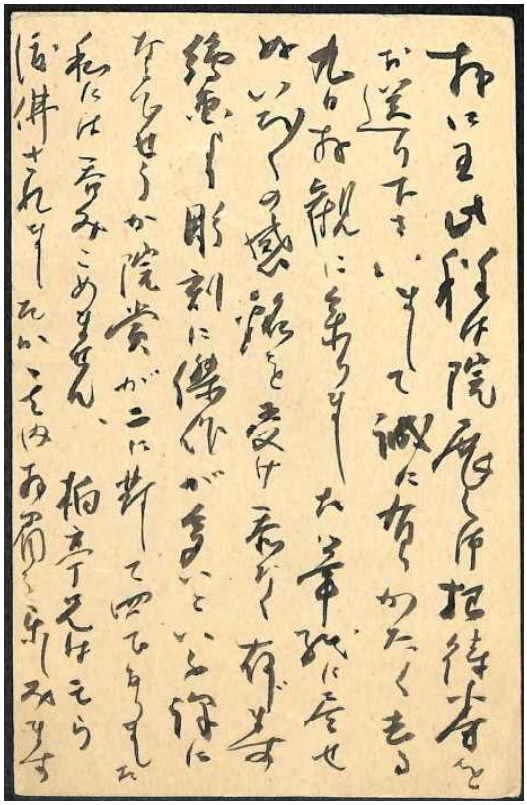
葉書　毛筆

拝呈　此程は院展[1]之御招待券を
お送り下さいまして誠に有りかたく去る
九日拝観に参りました筆紙に尽せ
ぬいろ〳〵の感銘を受け忝なく存じます
絵画より彫刻に傑作が多いといふ訳に
なるでせうか院賞[2]が二に対して四でありました
私には呑みこめません、柏亭兄はモウ
渡仏されましたか其内拝眉を楽しみます

［受信者］東京都板橋区／板橋三丁目二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮、盆栽／北沢楽天
［日付け］十四日
［消印］大宮／29・9・14／前8―12

〔註〕
（1）昭和二十九年九月一日から十四日まで東京都美術館にて開催の第三十九回院展。鶴三は「拱手立像」「女顔」を出品した。
（2）第三十九回院展において、絵画部門では清原斉・馬場不二の二名、彫刻部門では矢形勇・千野茂・田中太郎・山口信子の四名が日本美術院賞を受賞した。





書簡80（馬場５９―７８）

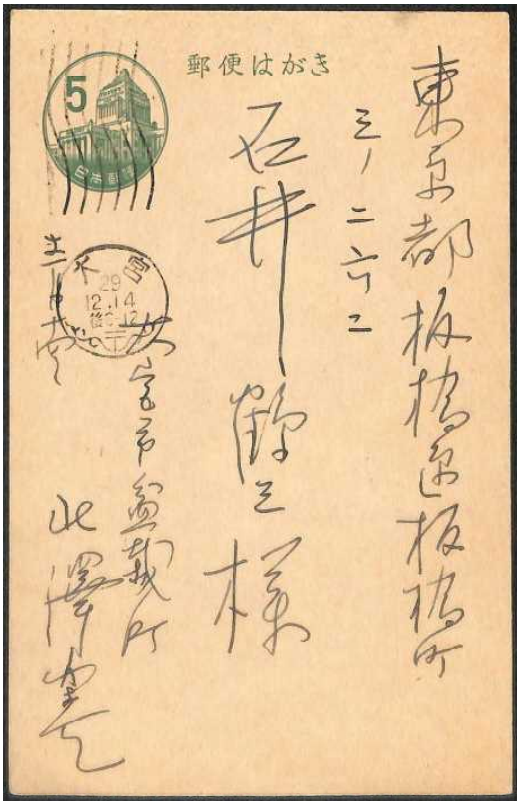
葉書　ペン

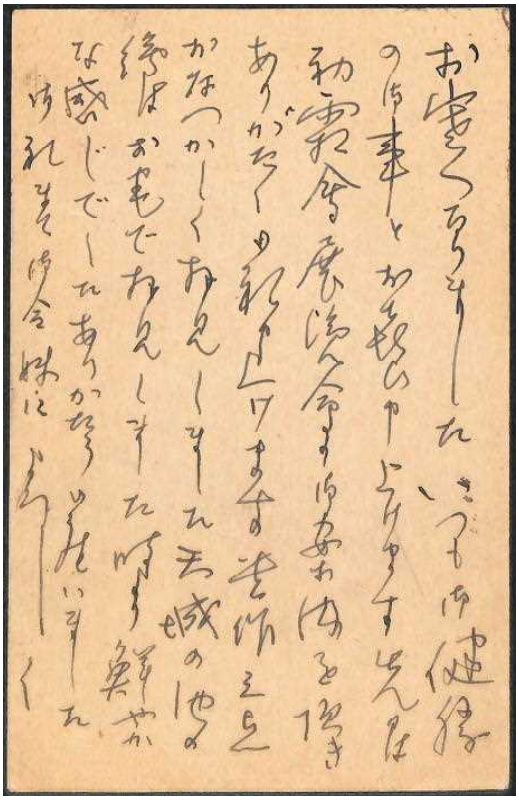
お寒くなりましたいつも御健勝
の御事とお喜ひ申上げます先日は
初霜会展覧会の御案内を頂き
ありがたく御礼申上げます貴作三点[1]
おなつかしく拝見しました天城の池の
絵はお宅で拝見しました時より鮮やか
な感じでしたありがたう御座いました
御礼まで御令妹によろしく

［受信者］東京都板橋区板橋町／三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］十二月十四日
［消印］大宮／29・12・14／後6―12

〔註〕

（1）この年の出品作は不詳だが、『石井鶴三日記　第三巻』（形文社、平成十七年三月）、昭和二十六年十一月十三日に「松原君と初霜展高岡行に就きとりはこび居られ小生のは水絵二クロッキ三木彫一持つてゆくことになり木彫裸女行歩は売れたので送らず」、昭和二十七年十月三十一日に「初霜会出品水絵二素描三木彫一他に木彫一追加　三越搬入」との記述があり、販促を兼ねた同展には鶴三は異なるジャンルの作品を同時に出品していたことがうかがえる。



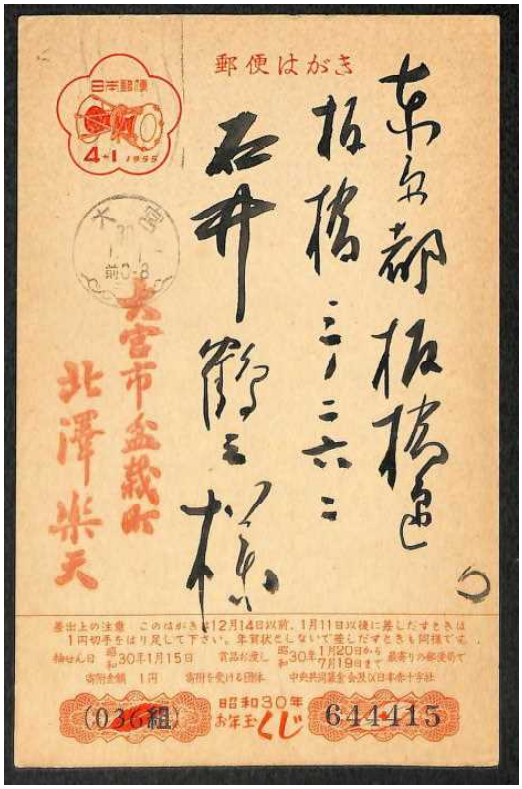


書簡81（書4―268）

葉書　毛筆

恭賀新年
乙未元旦
北沢楽天

［受信者］東京都板橋区板橋三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］《朱印》大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］大宮／30・1・1／前0―8



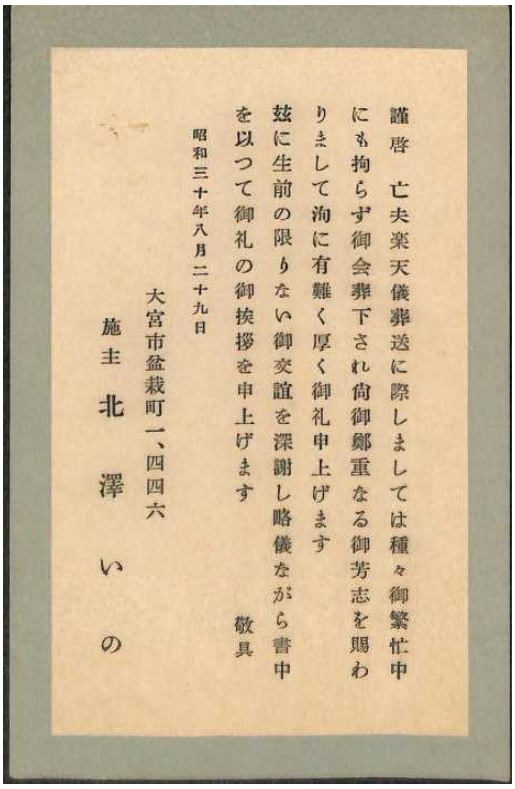
書簡82（書6―24）

葉書　印刷・鉛筆

《オモテ》
或る葬儀では受附で係りの人が
会葬者の〔住所氏〕名前をこの種のはかきに
書いてゐるのを見るが、それも如何かと
思ふに
これはまたあまりに略式過きて
お粗末の感ありまた失礼にも当
りはせぬか葬儀とか告別式とか
いつれは儀式であるから
相当なる儀礼は重んするのが至当であろう
二十八日告別式[1]の日これを
渡された
日附は二十九日とあり二十九日に差出すへき
筈のものと思ふがあまりに略式過きはせぬか

［受信者］《記載なし》
［発信者］大宮市盆栽町一、四四六／北沢いの
［日付け］《記載なし》
［消印］《消印なし》

〔註〕
（1）昭和三十年八月二十八日、大宮市宮町の東光寺で行われた北沢楽天の告別式。

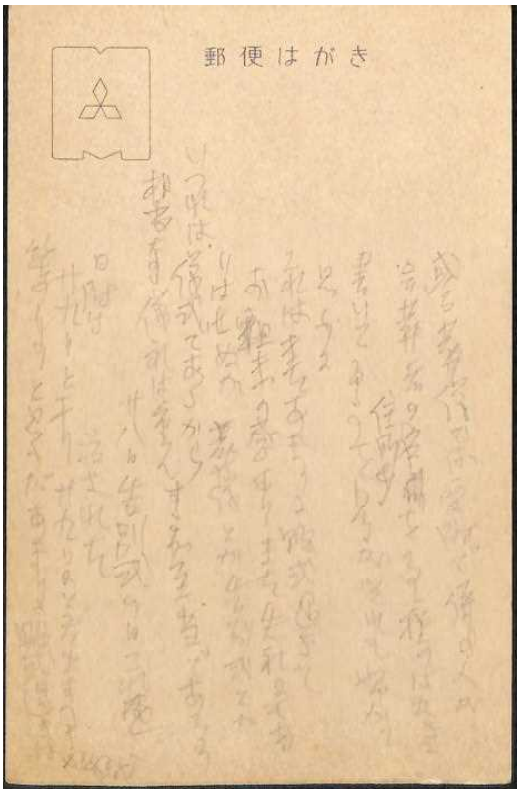


謹啓　亡夫楽天儀葬送に際しましては種々御繁忙中
にも拘らず御会葬下され尚御鄭重なる御芳志を賜わ
りまして洵に有難く厚く御礼申上げます
茲に生前の限りない御交誼を深謝し略儀ながら書中
を以つて御礼の御挨拶を申上げます　敬具

昭和三十年八月二十九日

大宮市盆栽町一、四四六

施主　北澤いの



書簡83（書6―527）

便箋　ペン

《「三月一日午后一時-二時／ゆくと返事す」と鉛筆書きあり》

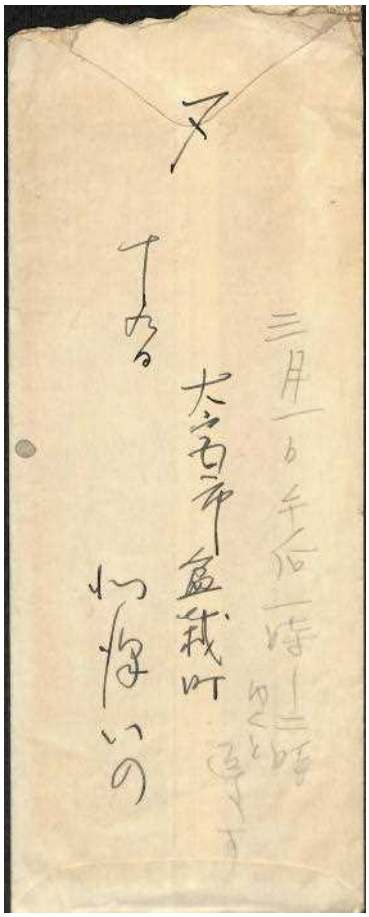
拝啓　その後は御ぶさた申上をりますがいよ〳〵御機嫌の御
事かと存上居舛旧年は別して御芳情いたゞきまして
ありがたくふかく謝上をります、私もおかげさまとどう
やら相過しをり亡夫のあとの営みなどになにやら心せわ
きし毎日を送りをりますが、実は先般来友人方
よりの御親切なる御申入れにつきまして一度おめにかゝり
御意見承り度存じ居ながらつひ御多用をおもひ
さしひかへてをりましたが一度ともかくも御寸暇をうかゞひ
おめにかゝり度御都合御伺ひ申上ます次第何卒
御都合およろしき時日に小時御面会お願申度
まことに恐縮ながらおはがきにても頂戴いたし度
そのうへにて御訪問申上度と存じをります何分共
よろしくお願申上ます、御令妹様にもおよろしう
お伝へのほど願上舛では右お願まで、

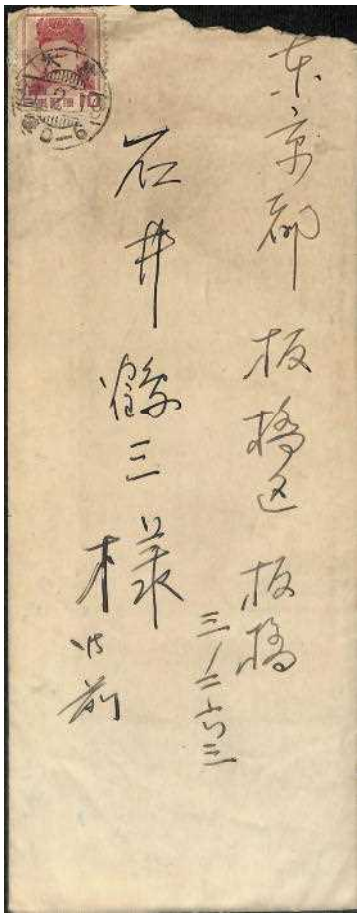
二月十八日

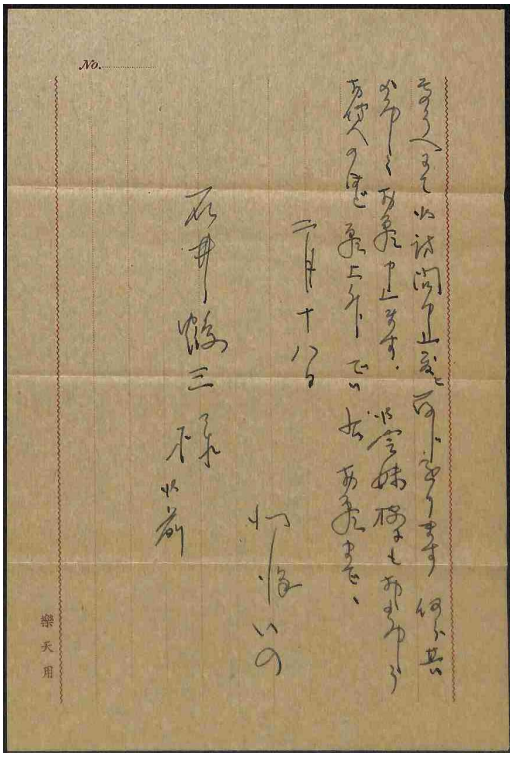
北沢いの

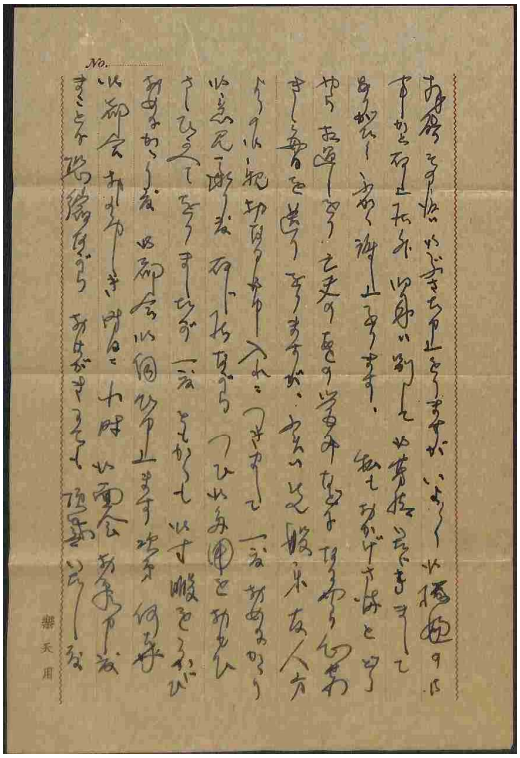
石井鶴三様
御前

［受信者］東京都板橋区板橋／三ノ二六三／石井鶴三様／御前
［発信者］大宮市盆栽町／北沢いの
［日付け］十九日
［消印］大宮／31・2・19／後0―6









書簡84（書4―1100）

便箋　ペン

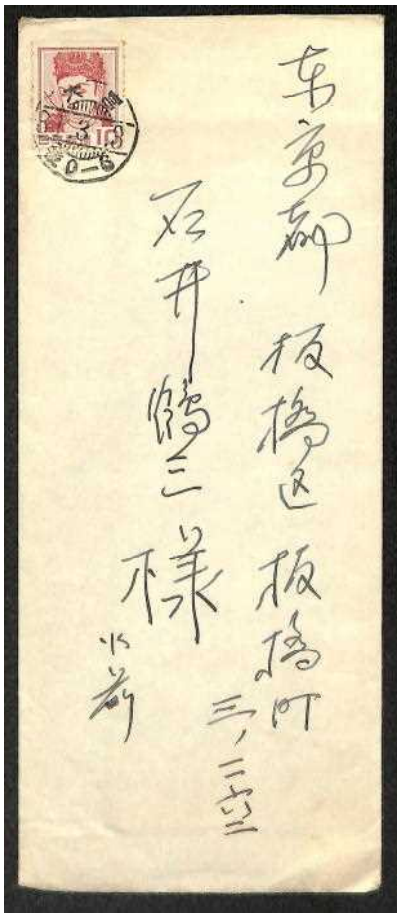
拝啓　昨日はせっ角御光来下さる思召の処おことわり
申上ましてまことに失礼且つ何とも残念に存し上ました、
今日十文字女学校[1]火災の見舞に参りましたので、
もし御在宅なればとお電話申上ました次第そのせつ
申上ましたやうに、七、八、は在宅の筈にて六、九、日は
予定が御座いますが、さしせまりたることにてもなく、
上野の方なれば私も時折出かけることも御座います
一度だけおめにかゝり御高見承り度存じをり舛、
実は、先般来故人に御厚意をよせられる友人方の
間になにか碑を建るか像をつくった方がよろしかるべ
しなどの儀がありまして、私、その場所を市の方に
交渉するやうとのことにて幸市長[2]はじめ市の人達
とはこゝろやすく、話をしておきましたが像或は碑
の事については一度貴方の御意見承り度存じ居舛
尤並々ならぬ大事業のことにて、これは私がほんそう
することゝもおもはれず、又この事の為に多数の方々に
御迷惑をおかけすることが私として何とも心苦しく
存ぜられますので再三御辞退の心もちを申出
ましたので御座いますが、一応石井先生の御話を
伺ふやうとのことにつき甚御多用中を御迷惑の
義とは存じますが、一度御めにかゝらせていたゞき度
お願申上ます私はまた、故人の出発より最終に
至る間の仕事の記録ともなるものをとりまとめて
一冊といたし皆様方の御芳情にお答申度念願
にて抜天君などに御協力お願申し折々二三の
方々にお集り願ってをりますがこれとてもどなたも〳〵
御繁忙のことゝて御めいわくを思ふと御遠慮申べき
ことかと気がひけてなりません、何分私たゞ独りにて身内の
ものは此方面には一向役立ちませんでこまります、
御芳情にあまへまして建碑それにかゝわることにつき
まして御一考いたゞき度御都合にて一度御めにかゝら
せていたゞきたう御願申上ます御家族様方へおよろしう願上
舛

北沢いの

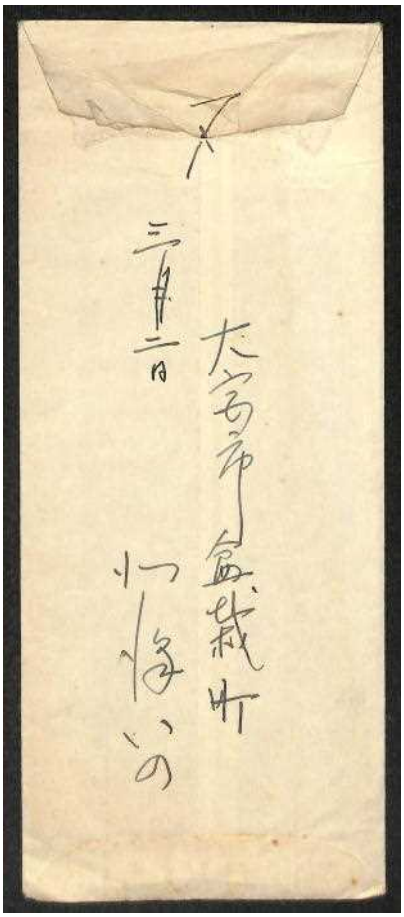
石井鶴三先生、

［受信者］東京都板橋区板橋町／三ノ二六二／石井鶴三様／御前
［発信者］大宮市盆栽町／北沢いの
［日付け］三月二日
［消印］大宮／31・3・3／後0―6

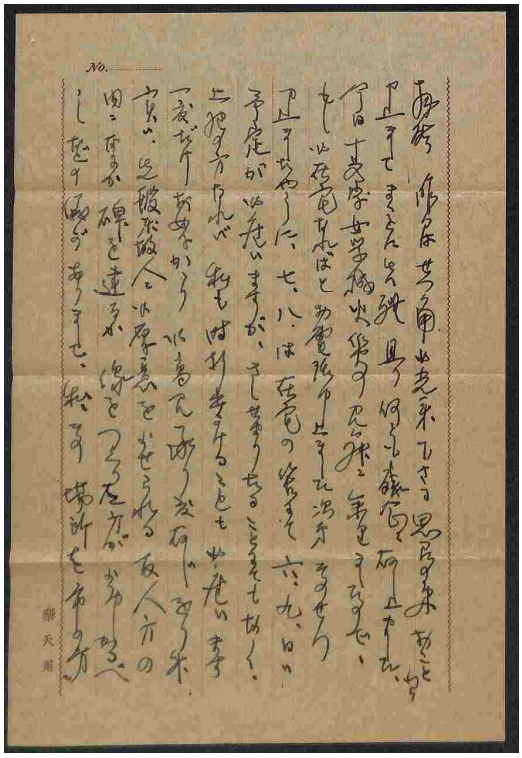
〔註〕
（1）大正十一年創立の文華高等女学校が前身。昭和十二年十文字高等女学校と校名改称。昭和三十一年二月二十九日午前二時頃校舎二階松組教室から出火、同教室と隣接の計四教室八十坪を全焼した。
（2）第七代大宮市長清水虎尾（在職期間は昭和三十年五月二日～昭和三十四年五月一日）。

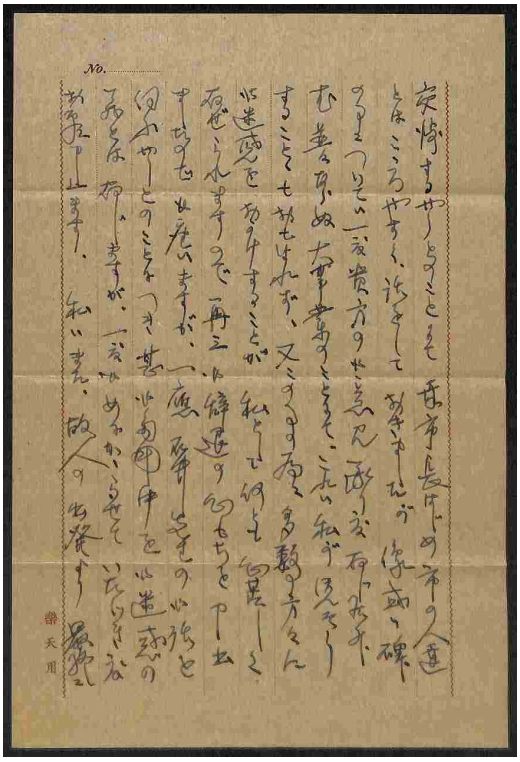


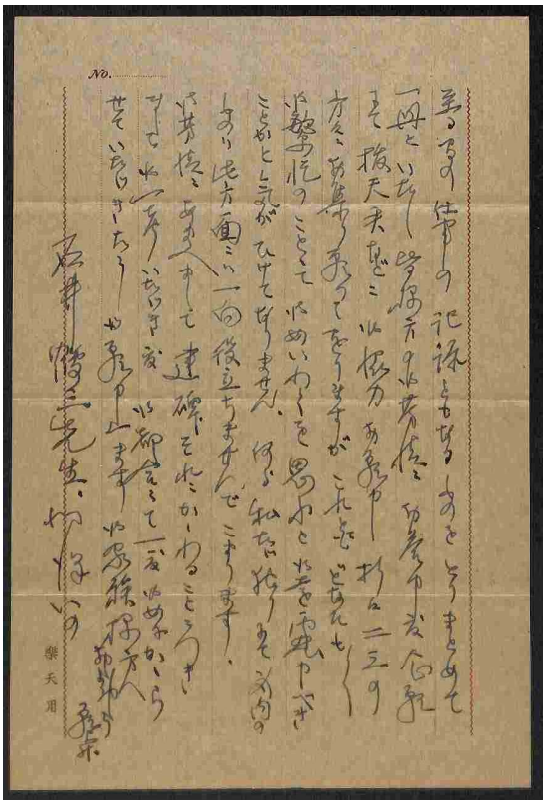
東京都 板橋区 板橋町 三丁目三番地
石井 隆三 様
小前



大分市 益丸町
竹内 ゆの
二月二日







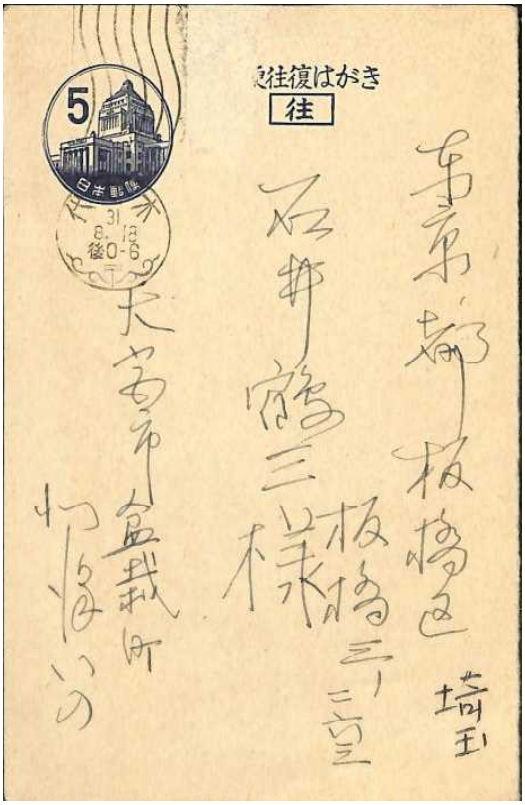
書簡85（書6―82）

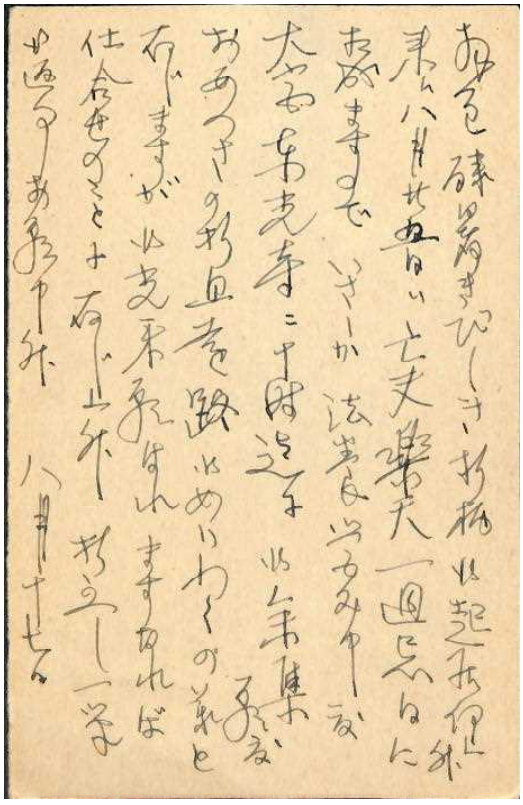
葉書　ペン

拝呈　残暑きびしき折柄御起居伺上舛
来ル八月二十五日は亡夫楽天一週忌日に
相成ますのでいさゝか法養営み申度
大宮東光寺[1]に十時迄に御参集願度
おあつさの折且遠路御めいわくの義と
存じますが御光来願はれますなれば
仕合せのことに存じ上舛折かへし一筆
御返事お願申舛
八月十七日

［受信者］東京都板橋区／板橋三ノ二六三／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢いの
［日付け］《記載なし》
［消印］代々木／31・8・18／後0―8
《別筆にて「埼玉」とあり》

［註］
（1）大宮市宮町（現・さいたま市大宮区宮町）の曹洞宗寺院。楽天の墓碑が同寺内にある。


往復はがき
往
東京都板橋区
石井鶴三様
板橋三ノ二六三
埼玉
大宮市盆栽町
北沢いの
5
31.8.18
後0-6

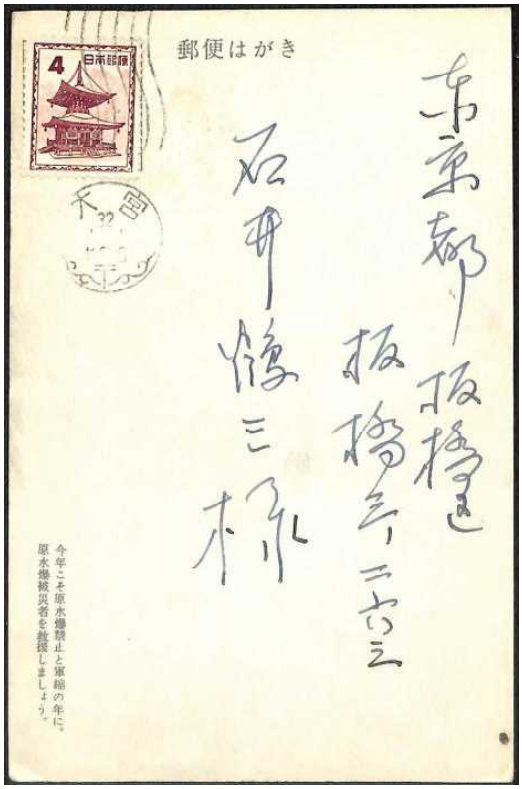


書簡86（書6―260）

おめでたう御座い舛
本年もどうそ
よろしく
お願い申舛

［受信者］東京都板橋区／板橋三ノ二六三／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢いの
［日付け］元旦
［消印］大宮／32・1・1／前□―□

葉書　ペン



書簡87（馬場５９―７７）

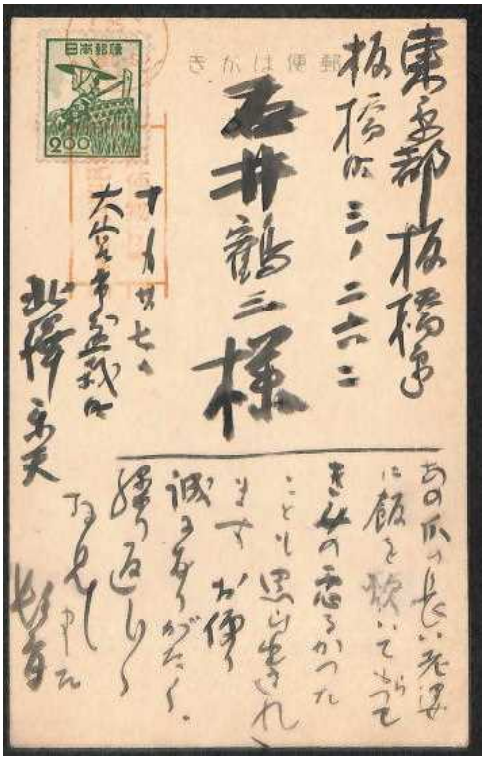
葉書　ペン

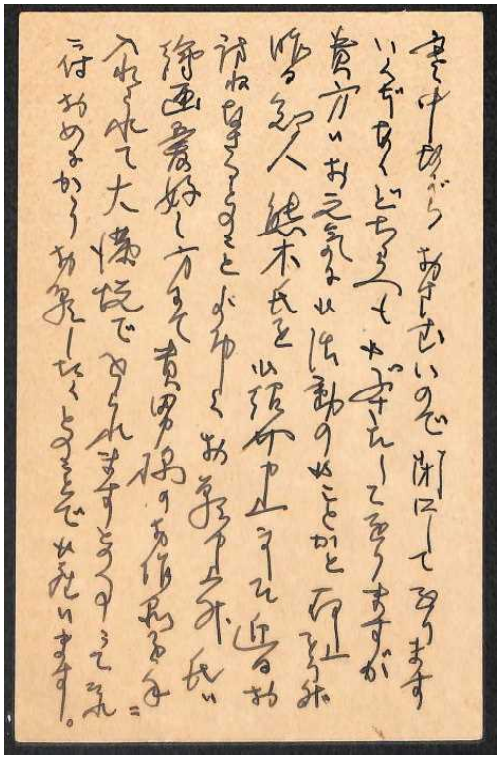
《ウラ》
寒中ながらおさむいので閉口してをります
いくぢなくどちらへも御ぶさたしてをりますが
貴方はお元気に御活動の御ことかと存上をり舛
昨日知人熊木氏を御紹介申上ました近日お
訪ねなさるとのことよろしくお願申上舛氏は
絵画愛好之方にて貴男様のお作品を手に
入れられて大満悦でをられますとの事にてそれ
に付おめにかゝりお願したくとのことで御座います

《オモテ》
御めいわくにならぬことを
おいのりしてをります
そのうちまたよい
機会を得ておめに
かゝりたいものと存じ居舛
では御自愛をおいのり申上舛
一月二十四日
北沢いの

［受信者］東京都／板橋区板橋／三ノ263／石井鶴三様
［発信者］大宮市／盆栽町／一五〇／北沢いの
［日付け］《記載なし》

［消印］大宮／33・1・24／後3―6





書簡88（馬場53―172）

葉書　ペン

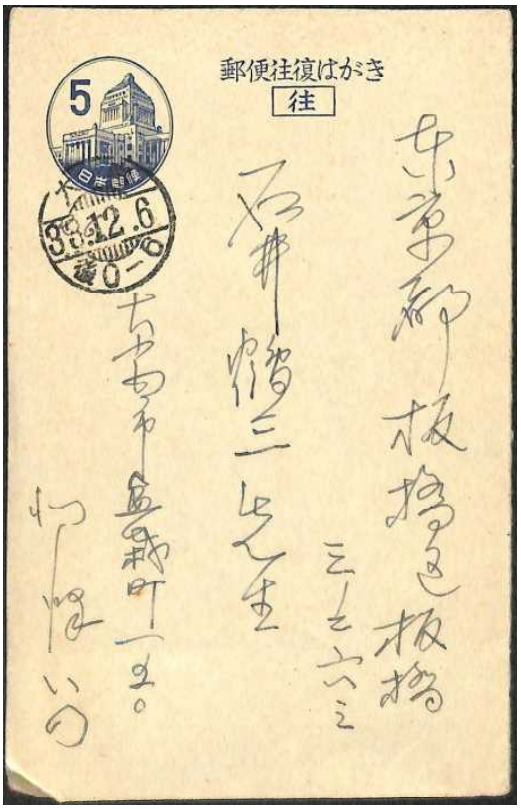
拝呈　その後は御ぶさた失礼申上居舛極月に
入りまして一しほ御多忙の御事と存じ上舛が
お元気にお過し遊しますことかと存じ舛私も
どうにかまづさしたることもなく過しをります
さて御近処のおちかしくする画をかく方から(1)
阪本繁次郎先生(2)への御紹介をおたのまれしましたので
すが目下の御住所がわかりませんので、貴方様なら
おわかりのことかと存じ御伺ひ申上舛どうぞ
お手数恐れ入りますがどうぞお教へ下さいますやうお願申上舛
何分ともよろしく願上舛。

［受信者］東京都板橋区板橋／三ノ二六三／石井鶴三先生
［発信者］大宮市盆栽町一五〇／北沢いの
［日付け］《記載なし》
［消印］大宮／33・12・6／後0―6

〔註〕

（1）浜崎敏雄、大正十三年～平成三年。新潟県新発田市生まれ。昭和三十四年一月四日、鶴三から坂本繁二郎の住所を教示された北沢楽天未亡人北沢いのの紹介で、八女の坂本宅を訪問、絵の批評を仰ぐ。向後坂本に師事する（『坂本繁二郎覚書―深心居随録―』踏青社、平成三年十二月）。

（2）坂本繁二郎。洋画家。明治十五年～昭和四十四年。福岡県久留米市生まれ。三十五年、久留米男子高等小学校時代同級だった青木繁と共に洋画家を志し上京、小山正太郎の画塾不同舎に入門する。三十七年、太平洋画会に入り制作を重ね、四十年「茂安村の一部」で第一回文展入選。四十一年東京パック社に入社、鶴三と共に同社でポンチ絵を描く。以後鶴三とは終生親交が続く。大正三年二科会の創立に参加。大正十年渡仏し、十三年帰国後は久留米に移住、以後東京へ戻ることはなかった。昭和六年八女にアトリエを構え、阿蘇をめぐり馬を題材とする作品を制作、「馬の画家」と定評を得るようになる。同十九年二科会解散（同二十一年再建）後は特定の団体に所属せず独自の画業を展開した。明治四十一年夏の木曽御嶽山登山や昭和二十五年十月の開田村行きなど、鶴三、楽天、繁二郎が揃って旅行することもあった。



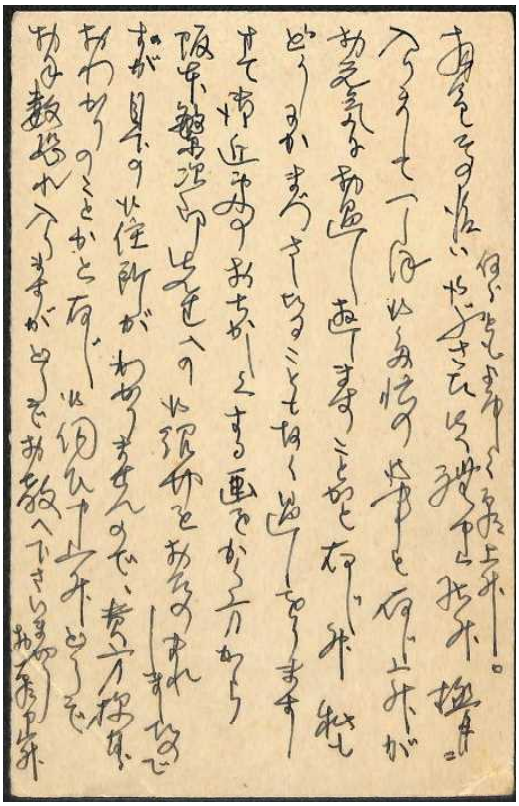
郵便往復はがき

往

東京都板橋区板橋
三丁目六番三号

石井清三先生

昭和三十五年五月一日。



書簡89（馬場53―242）

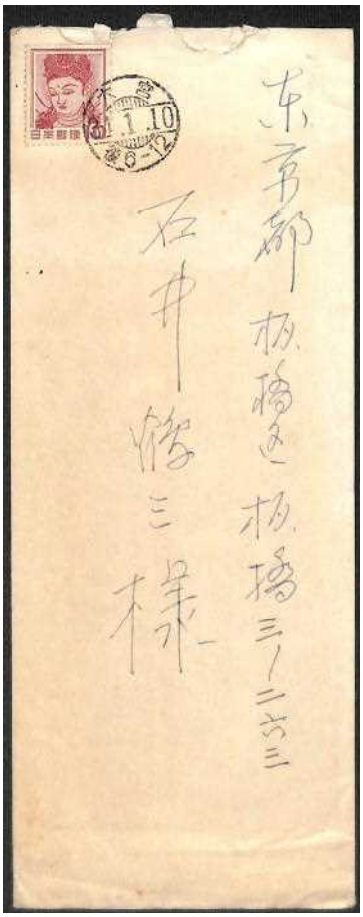
便箋　ペン

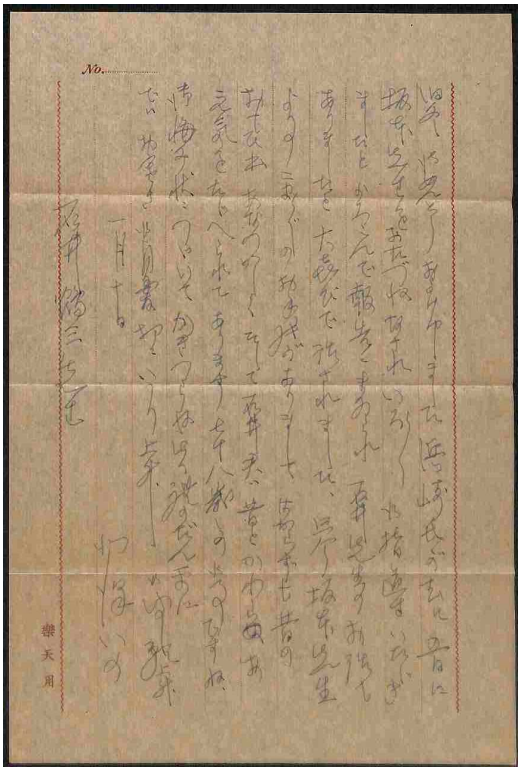
謹啓
柏亭先生御永眠[1]の御事紙上にて承知仕り
をしみてもあまりある御事に存上居舛、
貴兄御遺族様方の御なげきお力落し如何
はかりかと斯道のためにも残念至極のことに存し上舛
八日の御葬儀には御会葬申上る心ぐみの処、六日
あたりよりのおさむさ身にしみわたり外出不能
と相成遂に失礼申上ました次第御申訳なく平に〳〵
御ゆるし下さいますやうよろしく御伝へのほど願上舛、
大宮は東京よりはおさむいときめてはをりましたが、本年は
一しほに存ぜられ私の年のせいかとも存じをり舛
旧冬御めんとうおかけ申しました浜崎氏が去ル五日に
坂本先生をおたづねなされいろ〳〵御指導いたゞき
ましたとよろこんで報告にまゐられ石井先生のお話も
ありましたと大喜びで話されました、只今坂本先生
よりのこま〴〵のお手紙がありましてはからずも昔の
おもひ出おなつかしくそして石井君は昔とかわらぬお
元気をたゞへられてあります七十八歳との御事ですね、
御悔み状につゞいてかきつらね失礼のだん平に御ゆるし願上舛
ではお寒さ御自愛切にいのり上舛、
一月十日　北沢いの

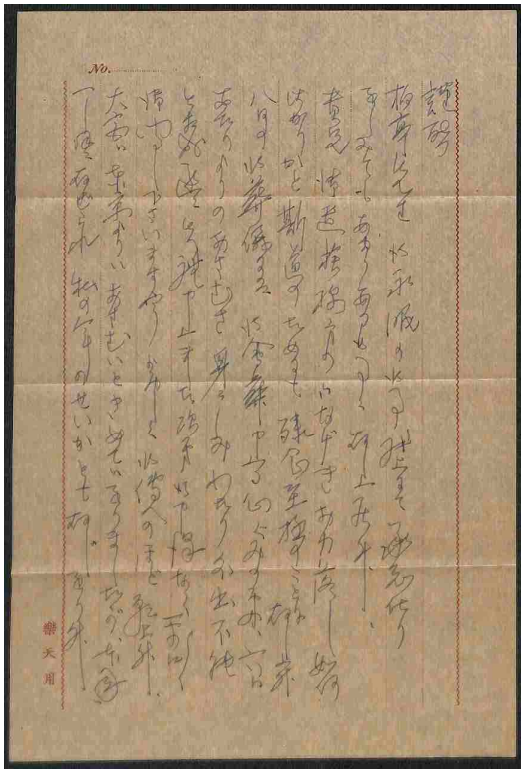
石井鶴三先生

［受信者］東京都板橋区板橋三ノ二六三／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町一五〇／北沢いの
［日付け］一月十日
［消印］大宮／34・1・10／後6―12

［註］
（1）石井柏亭、昭和三十三年十二月二十九日没。







書簡90（書6―78）

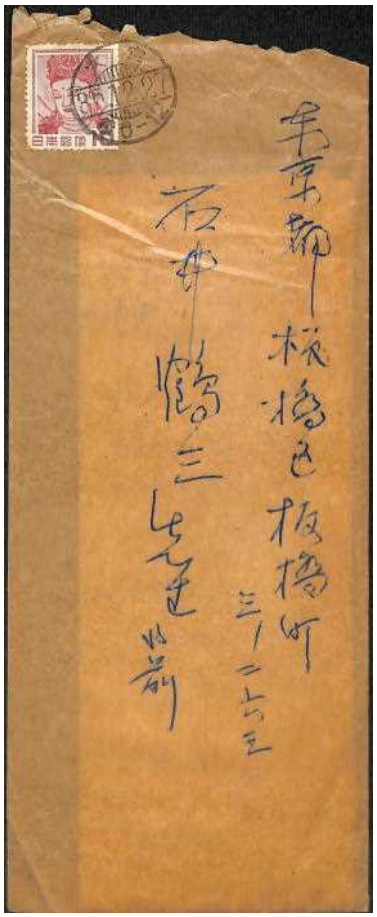
便箋　ペン

年内残り少なくをしつまり御多忙の程お察し申上舛
おもひ乍ら御ぶさたに打過ぎ失礼申上をります
さてかねてお引受けいたゞきをります亡夫胸像の義　私も
此頃は日に〳〵おとろへを感じ心細き次第にて来春は
ぜひ一度場所御見もんにお出ましいたゞきどうか私の丈夫
のうちに拝見させていたゞくはこびにいたし度と切望いたし
をります先般来一度おたづね申上てお願ひをとおもひ
乍ら遂に今日と相成ました次第とうぞあしからず
おゆるしの上来春はぜひ一度お出ましいただき度せつに
お願ひ申上舛、ではとうぞ右よろしく
御大切に御自愛のほどおいのり申上舛、
十二月二十七日

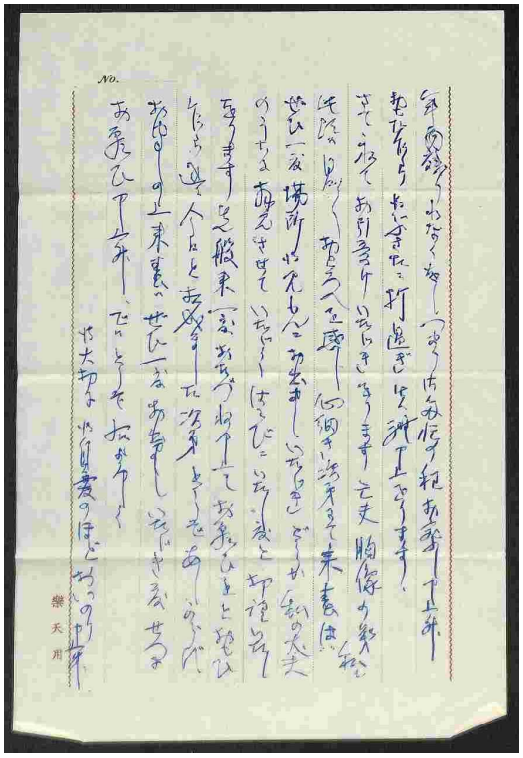
北沢いの

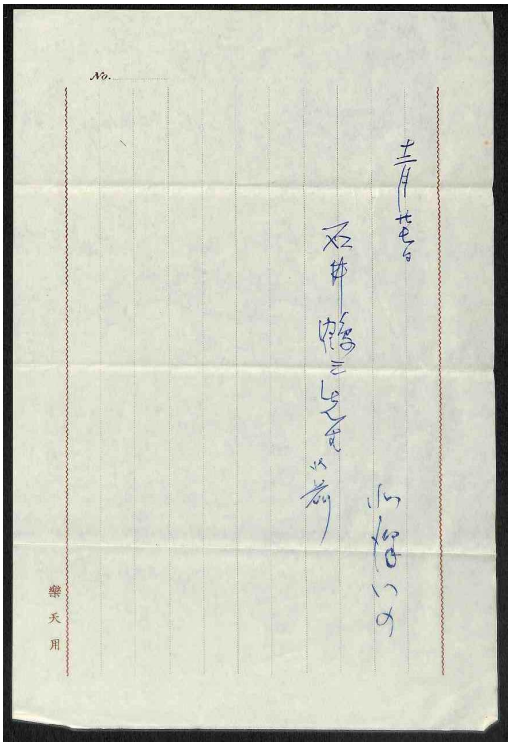
石井鶴三先生
御前

［受信者］東京都板橋区板橋町／三ノ二六三／石井鶴三先生御前
［発信者］大宮市盆栽町一五〇／北沢いの
［日付け］《記載なし》
［消印］大宮／35・12・27／後6―12


東京都
板橋区板橋町
三丁目二六三
石井
儀三
様
前

大変な
御戦死
御悔いの


樂天用

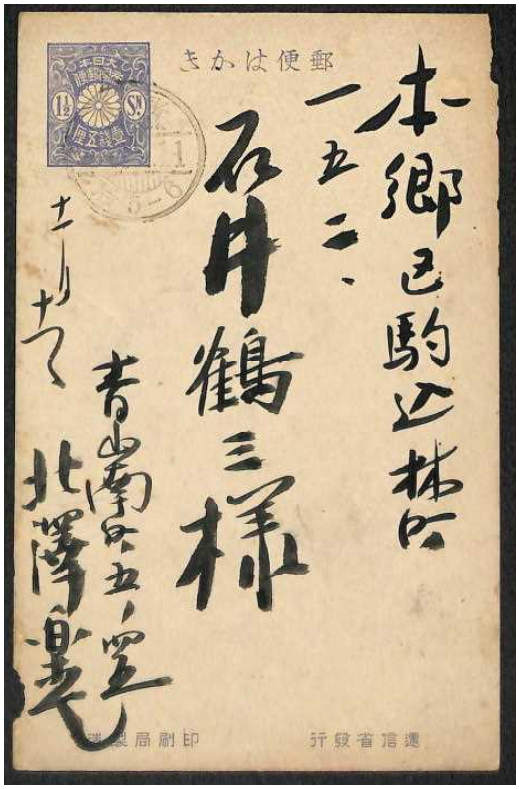

十月廿七日
石井儀三様
御前
御悔いの
樂天用

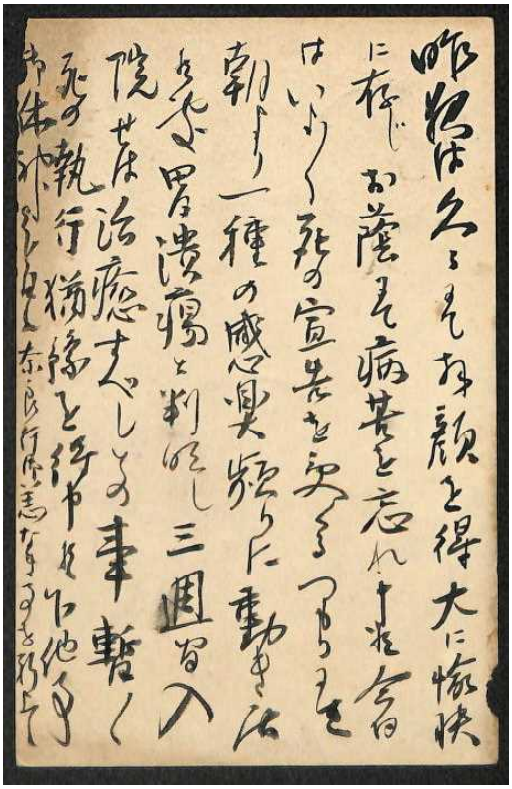
書簡91（高1―245）

昨夜は久々にて拝顔を得大に愉快
に存じお蔭にて病苦を忘れ申候今日
はいよ〳〵死の宣告を受くるつもりに候
朝より一種の感興頻りに動き居
候処胃潰瘍と判明し三週間入
院せは治癒すべしとの事暫く
死の執行猶予を待申候乍他事
御休神被下度候奈良行御恙なき事を願上候

葉書　毛筆

［受信者］本郷区駒込林町／一五二、／石井鶴三様
［発信者］青山南町五ノ四五／北沢楽天
［日付け］十一月十一日
［消印］青山／□・□・11／后5―6





書簡92（馬場５１―２９１）

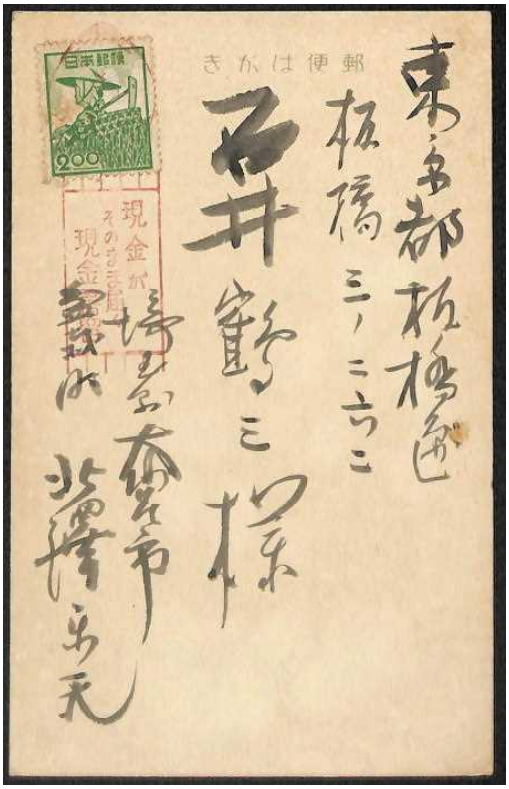
葉書　毛筆

新宮からのお便りありがたく拝見しました
那智の瀧(1)は
私共にも
楽しい思出てゞ
あります

吹きおくる瀧のしふきや青嵐

［受信者］東京都板橋区／板橋三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］埼玉県大宮市／盆栽町／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］大宮／□・７・４／□□―□《現金書留》

〔註〕
（１）和歌山県南東部、東牟婁郡那智勝浦町の那智山にある滝。国指定名勝。



書簡93（馬場５９―７１）

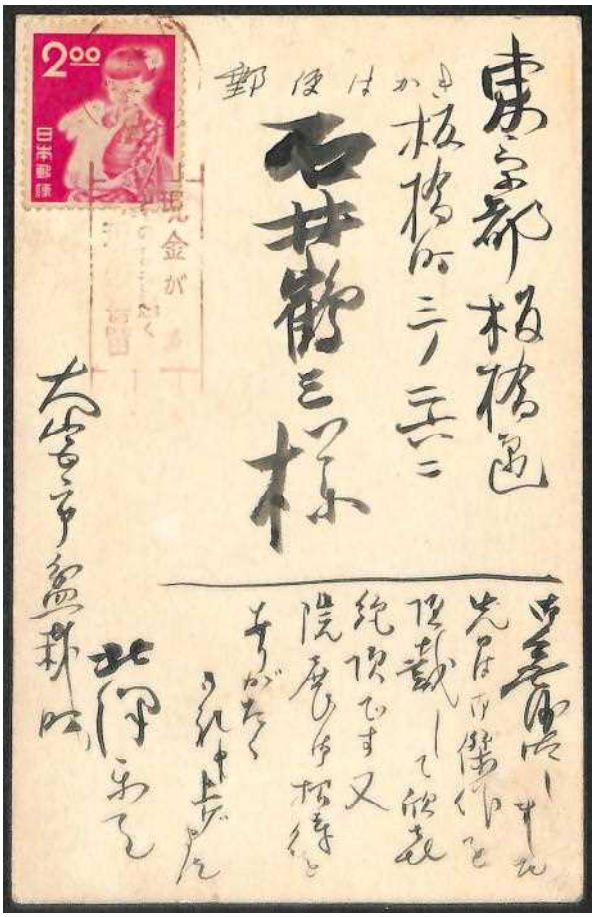
葉書　毛筆

《オモテ》
御無沙汰しました
先日は御傑作を
頂戴して欣喜
絶頂です又
院展御招待を
ありがたく
御礼申上げます

《ウラ》
浦賀から船で
房州にわたりました
天候不良の為
予定を繰上げて
昨日帰宅
しました

楽天

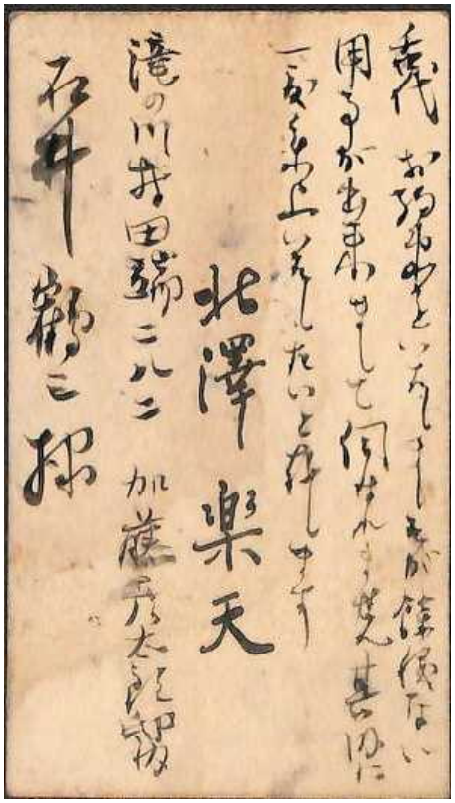
［受信者］東京都板橋区／板橋町三ノ二六二／石井鶴三様
［発信者］大宮市盆栽町／北沢楽天
［日付け］《記載なし》
［消印］大□／2□・□・□／後□・□


2.00
日本郵便
郵便はがき
石井御主人様
現金が
大阪市西区

書簡94（馬場５９―７９）

名刺　印刷・毛筆

《オモテ》
香代お約束をいたしましたが余儀ない
用事が出来まして伺はれません其内に
一度参上いたしたいと存します
《印刷「北沢楽天」》
滝の川村田端二八二　加藤彦太郎邸内
石井鶴三様



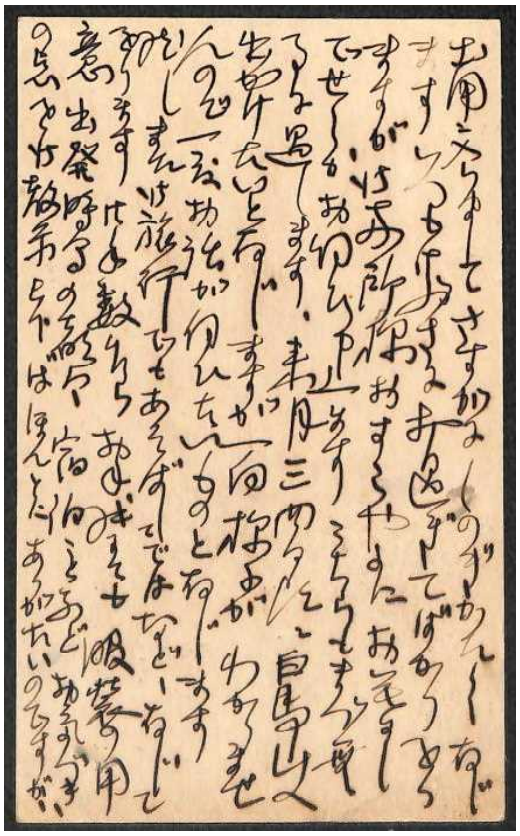
書簡95（馬場５９―８２）

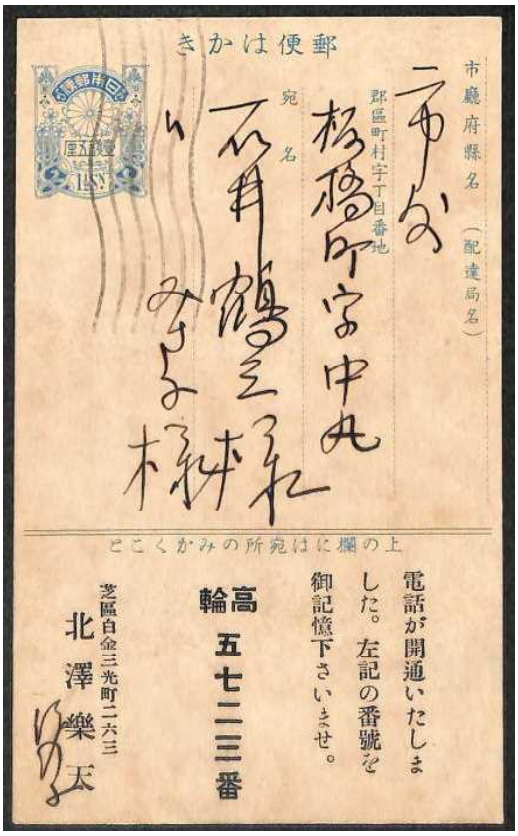
葉書　ペン

《ウラ》
土用に入りましてさすがにしのぎかたく存じ
ますいつも御ぶさに打過ぎてばかりをり
ますが御両所様おすこやかにお暮し
でせうかお伺ひ申上ますこちらもまづ無
事に過します、来月三四日頃に白馬山[1]へ
出かけたいと存じますが一向様子がわかりませ
んので一度お話が伺ひたいものと存じます
然しまた御旅行でもあそばしてではなどゝ存じて
をります、御手数乍らお手紙にても服装の用
意出発時間の都合宿泊ことなどお気づき
の点を御教示被下ばほんとにありがたいのですが、

［受信者］市外／板橋町字中丸／石井鶴三様／みさ子様
［発信者］《印刷》芝区白金三光町二六三／北沢楽天／《ペン書》いの子
［日付け］《記載なし》
［消印］《消印なし》

〔註〕
（1）長野・富山県境、飛騨山脈北部の後立山連峰の高峰。標高二九三二メートル。杓子岳・鑓ヶ岳とともに白馬三山とよばれる。大雪渓やお花畑がある。深田久弥「白馬岳」（『《日本の名山》６白馬岳』博品社、平成九年七月）には、次のような記述がある（十八頁）。
日本の登山家で最初に登ったのは、河野齢蔵、岡田邦松氏等の一行で、明治三十一年であった。そして白馬岳の記事が初めて現われたのは、その翌年であった。こんな風に白馬岳が世に知られることのおそかったのは、僻遠の地にあったからだろう。今でこそ一夜の汽車で山麓に達しられるが、半世紀前には、信州の奥の北安曇まで旅する人は、ごく僅かであったに違いない。




郵便はがき
市廳府縣名
郡區町村字丁目番地
宛名
電話が開通いたしました。左記の番號を御記憶下さいませ。
高輪五七二三番
芝區白金三光町二六三
北澤樂天

三、おわりに――解題にかえて

以上が、信州大学所蔵「石井鶴三関連資料」に含まれる、北沢楽天関連資料九十五点の全貌である。まずは、公開を快諾して下さった関係各位に、心よりの感謝を申し上げます。

北沢楽天に関しては、楽天晩年の邸宅跡地にさいたま市立漫画会館（昭和四十一年開館）があり、顕彰活動をつづけているが、その生涯や作品にアクセスするのは、思いのほか困難である。それでも、クール・ジャパンの一翼を担う日本のマンガ（MANGA）が国内外から（再）評価される中、日本近代漫画の先駆者として改めて楽天が注目されているようにも感じられる。北沢楽天生誕一四〇年・さいたま市立漫画会館開館五〇周年記念映画として、大木萌監督『漫画誕生』が制作され、すでに第三十一回東京国際映画祭で上映されたと聞く。今後、さらに楽天の活動が広く知られていく中で、本稿で紹介した資料群も、多様な興味関心／文脈から参照・活用されれば幸いである。

そのための一助になることも企図しながら、今回紹介した楽天関連資料を六種に大別し、その概要を示しておきたい。

第一に、『東京パック』時代を中心に、楽天と鶴三間の仕事に関する連絡状がある（書簡1～7、10～17、20～23、26、27）。これらからは、鶴三の体調不良を契機として浮かび上がる職場の具体的な実情や、楽天をはじめとした『東京パック』メンバーとの関係性・信頼感などがうかがえる。

第二に、各種美術展招待について、楽天から鶴三に宛てたお礼状がある（書簡25、35、39、40、44、62～64、66、68、74～77、79、80）。直接仕事上の関係が切れた後も、長い期間にわたり、鶴三は自らが出品した各種美術展の招待券を送り、それをうけて楽天は観覧に行き、お礼や感想を送っていたのだ。そこには、具体的な作品名にまで論及した楽天の批評も読まれる。

第三に、国内外を旅する楽天からの旅信があり（書簡42、45、51～54、59、73）、第四に、未使用のものも含めた年賀状、第五に、各種連絡状がある。いずれも、両者のごく親しい私的なつきあいを示すと同時に、それぞれの道で芸術家として生きる二人の文化交流史ともなっていよう。

こうした、独特な二人の関係の近さを端的に示すのは、「久しく御目には／かゝりませんが私は心理的に／屢々君と対話した事が／あります」（書簡25）といった楽天の文言であろう。

第六として、楽天の死後、北沢いのからの鶴三宛書簡がある（書簡83～90、95）。楽天と鶴三とが家族ぐるみの付き合いであったことにくわえ、夫の死後、いのが鶴三を頼っていた様子もよくわかる。

期間でいえば明治四十年～昭和三十五年まで、半世紀以上に及ぶ楽天と鶴三の、公私にわたる関係を如実に読みとることができる本資料が、多くの人々の目にとまれば幸いである。

最後に、ここまでの書簡調査に際しては、信州大学附属図書館のスタッフのみなさま、特に、折井匡氏、後閑壮登氏、石坂憲司氏の厚いサポートを受け、また、書簡の画像データ作成は信州大学学術研究院（教育学系）の大島賢一氏のお力添えを得た。ここに記して、著者一同よりの謝意にかえさせて頂きます。

（松本和也）

＊本研究はJSPS科研費 JP16K02420,JP17K02451の助成を受けたものです。